あまり例は無いが、必ず何かしら無理を云ふか、遊びのお相手をさせられるとか、或は何の彼のと手數をかけさせられたものであるが、此の石井君、それから「芳賀自習漢和辭典」の芳賀剛太郎先生などは古い關係の著者としては良い方々であつた。

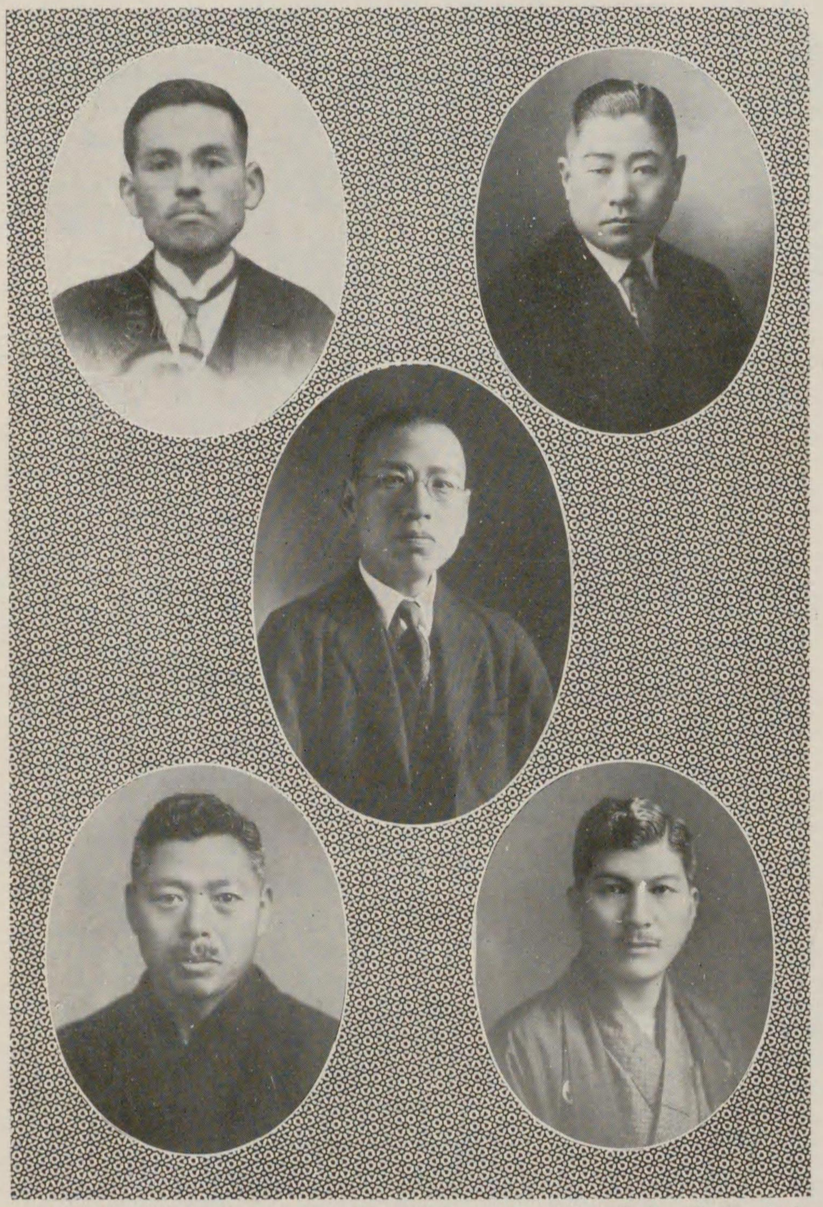
「實際園藝」以後に創刊された雜誌に「スポーツ」があり、「副業雜誌」があり、新光社名で出てゐる「世界知識」がある。これらは何れもまだ歴史の淺いもので、「スポーツ」は元博文館に居たといふ本郷春台郎君といふ天才肌の文學青年が個人的にやつてゐた「ゲーム」といふ安雜誌を、彼が經營に困つてゐる儘につい引き受けたところ、どうもうまく行かずに、とうとう彼の死亡後に於いて廢刊すると共に、昭和六年四月其編輯部員を中心に早稲田の野球の主將森茂雄君を迎へて始めたものである。

「副業雜誌」といふのは、昭和五年十月一條仁君が「家禽と家畜」といふ雜誌を始め、アンゴラ兎やレッキス兎の養殖を奬勵したら雜誌も兎も大いに賣れるといふところから始つたものであつたが、成績香ばしからず、遂ひに「副業雜誌」と改題したものである。一條仁君は法學士農學士といふ肩書きで、大いに經倫有り氣に思はれたので、兎を買ふために他の社員を付き添はして英國くんだりまで出張させたが、雜誌も養兎事業も悉く失敗であつた。

此の本郷君と一條君のことは、後項で詳しく述べることゝしよう。

又「世界知識」は新光社が豫約出版として成功を收めた「世界地理風俗大系」の讀者層を狙つて、昭和六年十月から創刊されたものであつて、これは新光社ものとして仲摩君が主力を注いでゐるのと、滿洲事變、上海事件の發生により、夫れ等の臨時增刊を發行するや何れも素晴しい賣行きを見せ、成績良好であるのはうれしい。

株式會社新光社重役及關係諸氏



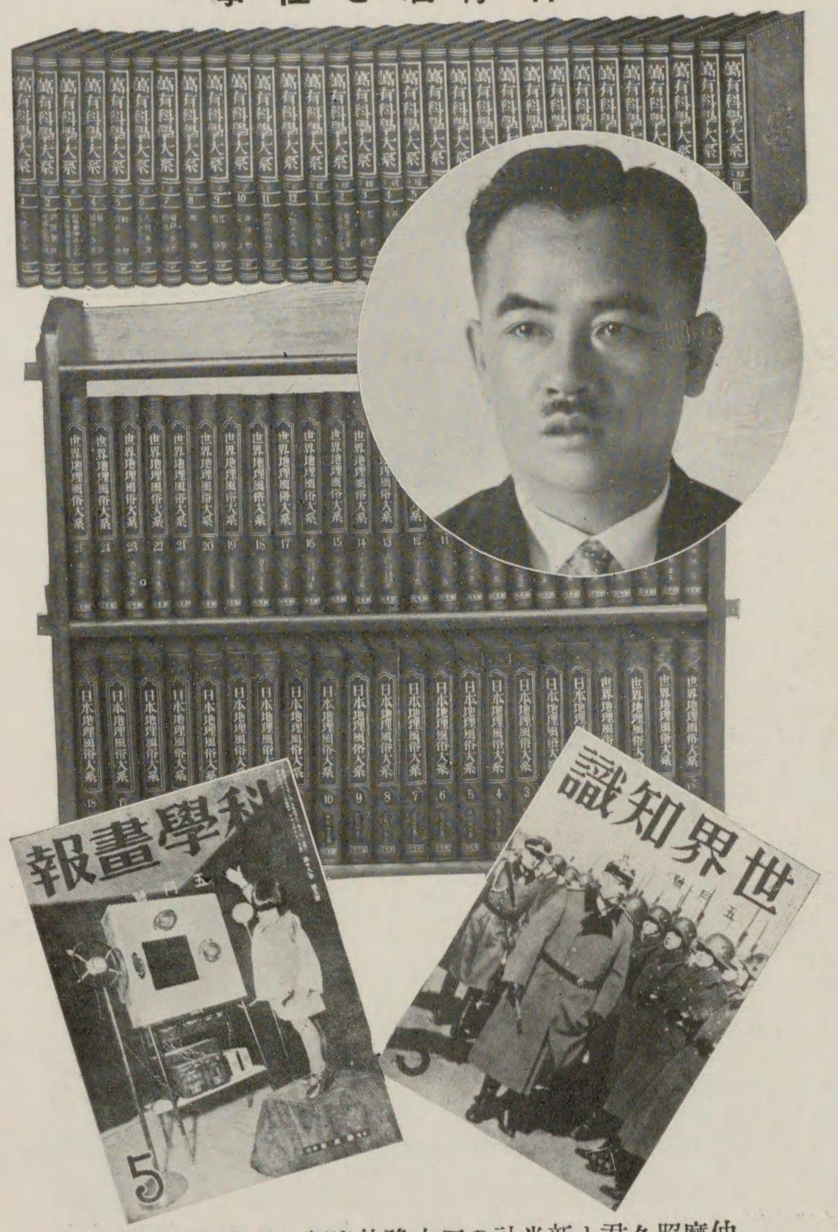
上右　重役　大島久吉君・左上　重役　猪木卓二君　中　重役　岸本淺次郎君
下右　顧問辯護士　田代京平君・左下　加工製紙專務　井口誠一君

新光社と私

株式會社新光社を語る前に、順序として先づ舊新光社の經營者**仲摩照久君**と私との關係を書かねばならぬ。仲摩君は私より三ッ違ひの兄さんで、仲摩君を知つたのは私の廿四歳の春のことであつた。當時仲摩君は同鄕の先輩**十時權次郎氏**等と相計り、月刊「美人畫報」を發行したのであつた。此雜誌には博報堂の御大**瀨木博尙氏**も關係があつたといふことである。丁度發刊の時であつた。その發刊披露のため築地の料亭「綠屋」へ、主人代理として招待されたのが、仲摩君を始めて知つた機會なのである。其席には東海堂の**安藤修治君**及び取持ち役として仲摩君の友人で、例の松島事件の元凶として一躍天下に醜名を馳せた**安藤亮氏**もゐた「大いに賣つて貰ひたい」「大いに賣りませう」といふ譯で飲んだ結果は、恰も十年の知己の如く、末は二次會と到々誘惑されて了つたものである。

當時の仲摩君は今と違つて遊びの方は私より上手であつた。二人挽きか何かで、吉原ま

仲摩君と仕事



仲摩照久君と新光社の三大豫約出版に二大月刊雜誌

で俥を飛ばしたのであつた。其時分の仲摩君は仲々の酒豪で、酒の方でも亦、私より一枚上手であつた。かうした事で仲摩君とは、交際の始めから深い因縁を持つて居たのである。「美人畫報」も一ケ年計りで廢刊となつたので、仲摩君は**青木孝氏**經營の「飛行少年」に入り、夫より五年目の大正五年九月、私の誠文堂創業より後るゝこと四年、新光社を創立したのであつた。處女出版は**森田義郎氏**著の「調整術」といふ健康法の書であつた。私が一手に引受け發賣し、仲々よく賣れたものである。

其後月刊「世界少年」を發刊せられ、亦私の紹介に依つて**原田三夫君**との話が纏り月刊「科學畫報」を發行した。其間各種の單行本を續々と發行し、其數三百餘に及び、就中**大泉黑石氏**の「老子」の如き、當時の洛陽の紙價を高からしめたものであつた。更に又「佛教經典叢書」は小當りを見せるなど順調に發展しつゝあつたが、彼の大正十二年の大震災に何萬圓かのストックは燒く、震災直前に發表した**高楠順次郎氏**の空前の大出版「國譯大藏經」は發行不能に陷る等、八ケ年の建設を一夜に灰燼に歸した計りでなく、再起に就て仲摩君自身すら當惑したのであつた。震災の直後九月二十五日であつたと記憶してゐるが、

仲摩君は私の立退先小石川戸崎町へ尋ねて來られ、具さに新光社の實情を開陳して「科學畫報」の讓受、發行を懇請し、更に發行進行途上にあつた**石井重美氏**著「世界の終り」**苦米池貢氏**著「趣味の無線電話」の發行も自分の手で出來ぬから小川君何とかうまい考へはないかと相談されたのであつた。

私も誠文堂の復興に多忙なると「科學畫報」の讓受條件に少しの開きがあつたので「趣味の無線電話」だけ貰ふことを取極め、他はお互に考慮しようと分れたのであつたが、其後仲摩君は出資者が見附かつたので「科學畫報」は自分の手で繼續發行し、亦「世界の終り」も發行したのであつた。私の貰つた「趣味の無線電話」も賣れたものだが、この「世界の終り」も又よく賣れたものである。其勢ひに任せて新刊は續々と出版する新雜誌「少年グラフ」は出す。ラヂオ流行を見越して遞信省無線係官諸氏を集めて無線科學講座を出すし、又一冊十圓の「萬有科學大系」全六卷の豫約出版を發表するなど其活躍仲々華々しきものであつたが、「萬有科學大系」の發行が豫期の通り進捗しないのと、聊か力以上の仕事をしたゝめに、大正十五年一月十日破綻整理の已なきに至り私も千何百圓かの被害者の一人となつたのである。

處が之が整理は仲摩君が當初考へてゐたやうに捗々しく行かないので、何でも一月の末だつたかと思ふが、仲摩君から電話があつて、日比谷陶々亭で仲摩君と會見し、これが整理の相談を私に依頼されたものである。が、何しろ負債總額は二十八萬圓之に對する資産と目さるゝものは「科學畫報」の發行權幾何、ストックは高く積つて見ても五千圓以内で、之では整理費用でなくなるし「萬有科學大系」は三千五百の會員があつて當時第一卷を發行し、あと五冊の配本利益があるけれども、入會金や一時拂ひの預り金が一萬八千圓もあつて、夫れにあの大冊では半年に一冊配本もむづかしいと來て居るので、先づあり餘つた金がない以上、やらぬが安全といふ代物であつた。で、正直なところ私は全財産と權利一切を提供して再び出直すことを仲摩君に薦めたのであつた。

仲摩君としては「畫報」も將來がある。「萬有」だつて出版界に三ツとない大出版で評判がよい、何れは何とかなるから石に嚙りついてもやつて行きたい、小川君是非何とか考へて呉れと切なる頼みであつた。生きる方法がないではないが、高利貸が七八人も居るし、

「畫報」を覗つて居る親友に屬する債權者三人が連合して、「畫報」を切り放して渡せと迫つて居る關係もあり、法律上仲々面倒も起る患があるので、私も聊か途方に吳れざるを得なかつたのであつたが、意を決して、債權者の利益擁護を目的として「科學畫報」及「萬有科學大系」を中間經營とし、私が無報酬で發行繼續することにしたのであつた。仲摩君もよかろうと云ふので、仲摩君の友人辯護士田代京平氏の事務所を訪問し、法律上疑義のないやう研究すると共に、覺書を交換し、其日から仕事にかゝつて、二月廿三日に一般市場へ出した科學畫報の三月號は小川菊松名義で發行したのである。

云ふまでもなく破產に瀕した場合、財產を隱匿したり、情實上一部債權者へのみ便宜を計ることは、詐害行爲として法律上禁じてゐるのである。仲摩君が三人の友人債權者へ、若し此「畫報」の發行權を渡したなら夫れは双方とも法律上の違反である。

私の取つた行動は仲摩君では發行が出來ぬ、休刊すれば讀者が減る、讀者が減れば財產價値が下るのだから、債權者擁護に外ならぬことは誰れの眼でも分るのである。さうして一方債權者の雲行を見て合理的解決の日を待つたのである。かうした整理に有りがちの紛多の波瀾曲折はあつたが機會は遂に來た。それは同年七月十一日の日であつた。東京區裁判所間判事係りで强制和議が成り立ち、小川菊松が營業資金三萬圓を出資し、其利益に依り利息は免除、一年据置き向ふ十ヶ年間に負債償却することゝなつたのである。

此和議成立までには債務額及人員に於て三分の二の同意を得る爲に、乘りかゝつた船で時間と金錢と幾多の犧牲を拂つたことは勿論である。又和議決定までには、裁判所に於ける其集會の席上高利貸代表の辯護士や、「畫報」を覗らつて居た仲摩君の親友三人を代表した某君等が、和議に極力反對し、緊張した場面も尠なくなかつたのであるが、凱歌は我方に擧がつたのは愉快であつた。かくして仲摩君は再び世に浮び上つたのである。

夫れからの新光社は組織を改め、資本金一萬五千圓の株式會社とし、私が社長として全責任を帶び、主として營業方面を擔任し、仲摩君は重役として編輯を擔任して、今日に至つたのであるが、此小資本金で十年間に二十八萬圓の負債償却を履行せねばならぬのだから之が經營たるや實にむづかしいものであつた。人物の經濟や、經費の節約は勿論、交際費は社長個人負擔とする等、あらゆる無駄を省き、能率を擧げ、更に仕入單價の引下げを行

つたのである。危い取引先には、危險負擔があるから、高く賣るのは當り前である。さうした理由で仲摩君も、高いものを買はせられたのであつた。私が迷惑かけたのではない。人の借金を拂つてやる爲めに私が作つた會社である。誠文堂並に引下げねば買つてやらぬ、と舊新光社がかけた迷惑などは、少しも考慮せずにやつたものである。が、かうして無駄を省き、能率を擧げたとて、高が一萬五千圓の資本金では、その償却すべき一ケ年の債務額二萬八千圓は、資本金の十九割の純益を擧げねばならぬのだから、完全なる義務の履行は望み得ない事であつた。

其處に行くと仲摩君は、仕事好きだけに資本の額では新會社は威張れないが、重役は何れも諒解ある得意先の大物計りだ。尻込み計りしてゐては此借金は到底返せつこはない。確信ある仕事なら大いに積極的にやり、十年賦の處は五年で返し、一つ借金返しのレコードを造つてやらうではないかと、次から次に新らしいプランを作つては相談するのであつたが、私としては、此際出來る丈け愼重の態度を取つた方が好いと思つたので、逸る仲摩君を押へて、ひたすら時期の到るを待つてゐた。彼れ是れする內に「萬有科學大系」も一卷は一卷と刊行が進み、六冊の內、五冊出來たので、第二回の豫約募集をした處、之れは又非常な當りで、其利益で第一回の和議配當金七分五厘を拂ひ得た。

之は株式會社新光社が出來て僅か二年の後で、和議債權といへば、兎角返らぬものと思つてゐる人も尠なくない折柄、約束通りに行かぬまでも、夫れに近いものが實行出來たことは、私が新光社整理を引受けた意義も立つて實に愉快に堪へなかつた。

かくて新光社も漸次其緒について來たので、愈々仲摩君の積極方針を容れて、乾坤一擲をやる事にしたのである。其第一の現れが「續萬有科學大系」全十冊、一冊十圓の豫約出版であつたが、之は完全に失敗であつた、それは充分注意したにも拘らず、正篇「萬有科學」の如く、進捗遲々として進まず、ために經費に倒れたのと、當時流行の圓本の影響によるためであつた。

第二が「世界地理風俗大系」全二十九卷、一冊二圓八十錢の豫約出版である。之れは亦素晴しい成功で、當時の出版界の羨望の的であつた。丁度圓本泥仕合の眞最中の頃とて、此「世界地理」の新聞廣告文句中「一塊の腐肉を相爭ふにも似たる彼等が」と調子に乘つ

て書いたものだから、此泥仕合連から抗議を喰つた位凉しい景氣であつた。此成功によつて「續萬有」の損失を補塡——又他面豫約者の負擔を考慮し、姉妹篇として「日本地理風俗大系」を出版すべく、徐ろに計劃を進めつゝあつたのである。所が、圖らずも玆に强敵が現はるゝを知つたのである。夫れは改造社が「日本地理大系」を發刊せんとし、鋭意準備を急ぎつゝありとの情報に接したのであつた。這は一大事と、仲摩君と協議し、急速に仕事を進捗せしめる傍ら、泥仕合を避け、何とか妥協の方法なきやと、改造社を訪問したりした。幸に**山本重彥氏**も諒とせられ二三の往復を交はし、八分まで妥協成立に至つたが、不幸にして遂に一戰を交へるようになつた事は、今尙遺憾に堪へないのである。

此戰は圓本泥仕合が治まつた後の出來ごとであつて、何れも二圓八十錢の豪華版、相手は强豪改造社、片や小川菊松を主將とする新光社である。と、人の損など構はない連中が、面白半分に手を叩いて、見物せられたのだから堪らない。結果は兩虎の爭ひで、新光社は完全に八萬圓の大損害となつたのである。既に「世界地理」の關係は著者の連絡と同情があり、編輯技術は堂に入つてゐる、讀者も其の大半以上會員となつて居つても、尙且つ八萬圓の大損害であつた。然らば改造社はどうであつたか、夫れは云はぬが華であらう。かくして第三回の「日本地理風俗大系」では經濟的には、意外な失敗に終つたのである。

けれど此戰で新光社の出版上の地位を高かめたことは尠なくない。御蔭で全國の地理學者は勿論、政治、經濟、產業、歷史等の各方面の學者も、同大系に進んで執筆せられたのみでなく、學術的書籍に對する新光社の出版良心は、十二分に諒解せられ、兩地理風俗大系が一通り完了したので、之に續く仕事として、昨秋以來創刊せられたる月刊雜誌「世界知識」の如きも、それ等の人々の熱心なる支持によつて、着々發展をつゞけつゝあることは、此仕事の副產物としては寧ろ大なる收穫といはねばならぬ。

第四は昨秋發表した「普及版萬有科學大系」全三十卷である。流石は仲摩君の破綻の原因を成した丈あつて、不朽の大名著だ、而も空前の至廉である。その賣行は押して知るべきで、此不況を突破するが如き盛況は、全く愉快に堪へない次第である。

物事は少し調子が好くなると、不思議に總てのことが意外と思ふ程順調に向ふものであ

る。仲摩君が畢世の智惠をしぼつた「科學畫報叢書」といふものを昨春來發行することゝなり、第一篇として「科學文明の驚異」を發行したが、之れ又實に意外の當り方で不況の出版界に、之れ許りは獨自の賣行を見せ、追加註文は日々殺到するといふ有樣であつた。之に勇氣を得て引き續き「山岳の驚異」「海の驚異」「昆虫の驚異」「顯微鏡下の驚異」「電氣の驚異」「動物の驚異」「航空の驚異」「最新兵器の驚異」等、既に九篇を發行したが、何れも驚く可き賣行であつた。又「世界知識」の方でも「滿洲事變の經過」「上海事變の經過」等の臨時增刊を發行したが、各篇何れも一萬部以上の賣行であつた。勿論此成功は仲摩君の努力に待つものあることはいふまでもないが、一つは新光社出版物が「萬有科學大系」以來、繼續的に寫眞應用といふ獨特の境地を開きつゝあるのと、俄仕度では一寸手のつけ難い科學の通俗化といふことを覗つてゐる結果であらう。

顧みれば虎穴に虎子を得るが如き此私の戰法は兵家の常に取らざる所であらう。しかし私はそれを勇敢にやつてのけたのである。夫れは萬一の事があつたにしても「科學畫報」で一面を回復する道もあり、他面亦この「萬有科學大系」普及版の最後の切札があつたからである。

然して亦、資本金一萬五千圓の小會社として、是程の大事業が出來ぬことは自明の理である。その背後には、株主兼重役として博報堂、岡本商店、博進社等が、多大の援助を與へて呉れたことと、誠文堂の背景及私一箇の信用によつたことは勿論である。一萬五千圓の資本は少ないが、是等重役諸氏の理解ある援助は、十萬二十萬の資本にも增して有力なものであつた。實際日本地理の豫約〆切後、世界地理と併行して刊行されて居る頃は、小川個人の貸金高は三萬圓に登り、外に振出手形の總額實に二十三萬圓の巨額を算した事がある。一萬五千圓の資本金に對して、此信用融通資本は實に十七倍に當るのである。

商事會社として、見方によつては暴擧にも等しいやり方であつたが、確信と信念の力は遂に完全に成功の彼岸に到達したのである。遇々是等重役の一部は手形の切替を肯ぜざる人もあつたが、夫れ等は私個人で決濟するから舊新光社債務及新新光社の權利を放棄せよと迫るより外なかつたのである。思へば商人に取つて必要の武器は信用である。資本である。又腕と膽である。とは云へ、友人の借金拂に行ふ、莫大なる手形の個人保證は、惱ま

しくないでもなかつたのである。然しそれも今は後日の語り草に過ぎない。舊債務の履行完了に近づきつゝある友の明るき顏を見て、私は微笑を禁じ得ないのである。

此項を終るに當り、新光社の復興に多大の援助を賜はつた辯護士**田代京平氏**、**麻生久氏**、博報堂**瀨木博尙氏**、同**島田和三郎氏**、岡本洋紙店**岸本淺次郎氏**、博進社**大島久吉氏**、京華社**猪木卓二氏**の深甚なる御厚意を感謝する次第である。

新光社の事を終るに際して一言して置き度いのは加工製紙會社の專務**井口誠一君**の事である。新光社は「萬有科學大系」「世界地理風俗大系」「日本地理風俗大系」等主としてアートペーパー使用の出版物をやつてゐた關係上、日本に於ける唯一のアートペーパー製造工場たる加工製紙會社とは、長い間密接な關係あつたのであるが、井口君とは所謂商取引上の知り合ひの程度で、個人的にはさう親密といふ程ではなかつた。

處が一昨年の暮であつたか、日本橋の「やまと」で、私と仲摩君が主賓で、井口氏主催の招宴が張られた。其席には博進社の大島、岡本商店の岸本兩君も取引上の關係から接待役として出席された。井口氏側からは加工製紙會社の工場長**米倉範治君**、販賣主任の**石山喜三郎君**も見えられたか、此招宴が機會となつて「科學畫報叢書」「世界知識」「科學畫報」等が本文にアートを使用し、我國雜誌出版界のトップを切るに至る動機を作るに至り、然も悉く成功してゐるのであるが、思へば世の中の事は何が幸するか分からないものである。

我國で書籍の本文全部に初めてアートを使用したのは萬有科學大系で、之が動機となり平凡社の美術全集や其他の出版物にもぼつ〳〵アートの出版物も出るやうになつたのであるが、口繪や挿繪にのみ、アートを使用するだけでは滿足せざる仲摩君は、外國同樣雜誌の本文をも全部アートに取換へ度いといふ、遠大な理想を持つてゐたので、話は勢ひその問題に集中されて行つたのであるが、早晩かゝる時代の來る事は、加工製紙側でも之を認め着々之が研究を進めてゐるとの事であるから、話は一決早速之が實現に向つたのである。

こんな關係で井口君とは爾來個人的にも可成り親密となり、昨秋の如き井口氏の招待で樺太工業會社の中津川工場見學傍々木曾路に遊び、思ひ出多い旅をしたこともあり、又例の御自慢の長唄一席はその都度拜聽の光榮に浴するのであるが、此井口君の長唄には面白

い話がある。

井口君の長唄は何でも二十年あまりになるとの事であつて、何時、如何なる場合の宴席でも、井口君の長唄が出ない事はないとの話である。いろ〳〵の鍵の入つてゐる大鞄の中には稽古本數冊が入つて居ると云ふ用意周到さで、いつでも本式に毛壇を敷いて見臺に向つてやるのだから、其熱心には何人も敬服する所であらう。

しかし餘り高い聲では言へぬが、あの熱心＋廿年といふ歳月の割合には、「その進歩や頗る遲々たり矣」といふのが一般の定評らしい。現に日本橋の某妓も、「まあ旦那藝としては、あの邊が結構でございます。昔は隨分アテられたもんですがね……」と意味深長の藝評をそのまゝ此所に傳へて敬意を表して置く次第である。

明治印刷株式會社

在所地番七町下松區田神

明治印刷の生ひ立ち

明治印刷株式會社を說く前に、先づ春陽堂**和田利彥君**と、私との關係を書くのが順序であらう。和田君を深く知つたのは、たしか大正八年大阪每日新聞主催の旅行、山陰めぐりの時であつたかと記憶する。時恰も私が「心得おくべし」で儲かり、二松堂宮下君が「佛樣の戶籍調べ」で當り、二人で馬鹿をして居る時のことであつた。所謂同氣相求むるの類か、其時和田君と意氣投合したのが最初で、爾來私と和田君とは刎頸の交りをする事になつたのである。

當時の私の遊び友達に、先輩二松堂**宮下軍平君**あり、後輩に有敎社**宇野富夫君**、今誠文堂社員、當時金正堂**梅林寬治君**など其他小遊び友達は澤山あつた。が、私と和田君との遊びの道中は餘りにも永く、その業界に馳せた醜名は衆知の事實である。かうした關係にあつた私が、和田君の創立する明治印刷株式會社の株式募集に應募するのは當然の事と云は

ねばならぬ。

これが創立は大正拾壹年五月であつた。創立と同時に和田君は社長になり、專務取締役に、和田君が共同印刷の前身博文館印刷所時代の同僚、**佐藤麿君**を据へたのである。始めの二期位は、年何割かの株式配當も行つたが、佐藤君に任せ放しがそもそもの誤りで、佐藤君は之を奇貨とし、會社内に個人の仕事を設け、公私混同するやうになつた。その結果が、跡は缺損缺損の赤字續き、其所へあの震災となつたのだから、資本金四萬五千圓に對し、四萬五千圓以上の負債が出來たのである。其後復興資金として、興銀から一萬圓を重役光風館**上原才一郎氏**、甲陽堂**磯部辰次郎氏**、中興館**矢島一三氏**、**横田地巴氏**、巖松堂**藤田知治氏**、連帶保證の下に借入れたのであつたが、何としても良く行かなかつた。不良貸は出來る、赤字は段々大きくなり負債は益々膨脹するといふ不良狀態に陷つたので、和田君も驚いたのである。

そこで和田君は「私が創立し、私の顏で株を持つて貰つたのに、何とも申譯ない、小川君何とか方法がないか」と私に相談に來られたのであつた。が、是ばかりは畑違ひだから

と一應は斷つたのであるが、强ての事で私の出した救濟案は、

一、和田、小川共同經營の上損益折半とし、兩人とも毎月一定の責任額を定めて會社へ印刷を註文すること。

二、重役の連帶保證及一切の負債は、和田、小川に於て支拂ひ、重役及一般株主の株式を無償で提供させること。

三、會社として經營の場合は、小川が專務取締役として一切の經營に當ること。

なのであつた。和田君もよからうとのことで、卽座に實行に取掛つたのであつた。無償ではと承諾しない二三の株主もあつたが、資産よりも借金が多い、無價値に等しい株券なので、重役諸君及他の株主は直ちに應じてくれたのである。特に重役諸君は連帶保證の關係もあるので、渡りに舟の感があつた、一方負債の方は實情を訴へ、私の顏で片端から負けて貰つて決濟したのである。

此所までの經過は、筋書の通りすら〳〵と行つたのであるが、夫れからの明治印刷の經營は仲々樂なものではなかつた。五臺のボロ機械と新臺との交換に、一萬五千圓を要し、

工場改築に一萬二千圓を支出するなど、之も乘掛つた船で、徹底的に改善したのである。爲に和田君と私の支出も莫大な額に上つたのであつた。さうして二人の仕事ばかりでは機械も甘く塞がらぬため、放送局其他へ自身、印刷の注文取りに行つたり、その整理と經營の爲めには、大に努力したものである。多忙な私には明治へ出社が出來ないためと、一は和田君に安心を與へるために、社内の監督と仕事のことは、和田君の實弟**今井扶君**に託し、又會計事務は、今春陽堂の會計をして居らるゝ**山田耕作君**に任したのであつた。さうした努力は漸く酬ひられ、今は多大の利益を擧げ、業界美堅の印刷會社となつたのである。ところが圖らずも、爰に私と和田君との間に大きな溝を築く、不祥事が持ち上つたのである。夫れは今和田君が專務として經營して居らるる、放送出版協會のラヂオテキストの出版である。

此第二放送用のラヂオテキスト出版の權利獲得運動は舊主加島氏が**木村與作氏**を通じ、其友人たる放送局**相良某氏**に會見し、一番最初に手を染めたもので、費つた運動資金は六千圓を要したとの事である。一方北隆館はラヂオ講座のテキストを發行して來た關係で、こ

の二重放送のテキストは、其の延長と認め、その發行は自店の既得權として信じて居た。ところが、和田君は**林平次郎氏**、**大葉久吉氏**出版界のお歴々をメンバーとして、その出版の獨占權を放送局へ請願したのであつた。然るにこゝに、華族、學者、新聞社々長、二三の放送協會理事諸君が、社團法人國民放送協會を起し、利益を主眼とせざる方針の基にテキスト出版を請願するについて、出版の方の專門家を一人入れねばならぬから、と慫慂されて、以上のいきさつを知らず、私は此メンバーに入つたのである。が、社團法人では儲かる見込は先づないから、どつちかと云へば乘氣ではなかつたのである。所が以上のやうに和田君一派、加島氏一派、北隆館一派等の内面が段々と分り、和田君の友誼的でない態度に慊たらないものがあつた。卽ち、明治印刷では前にも記す如く、親友和田君のために復興に努力し、專務として交際費は愚か、此六年間無報酬で働き、幾多の犧牲を拂つてゐたのであり、然も社内は和田君の安心するやう、和田君の一族郎黨を以て當らして居たのであるし弟今井君が明治印刷を代表して放送局に出入りが出來たのも、私の十年來の「無線と實驗」やラヂオの單行本の關係で、而も私が開拓してから私の代理として出入せしめたもの

である。夫れが原因で話しが成立つたテキストである。然るに私を除者にして、業界の元老連に持ち込んだとは怪しからんといふのが私の不滿であつた。

さうこうするうちに、テキスト請願の旗色は和田君に有利に展開して來た。驚いたのは北隆館である。北隆館は看板の手前、取られて堪るものかと八方奔走したのであるが、形勢は樂觀を許さぬものがあつた。そこで私がテキスト請願の一人であることを知つて、北隆館から共同戰線を張るべく會見を申込んで來たのである。其頃は此問題で內報紙上を賑はして居たので、北隆館としては面目問題もあるが、私としては元より儲かるとも思はず、又外面へは現はれてゐないので面目も何もない。只和田君に對する不滿だけであつたので、一應は斷つたのである。が、同館理事**石塚隆美君**が「國定教科書問題で小川君に散々擔ぎ擧げられ、終始行動を共にした關係の反動が、過分に此問題に含まれて居る。云はゞ其仇敵視されてこゝに對立することになつて居るのだ、友達甲斐もなく、夫れを見殺しにするとは怪しからん。殊に君も別箇に請願して居る一人ぢやないか」と石塚君一流の熱辯で到々口說き落されたのである。

話は反れるが、そもそもこの國定教科書問題といふのは、昭和五年三月、それまで出版界の老舗株、所謂元老連が壟斷して來た國定教科書發行許可期限が切れるに際して、北隆館**福田金次郎氏**を擔ぎ上げ、和田君も仲間に入り、その利權橫奪を劃てた事件なのであつて、當時都下各新聞を賑はした問題でもあるし、其結果として、從來暴利に過ぎた國定教科書の定價も幾分引下げられたのであるから、茲に手輕に其經緯を記して置かう。

當時、この利權を狙つたものは、我々出版業有志のみではない。秀英舍社長**杉山義雄氏**を中心とする一派の外、平凡社**下中彌三郎氏**あり其他何々ありといつた工合で、相當の激戰であつた。

我々が、時の文部大臣**田中隆三氏**に提出した請願書並びに其趣意書の內から、我々が急所と狙つたところを、茲に拔萃してみやう。卽ち、曰く、

「現在諸物價漸落ノ氣運ト、最近出版界ヲ席捲シタル廉價本ノ出現ニヨル生產能率ノ著シキ進步トハ、原料紙、印刷費等ニ非常ナル低減ヲ招致シタノデアリマス。茲ニ於テ不肖等ハ、多年ノ經驗ト現在ノ實狀ニ立脚シテ鳩首研究考査致シマシタ結果國定教科書ノ價格

ハ現在ヨリ更ニ二割一分六厘ノ低下ヲナシ得ルト言フ數字ヲ得タノデアリマス。此ノ數字ハ、決シテ架空的ナ概算デナク飽クマデ、嚴密愼重ノ結果表ハレタモノデ、其レヲ立證スル種々ナ材料モ蒐集シテゴザイマス」

さうして、これには別紙として「國定教科書現定價ニ對スル値下率一覽表」といふのが添へられてゐる。これによつて最高四割の値下げが出來るといふことを明確にしたのだつた。又、曰く、

「現在國定教科書ノ飜刻發行、販賣ニ從事シツヽアル四會社ハ多年光榮アル事業ニ携ハリ、圓滿ニ其許可期間ヲ終了セントスル時ニ當リマシテ、其光榮ト福利ヲ他ノ同業有志ニモ願チ、相携ヘテ國家奉公ノ誠ヲ盡サン事ハ四會社モ熱望スル事ト推察致シマス。幸ヒ御賢察ヲ得テ不肖等ニモ從來前記四會社ニ附與セラレタルト同樣ノ權限ヲ御許可賜レバ、直ニ資本金參百萬圓全額拂込ノ會社ヲ設立致シ……」其の結果年々百三十萬圓の國民負擔を輕減しやうといふのであつた。

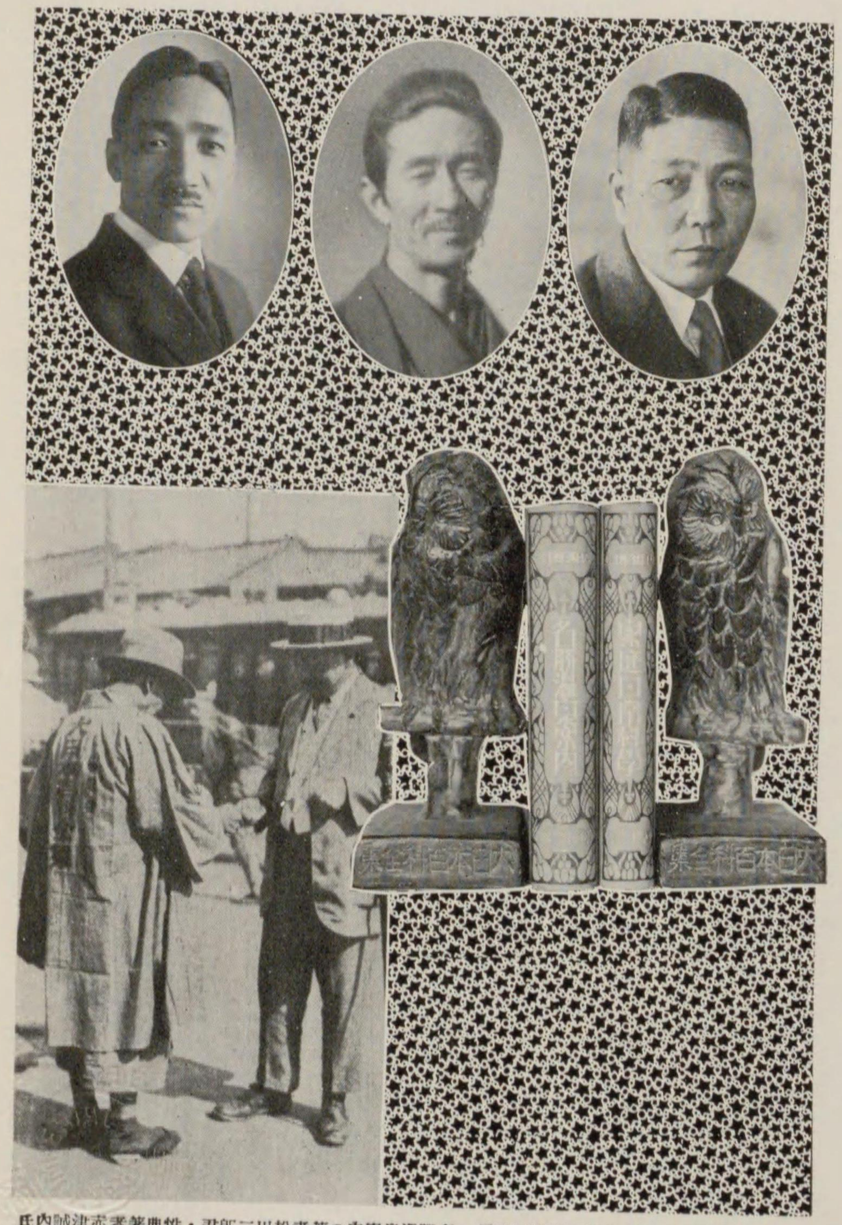
要するに、之れは請願趣意書にもあるやうに「既設四會社は世評の如く決算に表はれた利益配當の數字を糊塗して、利得の搾取にのみ吸々とし、事業の精神を理解する明なきのみならず、經營の方面にあつても、單に、若干の經驗を唯一の賴みとして、時勢の進運に眼をふさぎ、十年一日の如き姑息極まる經營をなしてゐたものとすれば、既設四會社は更新に際し、斷じて繼續經營する資格はないと信ずる次第であります」といふのだつた。時の勢とは云へ、同業先輩の事をよくもこんなにコキ卸したものだ。これは雜誌社、大豫約出版者、中等教科書或ひは學生參考書の出版書肆等の、時の一味の面々が寄合つて、やるならここまで「やつつけろ」といふので書いたものである。が、これは、たゞ、既存四會社が吾吾の肉迫に依り値下げ發表の止なきに至り國民負擔の輕減を見ただけで、我々の主要目的たる利權奪取は美事に失敗に終つたものだつた。

而して、後日此の狙はれた既存教科書會社の重役連を中心に、私の同志だと信じ切つてゐた和田君が自身提唱の下に、放送出版協會を作り上げたのだから、前記の如く、ラヂオテキストの發行權利の爭奪では、北隆館を應援し、和田君等の放送出版協會に對峙せざるを得なくなつたのも止むを得ないのである。

かうした感情の激化は、遂に明治を任せてあつた和田君の實弟今井君の身に及ぼすやうになつた。それは私に秘密で、明治印刷の眞向に宮原印刷所（今は東洋印刷所と改名）を起して、自己及一族を以て明治と同一の印刷業を開始して居たり、其他いろ〳〵の事情があつて、退社するの餘儀なきに至つたのである。夫れや是れやで、私と和田君との間は、一時深刻なる紛糾を續けたのであるが、兩者の親友**島田和三郎君**が之を患ひ、調停斡旋せられたので、再び握手するに至つたのであるが、此ことのみならず、私の前後幾多の問題には、島田君の御世話になることの多かりしことを痛感すると共に、感謝に堪へないのである。

惟へば、和田君は私の最も良き遊び友達であつた。長井・和田・小川といへば、出版界遊蕩三羽烏として業界に醜名を流した者である。或るときは、三人共謀して家庭會を作り、女房を誤魔化し合つた事もあるほどに、此三羽烏は切つても切れない間柄だつたこともある。それを、長井君は先年長女の結婚を機會に、プツツリ遊びを癈められたし、和田君とも亦、こんな風にもつれて仕舞つたので、偶々獨り酒を汲む折など、しみじみと淋しさを思ふのである。

百科全集の著者の中から



上右より當時の誠文堂置間矢野正世君・名勝溫泉案内の著者松川二郎君・性典著者赤津誠内氏
中圖はブツクエンドと百科全集の一部・下圖は當時の百科全集街頭宣傳

圓本時代

大正九年のことであつた。當時「是丈は心得置く可し」の著者**加藤美侖君**と、その「心得置く可し」の中の一冊を成す「書畫骨董建築裝飾」の實際上の執筆者であつた**一氏義良君**との案に從つて、二松堂の**宮下軍平君**と合版で「書畫骨董叢書」全十二卷、一冊金五圓といふ大失敗の豫約出版をやつたことがあつたが、これが誠文堂としての最初の豫約出版であつた。其後大正十五年春、**中内蝶二氏**、**田村西男氏**の編輯による「日本音曲全集」全十五卷と、**石井勇義君**編輯の「最新園藝講座」全十五卷の豫約出版を試みて、これは小ヂンマリと儲けた。此二つのうち「日本音曲全集」は、**矢野正世君**が中内、田村の兩氏と相談を纒め、夫れを博報堂の**島田和三郎君**に謀つたものである。島田君はラヂオ放送の結果から考へ、食指大に動いて私と共同出版しようと持込んで來たのであつた。友人の間柄だから口約で、損益とも七・三、卽ち小川七割、島田三割といふことで卽座に話しが極つたなの

であつた。全十五卷の內三、四回配本した頃であつたらう、共同出版も計算が面倒だろうから五千圓で權利を放棄しようかと島田君の提案があつたのを幸ひ、卽金四千圓也で打切つたのであるが、島田君は着手當時から一文も出資せず、五ヶ月目頃に金四千圓也入つたのだから惡からう筈はない。矢野君は中內、田村兩者を代表し、一冊五百圓で原稿賣切りといふ有利でない契約であつたから、この處流石の孫六先生も島田老に一鑄を輸された譯である。最も矢野君も其頃まだ**谷孫六**の看板を揭げてないのだから仕方ない。

是れより先兼ねて絕版になつてゐた往年の「是丈けは」を新たに書き卸したやうな、一大常識叢書の出版をやりたいといふ氣持ちがしきりに動いてゐたが、其大體の腹案を得たのは大正十五年の十一月であつた。ところで、此十五年十一月といふのが、所謂圓本時代の始りであつて、改造社が一冊一圓の「日本文學全集」を出して豫約應募者二十八萬を獲得し、次いで新潮社が出した「世界文學全集」亦三十八萬人の豫約者を得たといふ頃の話なので、私の舊式な叢書計劃は新潮社の世文式の圓本に變更されて行つた。愈々發表といふまでには、その頃五十人も居た店員と日夜案を練つたものであつたが、而して愈々發表といふ眞際になつて、平凡社の「大衆文學全集」が一千頁一圓を謳つて發表された時には、私も正直な話、一切の匙を投げたのであつた。が、始めから此の案に携つてゐた當時の讀賣新聞社營業局長**矢野正世君**や、**鵜沼直君**、それから店の倉本君など熱心な關係者の事を思ひ、自分の發案を途中で投げ出すことの意氣地なさも思つて、圓本計劃を五十錢本に變更してみやうかとも思ひ、これを店員に諮つてもみた。處が、七十五錢案、八十錢案が大體纏つて、そのつもりの豫算が樹てられたが、どうも充分なものが出來なかつた。斯うして低徊して居る內に日は經ち、圓本としては更らに二種の外國戲曲ものが發表されたりしてしまつた。そこで勇を鼓して最初の圓本案を採用することに腹をきめ、一氣に圓本界へ乘り出したのであつたが、それでも着手から發表まで丸六十日かゝつたのである。計劃は私に矢野君、店の倉本君に、鵜沼君の四人で、矢野君は其頃日本音曲全集出版の關係で誠文堂の顧問として、私から每月二百圓づゝ拂つたものである。編輯は前記の倉本、鵜沼兩君の外に、**高橋素都武君**、**近藤飴ン坊君**とであつた。思へば何から何迄お祭り騷ぎで、內容見本一つ造るにも大がかりで上つ調子の處が多かつた。自分も印刷所へ出かけて、校

正の手傳ひもしたものであつた。が、こうしたせずとも良い仕事をしなければ收まらぬ心の焦慮こそ、大局を見るの明を覆ひ易い。今にして思ふと、印刷に、紙に、製本に、モット有利な交渉が出來たものをと遺憾に思ふ。

それに乘りかゝつた船だといふ、生來の氣性が、萬事を華美にして行つた。人手を不用意に殖やしもした。宣傳は夫れもよし、これもやらうと豫算も糞もなかつた。偶々近代社の「世界戲曲全集」と第一書房の「近代劇全集」とが唯嚙み合つての後、興文社の「小學生全集」とアルスの「日本兒童文庫」とが素晴らしい火花を散らして狂氣のやうな宣傳戰をやつて居た頃のこととて、新聞の五段や六段の廣告は、ほとんど其存在すら認められなかつたので、勢ひ新聞廣告の頁數も增し、又著者關係の報告會だの、賣捌店との打合會だの、店員慰勞會のと、締切つてから、算盤を取ると三割方宣傳費は嵩み、豫約數は最低豫想をほんの一、二千部超過してゐるにすぎなかつた。完了後に總決算して見ると、解約によつて出來たストックと、發行權位が純益で、世間で云ふやうに失敗はなかつたが、先づ成功と云ふ方でなかつたのである。

何しろ當時「小學生全集」とか「日本兒童文庫」とかいふ豫約出版の宣傳振りは日本中のありとあらゆる廣告宣傳の機關を一切買占めてしまつたかと思はれる程のものであつて、ある日のある新聞の廣告欄と云ふ廣告欄は第一頁から第十二頁まで同じ小學生全集の廣告で埋つてしまつてゐたやうなことさへある。聞くところによると「小學生全集」の宣傳費は約五十萬圓、「日本兒童文庫」の廣告費亦三四十萬圓といふのであつたから、以つて當時の騷ぎを知るべしだ。これだけの費用が僅々五六十日間の豫約募集中に使はれたのであるから、思へば實に無茶な時代もあつたものだ。從つて前記の「世界戲曲」を發行した近代社の如きも、廣告の拂が十一萬圓も滯つて、その全集の發行權を博報堂に引渡さねばならぬやうになる。又アルスはアルスで其爲に破綻をする。興文社は興文社で見込み違ひをしたとの事である。「世界戲曲」については、其後博報堂から賴まれて、一頃私が經營の面倒を見て上げたこともあつたが、博報堂も十一萬圓の抵當に取つた發行權から三萬圓も擧げ得たであらふか。

何しろ、そういふ大騷ぎの突端に私の「大日本百科全集」が發表されたのであるから、

其の苦戦は並大抵ではなかつた。宣傳費は、十二萬圓前後の豫定のものが十八萬圓近くにもなつてしまつた。

それでゐて、本當のことを云ふと、大日本百科全集の豫約高は損をするかせぬかの境界を第一回配本に於いて一、二千部だけ多いのが實數であつた。それに私のやつたのは豫約界初めての自由選擇豫約といふ形式を取つたので、毎月二冊づゝ配本を勵行したが、ある種のものになると豫約部數が少かつたし、それに月々の脫會者の事も考へ合はすと全くキリキリのところで、若し金利を拂ふ樣な立場だつたら經濟的に倒れて了ふといふ際どい勝負であつたと云へる。

しかし、それだけ毎月々の返品と、脫會者の割合調査には十二分の警戒をして來たし、又一方あらゆる手段と智能を絞つて製產費の引下げに腐心もして來たと同時に、他店に類のない全集の單行本化を斷行して、之を一冊一圓五十錢で一般分賣を行つたのであつた。つまり消極的にはストックを殖やさぬ工夫をし、積極的には出來たストックを現金化して行つたのであつた。

これは私の豫定行動の一つであつた。其後これを模倣する出版者が一、二あつたやうであるが、私は圓本發表に際して、後日單行本として賣れるやうにと初めから全冊に卷數を打たなかつたし、本文の柱にも「大日本百科全集」などといふ文字は挿入しなかつた。僅かに序文と奥附にその文字が見られるに過ぎないのである。表紙の脊には小さく全集名がはいつてゐるが、これは仕方がない。

斯うしたことも分賣を標榜して立つた全集だけにやり易かつたが、何分にも豫約したものを一般化するのであるから、かなり氣のひけた事であると共に、豫約者の思惑といふことも常に心配してゐた。が、幸にもその方からの故障は出なかつたが、たつた一人原稿買切りの著者服部嘉香氏から文句があつた。全集として書いたので單行本としては書かないといふのであるが、そういふのに對しては大日本百科全集の發表を見て貰ひたいと答へるより外になかつたのである。つまり、「何冊でもお好きな本だけお賣りします」といふ以上一冊々々廣告して賣らうとそれはあたりまへの事ではあるまいかといふのである。而して此式で當つた本が何冊かあつた。八段木村義雄氏の「將棋大觀」、赤津誠內博士の「性典」を

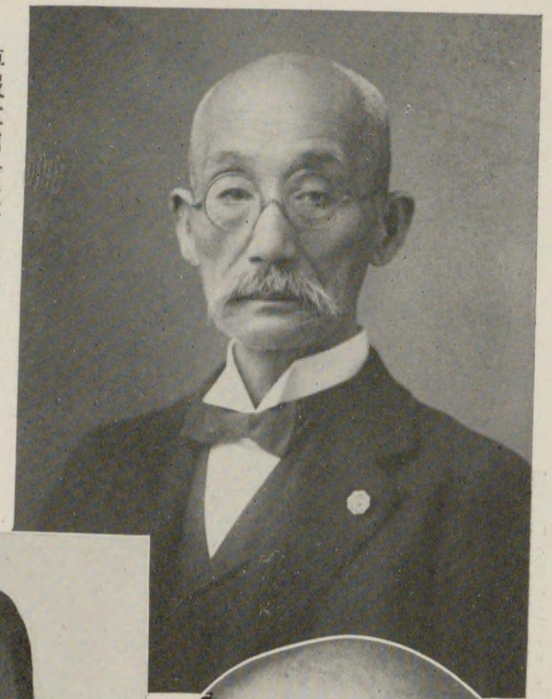
始めとし、**松川二郎氏**の「名所温泉案内」、**雁金準一氏**の「圍碁大觀」などは其代表的なもので、豫約分よりもこの分賣の方が六七倍も多かつたもので、二三改裝本をも發行するに到つた。斯うして、私の圓本は危地を脱したのであつたが、其間に於ける全集の脱會者がどれほどで止つて呉れるだらうかと云ふやうな推量と心痛とは、とても筆紙には盡せないものがあつた。が、幸にして他の出版者が豫約本の發行が毎月一冊づつ約束通りの期間に出版出來ないで困つてゐる間に、ひとり誠文堂のみは毎月二冊づつキチン〳〵と發行して、遂ひにあらゆる圓本の中、最も早く完了して、刻々増える解約者に困り拔いてゐる他の同業を尻目に、組合から何のかのと抗議もあつたにせよ、完了記念の分冊賣りなどを手早く行つたのは何よりであつた。

今にして思へばかゝる事のあるべきを豫想して全集を單行本化する用意とが無かつたらそれこそ、ストックだけ儲かつた、紙型版權も儲かつたなど、平氣な顔はして居られなかつたであろふ。

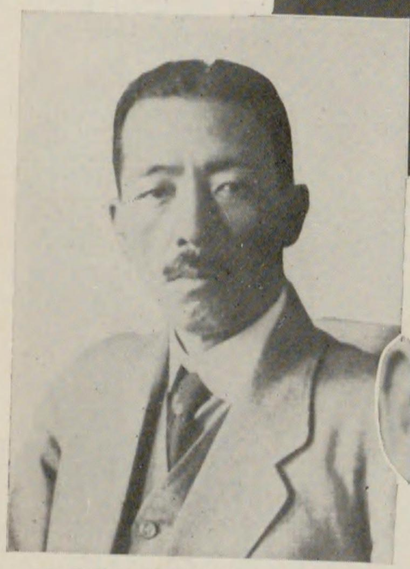
つまり苦心の結果が、やつと危地を脱して、これだけでもプラスになつたのが積の山だつたのである。

二十萬圓に近い大資本を投じ、一年有半の努力と惱みとを顧みて苦笑を禁せざるを得ざると同時に、かゝる馬鹿々々〳〵しい商賣は孫子の代まで夢にもさせるものでないとつく〴〵思はざるを得ないのである。當時、此の全集の豫約出版を完了するに當つて「出版新聞」に語つた私の感想があつた。これは「圓本は道樂息子である」と題するもので、そのころの出版界の消息の一面を傳へるにふさはしいと思ふから、こゝに抄錄しやう。

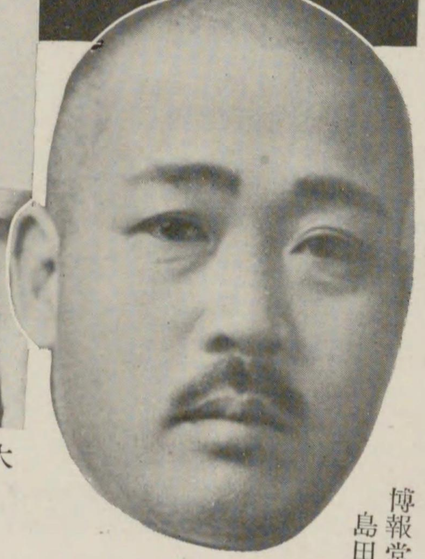
「僕ひとり、この混亂から足を洗つて、涼しい顔をするのではないが、最近に臺頭して來た月おくれ圓本通信販賣屋の出現と、過去の自分の體驗に照らして、如何なる苦心と細心の注意とを以てしても、豫約出版物の返品ストックは到底免れ難いものであろゝと思ふ。一冊のストックは二冊乃至三冊の利益を吐き出して了ふ、丁度金持ちが道樂息子を持つてゐるやうに、折角苦心丹精したものを、ソバから〳〵掴み出されるやうのものだ。マア僕だけは、此道樂息子が堅くなつて呉れたので、やれ〳〵と重荷を卸してホッとしたといふものである」云々、



博報堂内外通信社長
瀬木博尚氏



大阪毎日新聞社故池松常雄氏



博報堂重役
島田和三郎氏

廣告政策

出版業として尤も大切なことは、時代を見るの明、適切なる計劃、著者選定の妙、それに廣告宣傳の方法、と斯う四ケ條であらふと思ふ。

この内、出版物其のものに、どれだけの廣告價値があるか無いかを見極めて、その廣告豫算を如何に立てるかといふ事と、新聞の撰定は、出版業者の盛衰を左右するものであつて、無理な廣告をして良からず、廣告を節約して悪く、全く六ケしいものである。

所謂因本時代以前に於いては、出版廣告といへば夫れほどのものでなかつた。少々自賛ではあるが、私などは最も早くから目覺めてゐた方であらふと思ふのは、大正八九年頃に「是丈は心得置く可し」の、五段六段の廣告を敢行してゐたからである。

何しろ私が新聞廣告に興味を覺へ始めたのは、殆んど處女出版「わがまゝ」の直後のことであつたから、かなり古いものだ。當時、此處女出版の著者**澁川玄耳先生**は、大阪毎日

新聞社東京支局長故池松常雄氏と同郷の關係で親しく往來して居つたので、丁度夫れより一年も經つた頃であつたらう、「海のロマンス」や「日本及世界見物」で屢々廣告も試みてゐた折とて、先生の事務所で始めてこの池松氏に遇つたとき、先生が「此小川は元氣のよい將來のある面白い男だ、未だ出版を始めた計りであるが廣告に就て興味を以て研究してゐるから、君大に援助してやつて呉れ」と私を紹介せられたのである。爾來私は池松氏の指導を受けると共に、非常に御世話になつたのである。

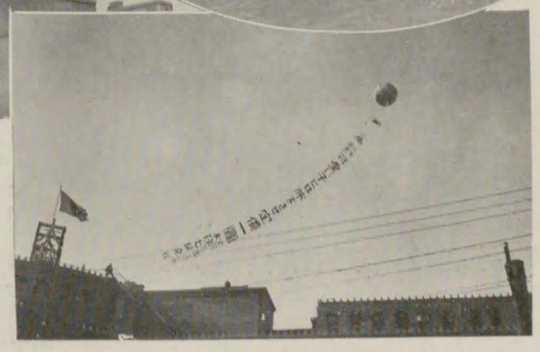
今と同じに大阪毎日東京支局は東京日々内に有つて、其東京日々がその頃、讀書の顧問部を設けてゐたので、それを通じていろ〳〵な本の質問や注文が澤山來るのであつた。その係りは今大阪毎日の英文毎日主任夏目秋一君で、私が毎日注文品を屆ける傍ら質問應答の御手傳をしたのである。そんな關係で、池松氏にもしば〳〵御目に掛る機會があり、淵川先生からの依頼もあつたので、私には大阪毎日と東京日々の廣告を特別値段にして呉れた計りでなく、いろいろと新聞利用の祕策を敎へて呉れたのである。其祕策の内にこんなのがあつた。「新たに大割引して呉れた兩社の特別單價は一ヶ月一頁掲載を標準としてある、

宣傳一束

大正八年「心得置くべし」の宣傳

廣告列行に參加して

傳宣發識知界世



蜂谷經夫君の「可愛い子には旅をさせよ」の大阪での宣傳

君の廣告は一ヶ月一頁などはとても出ないが、特にこの値段に割引してやらう。若し他社を此程度に負けて貰はんとするなれば、新刊が出來ても、他の廣告と取りまぜて一頁分になるまでは廣告せず、其間は、大毎、東日のみを使用し、それで我慢して、他社に出し得る廣告行數が一頁に達したなら交渉して見よ、然らばキット料金値引の交渉が成立つであらう。又地方紙を澤山使ふなら參謀官を一人置いたらよい」といふのなどがそれである。

こんな風であつたから、此池松氏の御厚意は今尙忘れない、今誠文堂が、新聞廣告主として一人前になつたのも、偏に池松氏が、初期時代にいろいろ敎へて下さつたからであつて、爲に私は傳統的に大毎、東日に好意を持ち、歷代の廣告部長或は支局長、**重本長次郎君**、**淸澤巖君**、**古賀文雄君**又東日**小倉彌太郎君**、**夏目秋一君**、**島田昇平君**、とも親交があると共に、それだけ大朝、東朝からはよく思はれなかつた事も之に起因するのである。

そんな事が含まれてか、東朝の前々廣告部長**小早川彥一君**とはやりあつた事もあつた。然し今は現大朝廣告部長**北村榮二郎君**東京支局長**天野四郎君**東朝廣告部長**新田宇一郎君**等と親しく交際して居るので、昔日の如き溝がなくなつたのは欣快に堪えぬ。

しかし、如何に大毎、東日に好意を感じたからと云つて、攻守同盟を結んで、不合理な單價値上の爲、廣告主に當つてくるといふやうな事があつたのでは、私としても、一時的には、流石の大毎、東日に對しても、この傳統的好意をかなぐり捨てゝ、火蓋を切つたこともある。

小川は新聞操縱がうまいとか、廣告單價を無茶に値切るとか云ふが、無茶でない證據には、曾て團體的行動を取つたことのない私に對し、どこの社も、大抵は自分の希望通りか或ひは、それに近い程度に妥協したではないか。のみならず、まだ誠文堂の單價より安い單價の廣告主が有ること、更に二千行の廣告契約が、五千行に增行される場合、其單價が引下げられるのは當然過ぎる程の當然であり、更に亦廣告はどん〳〵貰つたが「どうも支拂ひが……」などといふ心配御無用であることなどを思へば、これまで實行して來た私の廣告料値下げ運動も、あながち不合理とは申されまい。

不合理と云へば、大新聞社の廣告値上げほど、不合理極まるものはない。紙數が殖えた

とか、廣告價値が增大したといふのなら、廣告料金の値上げもよろしいが、先年、大朝、大毎、東日、東朝の所謂東西四社が、一頁十二段の組み方を、十三段に組み改めるといふことだけの理由で、廣告の料金を、一躍一割二分四厘だけ引き上げやうとした事の如きは、正に其好適例であつた。私はこの時程痛烈に新聞社と爭つたことは無かつたので、當時の話を思ひ出してみやう。

大阪朝日、大阪毎日、東京朝日、東京日々の四新聞は密かに聯合して、昭和三年四月一日から一頁十二段組みの紙面を十三段組みに改めやうとして、其前年あたりから計劃おさおさ怠りない樣子であつた。一體新聞社が其紙面を十二段にしやうが、十三段にこしらへやうが、そんなに秘密にせんでもよさそうなものであるのに、四社は、これによつて、他の新聞を出し抜かうとし、又廣告收入の增大を計らふとした爲に、斯くも秘密裡に事を運んだのであつた。

そこで、この事が露顯すると四社を除く新聞社が、四社彈壓の有志大會を日比谷公園に開催までして、新聞一頁を十三段にする爲に活字を小さくする事は國民衞生の上から、どうとか、かうとかと不可を論じたのであつた。

この十三段制反對運動には色々各方面の政策も加はつたことであらふが、こゝに最も强硬な反對を表明したものは出版廣告主の連中であつた。四社が、十三段制を實施しやうといふ約四ヶ月前の昭和三年一月には、早くも、代表的出版者約十六社が、之が對抗を策して、赤坂清水谷の一鶴亭に集合してゐた。また翌月二月廿日丸の內「常盤」に集合し其の席上に於て、この十三段反對加盟の出版社が、萬一單獨に新聞社と交涉するやうなことがあつた場合には、罰金として金一千圓を支出するといふ申合はせをし、その一千圓を手形で、世話人の手許まで出して置くといふところまで、相互の決心は固かつたものだ。從つて、右のやうに、十三段實施の通知があつて、これまで一頁十二段、一段百圓ならば一頁千二百圓であつたものを、一頁十三段で千三百圓となりますといふ新聞社の要求を一蹴し、飽くまで不合理なその要求を退ける爲には、各廣告主が同盟して、廣告を一行も出さないのが良いといふところまで行つたのであつた。

そこで、驚いた四社及廣告取次等の面々が、鳩首熟議の結果、結束の出版廣告主に

たいしては特別計算を設けることとし、從來の單價を、そのまゝ新行數に適用はするが、それから或る程度の暫定割引を行ふ、といふ事で妥協が出來たのであつた。

とはいへ、これは四社側が、これまでの一行よりも、實質的に少さくなつた一行に對し從前通りの値段を拂はせることを認めしめたものであつた。出版廣告主の方は、廣告料金の單價標準はどうでもよい、實質的の値上げでなければよろしいといふのだつたから、之を輕く受けて、暫定割引で滿足したものだつた。が、同年九月廣告取次業博報堂が出版廣告主を下谷同花に招じて、四社から通告があつた爲に右の協定割引撤廢を提案すると、半年前には不揭載同盟の主唱者であつた一流どころの面々が、交々立つて、四社禮讃の演說をやり出し、御無理御尤と頗る臭い態度を執つたものだから、爾余の廣告主もバタ〳〵と腰を折つてしまつたのであつた。

この時、この大朝、大毎、東朝、東日の四社が、何故に、腰を强くして出版廣告主に「暫定割引」の撤回を迫つたかといふに、化粧品、賣藥等の廣告主との協定は既に出來てゐた後であるのと、講談社が、例の「修養全集」「講談全集」の大計劃を携げて、其翌月から宣傳を開始するといふ前交渉が行はれてゐたのと、二三の有力出版主との默約が出來てゐたのとに因るのであつた。

が、これは明かに無理である。一尺十錢のリボンを吋尺で計つて「ものさし一尺十錢」なのは從前通りです、少しも値上げではありません」といふのだから、僕は始から腹が立つてしやうがなかつた。

そこで博報堂が下谷「同花」で折角の御馳走をして下さつたにも拘らず、私だけは、あとでその斡旋を斷乎として斷つたのであつた。

と、四社は「では、誠文堂の廣告は揭載せぬ」と來た。這度は先方からの不揭載だ。事態頗る面白くなつて來たが、實際のところ、出版屋は廣告で商賣をしてゐるやうなものなので、私も內心、これには大いに困惑したが、なあに新刊を休止して終ふし、競爭誌のない專門雜誌だから、一年位は大丈夫と、乘りかゝつた船なので、思ひ切つて、日本一の大新聞、東西の四社を向ふに廻して喧嘩することにしたのであつた。

廣告を出さぬとあれば、渡してある紙型を返へせ、といふやうなことから、話がつくま

で丸半ケ年争ひ通した。其間、人を介して、何だ彼だと、新聞社側から枯息な和解の申出が數回あつたが、斷乎として應じなかつたところ、博報堂**島田和三郎君**の調停で、双方の面目が立ち、目出度く手打となつたものだつた。が、その間に於ける廣告政策上の苦心たるや、實に慘澹たるものがあつた。

斯うした工合に、私は、新聞社に對しては腰が强い、東京と地方とを論ぜず「よろしい、それなら君の新聞には廣告を加減するまでだ！」とやつたことが、どれ位あるか知れない。その爲には行掛り上、出したい廣告も犧牲にしたことが屢次あつたし、「では當分御辭退しませう」などゝ取引を謝絶する頑固な新聞社にも出遇つた事がある。又昔から仲の良かつた廣告部長でも取引上では、頻々爭つたものである。

しかし、新聞廣告政策も爭ふばかりでは駄目である。先づ掲載の量が第一で、次が廣告する商品が、その新聞を必要とするか否かといふ點を考慮して、あとは新聞社の痛い所をギュッと突くと、單價は適當に協定が出來やせぬかと思ふ。餘り委しく書くと、新聞社の營業妨害になる恐れがあるから、茲へは書かぬが、何れにせよ商賣だから、講談社の**赤石喜平君**の如く談笑の間に要領を得るのが賢明だ。私のはいつも一本調子でやるものだから、最後に妥協が出來たにしても、惡い印象を殘すだけ愚劣な戰法であつた。

觀じ來れば新聞政策なるものは複雜極まるもので、單純に凡ての交渉を遂げることは、損失するところが多くして、獲る處が尠いものである。東日の池松氏の忠告に從つて、廣告をやり出した頃には地方新聞の實情を知る爲には、或る機會で知合つた長崎日々新聞の**山口瑞穗君**に暫らく參謀をやつてもらひ、その頃知らなかつた地方紙の内容など詳さに教はつたものだし、後日にあつては弘業通信社の**伊藤春水君**の親切な教導にどれだけ稗益されたか知れない。

さうかうする内に、誠文堂も新聞廣告主としては、先づ一流と目されるやうになつたがそれだけ、新聞に對する義務もあるので、廣告行數の維持には苦勞した。「性典」「女性典」などの廣告をすると、廣告文が餘りにエロチックで品が惡いと知人連から叱られるのであつたが、それでもこの種のものは廣告しさへすれば必ず賣れて、斷じて損のないものなので、契約廣告行數を減さぬためには、仲々止め棄ねるのであつた。

さうした關係から最も深い思ひ出は、昭和五年二月の總選擧の時、新愛知東京支局長勝田重太朗君から頼まれて、犬養毅氏の「景氣か不景氣か」と題する政友會のパンフレットを誠文堂の名で宣傳したことであつた。この大廣告は無論儲けは第二としてやつたもので、其ため誠文堂の名による昭和五年二月の廣告行數は、大毎八千百十二行、大朝九千三百行、東日八千八百二十五行、東朝九千四百五十五行、時事九千百四十五行、國民一萬一千百七十二行、報知八千八百九十行、讀賣八千五百二十五行といふ大行數であつた。こゝ多年の間、出版廣告界にあつて、隨一の掲載行數を占めてゐた講談社以上の廣告が出たのであつて、巷間いろいろ取沙汰もあつたが、大政黨と雖も信用すべからずとあつて、あの時はすべて前金で廣告料を取らなければ廣告を出さなかつたのである。

要するに、私は廣告料金を安くするために、幾多の犧牲と努力を拂ひ、こゝには書けないやうな事柄を、ヅケ〳〵とやつてのけたものであるが、しかし、今ではモウそんな無茶もしなければ、する必要もない、亦勇氣もない。只今日此頃の不況では、購買力減退の結果か、何としても採算は取れないので、少しばかり割引をして貰つたため契約行數に束縛せらるゝのは最善の策ではなかつた事を痛感する。

此項を終るに當つて、創業以來の廣告取扱店博報堂社長瀬木博尙氏、同重役島田和三郎氏に深甚なる敬意を表すと共に、少しばかり思ひ出を記したい。

島田氏は先輩であると共に親友である、島田君を知つたのは出版を始めて間もない頃であつたが、大正五年に「式辭答辭挨拶」といふ原稿を世話して貰ひ、ウンと儲けさして貰つたときに既に親しくなり、其後氏の義弟に當らるゝ天海君が經營して居られた經濟社の出版物を私が一手に販賣し、また、岡崎君の整理で其債務を私が肩替りしたので、それ以來一層親密の度を加へたのである。

私は島田君を親友にもつた御蔭でどれ位幸福であつたか知れない、唯々廣告の取引關係で世話になる計りではない。前記の「式辭答辭挨拶」は一圓廿錢の單行本であつたが、二萬部以上も賣れたし、經濟社の「マルクス資本論」始め澤山賣つて儲けさして貰つた。「商店界」も島田君がウンと云つて呉れたので今では私の手に入り、益々發展するやうになつたのである。

最近の大きな問題は新光社の整理である。之が又島田君が中心で和議も出來、株式會社も成立つて、その新光社も今日生還つたのである。明治印刷の復興に就いても、和田君との和解に就いても亦非常に世話になつてゐる。此頃こそ島田君も飲むやうになつたが、一時何年間か禁酒の頃は、「遣つてばかり居てはいけない、少し金を溜めろ」と愛弟に云ふ如く私の店へ來るたび毎に忠告して呉れたのであつた。

是だけではない、外に又私は島田君に依り大きい幸福を得たのである。夫れは島田君に依り私が博報堂社長**瀬木博尚氏**に認めて載いた事なのである。私は博報堂と創業以來の取引であつたが、社長瀬木さんを親しく知つたのは震災後であつた。此瀬木さんに終生忘るゝ事の出來ぬ難有い事が二つある。

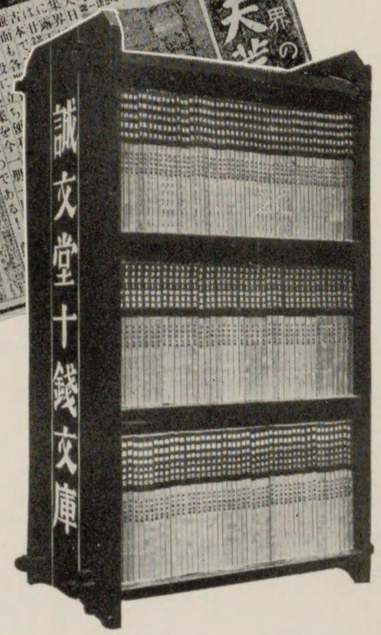
一は昭和二年四月銀行取付け騒ぎのあつたとき、私は恰度旅行中であつたが、ある朝新聞を見ると東京の各銀行危しとあつた。自分は銀行に何萬圓かの定期預金があつたが、夫れを見返りに亦何萬圓かを割引いて居つたので、萬一の場合は差引いても多額の損失をせねばならなかつた。ソコで家内に長距離電話で、瀬木さんに事情を話して一時拝借しろと申付け、其日のうちに戻つて銀行に交渉し、過振分を決濟して、その定期預金を取戻したのであるが、始めて逢つた私の女房に、何萬圓といふ金をポンと出して下さつたのは唯々感謝の外はない。

もう一つは大誠堂事件で、私が困惑しておるときであつた。廿萬圓全額拂込の會社創立のため、その株式募集につき、河田町の瀬木氏邸に伺つた時のことであるが、瀬木さんは「私は出版業の方々を得意として商賣をしてゐる關係上、至誠堂は兎角の批難があるので、其株は持ちたくはない。が、今君の云はれた通りとすれば、君を信じて、君の都合よい丈持つてあげませう」と云はれたのであつたが、此時の御言葉は終生忘るゝ事の出來ぬ有難さである。此ことは大誠堂事件の項に書いてあるのでここでは省略するが、認められて男になれるといふ時の感激は味つた事のない人には分らぬうれしさである。

かうして島田君のために、又、島田君を通して、誠文堂が創業間もなき時より今日まで、幾多の大小問題で島田君に御世話になつて居るのに拘らず、之に酬ゆることの尠なかつたことは慚愧の至りである。否酬ゆるどころではない。親しさの爲か、又自分の惡い個性と

も云ふべきか、商賣上のことでは今まで私は、島田君と三回も大衝突をしたのであつた。これは我ながら淺慮至極であつたと、其都度自責の念にかられて居たやうな譯で、茲に此記述を結ぶに當り、深く陳謝の意を表すると共に、氏の宏量に甘へて寛恕を請ふ次第である。

販賣方針



上圖は東京堂小賣部の書棚四段を占據せる十大全集一圓均一品下圖は書架入りの十錢文庫

販賣方針

出版社として成功するには、良い本を安く提供して、大廣告をすれば良いのであらふが實際は仲々さうは行かないのである。

私は開業以來一千數種にも亙る書籍を社會に送つたのであるが、その内、自分で、これは名著だと思つたやうなものは何冊あつたらふか。その内容は第二としても賣り方については私は常に自慢してよいやうな氣がしてならぬ。

一體、小學校を出たきりの私にとつて、出版によつて國家社會に奉仕しやうといふやうな遠大な經綸があらふ筈がない。況んや、事により物によつては、まるで自分では良いも悪いも見當のつかないものさへあつた位だから、その點ではまるで落第生かも知れぬ。とはいへ、落第生であるべき私か、どうやら及第して來たところを見ると、そこに何等かの秘訣がなくてはなるまいと、今日つくづく考へて見るのである。

私の廿年の出版生活に於て、何んな仕事が安心して出來たかといふと「是丈けは心得置くべし」の如く、私自身にも良く理解出來るし、自分にとつても「や、これは便利だ」と思はれるやうなものであつた。

第二には、自分の店員時代に、隨分賣れたものだつたと考へられるやうな種類の本ならば進んで出版を引受けたものである。歴史は繰り返へすといふけれど、必ずしも昔良かつたものが、今も良いとは限らぬので、こんな場合には、其時の社會の傾向と自分の頭で判斷して、その本の計劃と之とを相對比して再考するのが常であつた。

自分には全然わからぬものは、世間で賣れてゐるかどうか、嘗ては賣れたものか、どうかといふやうな點を調査してみた。かういふ調査は、商賣の基本をなすものであるから、決して店員委かせにはせず、今日でも自分の手で、充分に納得の行くまでやることにしてゐる。

それでも尙、ハッキリしないやうな場合には、先輩の意見を聞いたものである。店内の者には勿論である。取次業にも、小賣店にも諮ねてみるのであつた。さうして著者關係の人々の意見をも叩き、いよいよ大丈夫と心に決めてから、仕事にかゝることが多かつた。

が、店が發展して仕事が次第に殖えると、何やかやと身も多忙であり、小さな仕事にさう何時までも自分で係り合つて居られない爲に、つい、仕事がおろそかになり、同時に昔馴染の人の紹介であるとか、古い顔馴染であるとかいふ、色々な關係や義理で、出版したくないやうなものまで、「宜しいやりませう」と引受けるやうなことも頻々あるのであつた。

かういふものは、素々儲けるつもりでやるのではないから、損をしても、大したことはないが、時々、相當賣れるつもりで計劃したものが、まるで駄目なことがある。が、兎に角、自分が店員時代の經驗なり見聞なりを基にしたものである以上、時代こそ違へ、どこかに賣れる見込みがある筈であるから、一般書店で賣れなければ、外交販賣をしてみるとか、通信販賣を試みるとか、新聞廣告を利用して、特價販賣、半額提供とか、いろいろやつてみて、結局いけなければ、創業以來十種とはなかつたが、之をゾッキ物として見切つてしまふのである。相當の力を入れてやる仕事であるならば、出版に先立つて、こゝまで考へてかゝらねばならぬものであると信ずる。

幸にして、自分は少年時代から、小賣業、取次業の經驗を經て、出版界へ乘り出したものであるから、單行本と云はず、雜誌と云はず、相當の體驗を得て居るので、販賣については、これでいけなければ、これ、これで駄目なら、斯うと、八方賣り方に就いて考へてゐるものだから、同業の口の惡いのが、小川の手にかゝると、どんな出版も骨までしやぶる、さんざ、煮たり燒いたりした上に、スープにとつて、糟も出さないと謂ふ。

今日では普及版といふものが流行つてゐるが、昔は縮刷版が全盛であつた。一寸賣れた本で、一順行き渡つたなと思つたら、程を見計つて、此の縮刷を出したものであつた。私の取つた販賣方法は、上製の次ぎに並製を發行し、夫れから縮刷、定價の後をうけて特價で追ひ、一冊賣れゝば續卷を出し、續卷良しと見たら、全八卷とか全十六卷にまで延長もするし、姉妹本、正續本なら合本といふ手もあり、發賣何年記念特賣とか、賣行五十萬突破記念特價とか、やれ半價、それ何だと目まぐるしい程に何等かの理由を附けて賣つたものだ。斯ういふやり方は誠文堂一流で、近頃では小賣屋さんが、疲れてゐる爲、又か、といふ風な氣配を示されるので、あまりやらぬことにしてゐるが、概して、この種の商法は良かつたのである。しかし何時でも成功するとは限らない。要は出版物そのものの性質にもよるし、且又その時の狀態にも、モウ一つは膽力にもよるのであらう。

折角成功するものも、今一寸といふ押が足りないばかりに、失敗することもある。誰しも、この位は行くだらうといふ見込みで仕事をするが、信念が居りないか、膽力が不足なのか、最後まで押すことをせぬ人がある。とは云へ、無茶押しは考へもので、自分は仕事の上では相當に押の强い方だが、決して無茶はやつてゐない。

舊主の加島氏は大晦日の晩になつても、日記の仕入れをやめなかつた人である。毎年毎年の統計をとつて、一昨年も昨年も、これだけ賣れたのだから、今年はこれだけ賣れる見込みだと云つて、その見込みより手持が少ければ、十二月卅一日にでも仕入れをやつたものである。かういふ點は加島氏の偉らかつたところで、私も見やう見眞似でこの邊の呼吸を覺えて來た關係上、常に統計類を手離したことはない。

毎日通信では何が出てゐるか、地方註文はどうなつてゐるか、ストックは、雜誌の返品は、雜誌の賣行は——といふことを絶えず數字の上で見、この記錄を殘してゐるので、イ

ザといふ時、その前の同じ場合のあつた時の統計が參考になる。

然し、時代は進展する。單に過去にのみ頼るといふのでは進歩がないのみならず、時代に進歩がある以上、それは大なる過誤でもある。それで、私の店では外國の出版界の記事を載せた雜誌なども取り寄せて、外國書店のやり方なども研究させてゐるし、これまで隨分と日本にはない、賣り方を發表して來たつもりである。出版について、販賣に關し、かうした新らしい知識のある人々、研究心に富んだ人々には出來るだけの敬意を拂つて、その說を傾聽するがよい。

誠文堂は、豫約出版物について、分冊豫約といふ道を拓いた最初の店であり、あらゆる非難の波を乘切つて全集分賣の先驅を遂げたし、其他書籍雜誌の販賣については、同業御存知の通り、隨分思ひ切つた改革を行ひ、其爲に思はぬ障碍にぶつかつたり、種々の困難に逢着したりしたものである。

かういふ進歩的な步みをつゞけてゐる者にとつて、一番困るのは、雜誌協會や書籍商組合の規定が、不完全であつたり、疑義が多かつたりする點である。誠文堂は、近年あまり

に頻々組合の罰則に觸れ過ぎた觀があるが、何時も、問題が紛糾するのは、規約が不備であり、誠文堂の行ふ新機軸を處罰する適應條項がないためである。誠文堂の嶄新な取引に刺激されて、組合幹事諸公が鳩首協議したりするのを仄聞する度に、私は、出版界發展のために常に遺憾に思つて居るのである。

誠文堂が組合の處罰に對して不平を感じたのは毎度の事であるが、表立つて之と爭つたことが一度ある。

夫れは「大日本百科全集」を昭和二年四月に發表し、翌年の十一月に再豫約の募集をした時のことである。

第一回の時、三十七冊とブックエンド一對とを三十二圓で豫約したのを、此の時、三十六冊のみを三十圓で豫約したのは、割引行爲であるといふのが主たる抗議であつた。

こちらの考へは、本が一冊少いし、ブックエンドが添附されない以上、それだけ安く賣るのが當然であるといふのであつたが、組合は、この公正なる觀念を認めまいと目をつぶつて、割引だ〳〵と喚き立てたのであつた。

然も、規定の上に幾多の疑義があつたのにも拘らず、遮二無二違約金二百圓を徴收しやうといふ決定だつたので、私は之に斷然反對したのであつた。幸、先輩諸氏のお骨折りで事落着したが、一時は、小川を除名せいとの聲もあつた由で、私も亦組合を相手に、敢て一戰を辭せずと覺悟し、險惡なる空氣が漂つたのであつた。

然して、取引については、いろいろ改革もやり、新手も試みたが、多くの小賣店は、依然、安易平穩な取引に馴れてゐるので、偶々、何か變つた方法にぶつかると、中には忽ち硬直して、自分に不利なものの如くに考へる向きもあり、徹底して理解して呉れてゐる小賣店からは、喜びの手紙が續々と來てゐるのに一方では、ワケも解らず、只無性に反對を唱へ、業界新聞などに書き立てゝゐるのもあつて、つくづく取引の改革は六ケ敷いのを覺える。

然ながら、組合にのみ賴つてゐては、今日の取引制度は何時になつたら改善されるか見當がつかぬので、本年一月全國の取引先き各位に向つて次ぎのやうな通牒を出した。

圓本全集の華かな惡夢も漸く覺めんとして、昨今の出版界は大きな轉換期に立つて居ります。圓本が習慣付けたこれ迄のやうに散漫な豫約物の取引方法ではもう一歩も進む事が出來ない迄に立ち至つてゐるのです。

もつと堅實な方法でお互ひに利益を擧げてゆく事こそ本年の出版界が取引店各位の理解と同情を待つて成就完成せしむべき義務であると信じます。實際發行所として困る事は配本後半ケ年も經つて、當然の如く平氣で返品されたり、急ぎの註文だといふ御註文部數をアタフタと送ると、スグ又返品されるといふ風であり、當方としてはどれがほんとうの數なのかどれ丈け印刷してよいのか、殆ど見當がつかない事です。勿論最初の第一回はお互ひにハッキリ見通しがつかないので止むを得ませんが、第二回配本も第三回配本も出鱈目な註文書によつて、夢中に配本し、後でドシ〳〵返品されて決局、殘本が、山積するといふ悲慘な事を豫約物刊行毎に繰り返して居ります。これでは豫約の本義に悖るどころか出版元として、宣傳費、原價計算、その他の豫算を作る事が出來ず、作つて見ても皆目雲を摑むやうな狀態で、シッカリした根底のある豫算は出來やう筈がありません。

で、誠文堂・新光社では左記全集の取引方法を引き締めて本當の豫約出版の意義を徹底する事と致しました。何卒、不惡御諒解下さつて改正の取引規約を御守り下さる樣御願ひ致します。

誠文堂・新光社發行豫約物及新刊書改正取引規定

(一)進行中の豫約出版

一、校註日本文學大系。二、萬有科學大系。三、綜合工學全集。四、社會科學講座。五、名人圍碁全集。六、將棋全集。七、園藝植物圖譜。八、世界地理風俗大系。九、今後の豫約物全部。

(二)返品絶對謝絶　昭和七年三月より配本の分は絶對返品を謝絶す。

(三)既刊配本濟の殘本返品の有効期間は七年二月二十九日迄とし三月一日以後は絶對返品を謝絶す。

(四)豫約物外新刊書の返品期間　これは發行したる翌月より數へて六ヶ月以内に返品の事

(小賣店への期間を五ヶ月とし特約店を六ヶ月と致します)

右の通り定めましたから、豫約出版物は確實なる申込部數を同封のハガキに御記入の上折返へし御送付下さる樣願ひます。若し、右申込書が不着の場合は貴店は不用と看做して送本を見合せますから、間違なく御申込願ひます。弊社では今回の申込部數によつて發行部數を定める事に致しました

たから、御送付出來ず貴店の御取引先に御迷惑を掛けましてもその際の責は負へません。

●尙今後誠文堂・新光社が發表する豫約全集は總て右の條件によりますが、然し、新たに豫約刊行したものに限り宣傳その他販路擴張の意味にて第一回配本は〆切後十五日以内の御返本を申受け、第二回配本後は右の規定による事と致します。(然し第一回配本も御希望なければ御送本を見合せます)

●それから新刊書の委托も六ヶ月を經過してゐるものは二月中に是非御返品下さい。これも既刊全集と共に三月一日以後は返品を謝絶致します。

これは、當然すぎる程、當然のことなのに、今日の出版界では勵行されてゐないし、取次店も、組合も、他の一流出版社も、之を敢行しやうとはしないのであるから、不肖私が個人として、この取引改善を斷行したまでゞある。

時代は正に取引の合理化を望んでゐる。私は勇氣のある自信に滿ちた出版社が續々とこの誠文堂と新光社の擧に足並みを揃へて下さることを望んで止まない。

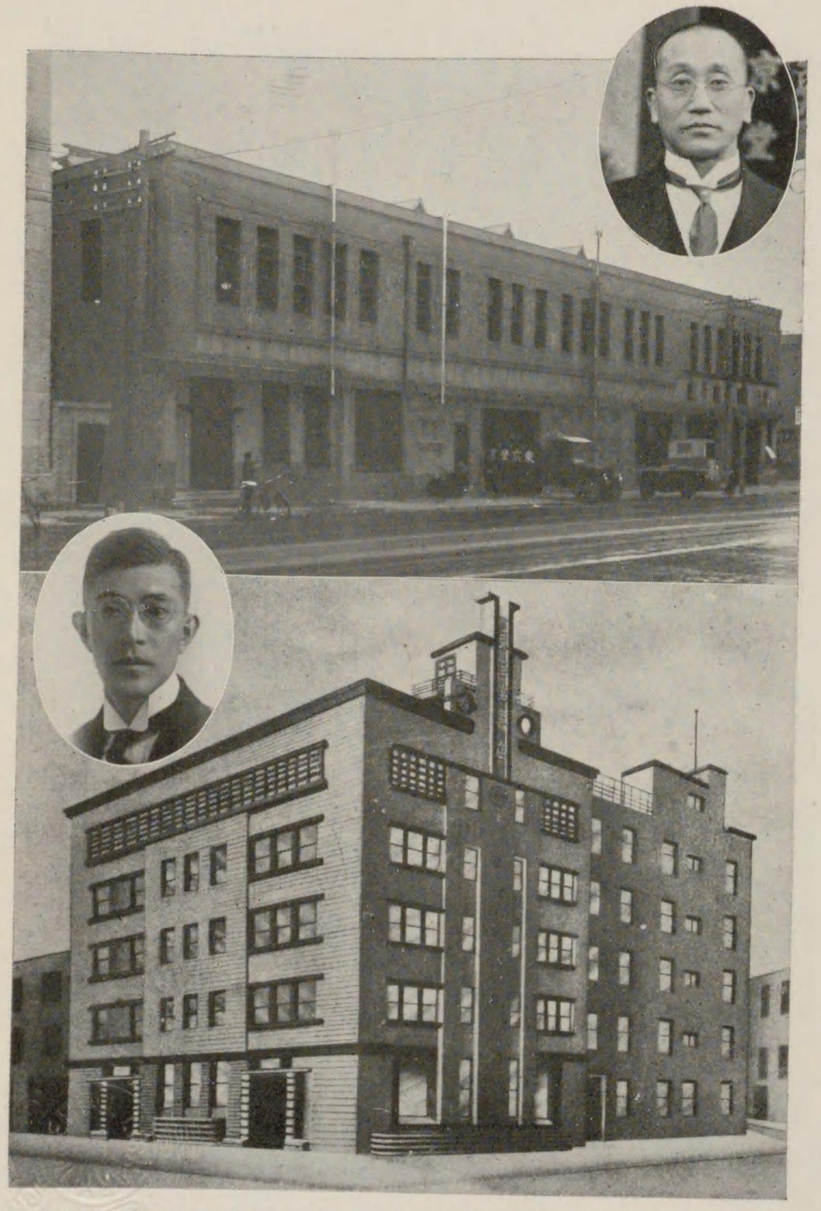
得意先諸君

創業廿年を回顧すると、先輩友人の支持、著者諸先生方の後援を忘るゝ能はざると共に他方取引先と仕入先に對し、亦滿腔の謝意を表さねばならぬ。

私は至誠堂に永年勤めた御蔭で取引先には、始めから惠まれて居た。大取次店の東京堂、東海堂、北隆館、の各店は創業と共に御取引を願ひ、新刊や豫約出版は勿論、今の九大雜誌は、私の創立した大東館を加へ此四軒から全國小賣店へ配給して貰ひ、廿年此方隨分無理を賴み、便宜を計つて貰つて居る。

獨立の當初は下町方面の小賣店は殆ど全部と云つてよい位御贔屓を蒙つた。殊に店員時代からの親友文林堂**中川治三郎君**には商賣以外に、精神的に後援して貰つた點は多大で感謝に堪へない。亦創業當初に於て、今は廢業されたが、勉强堂**岸野英一氏**にも隨分可愛がられた。今新宿で池田屋書店を經營し成功して居られる**池田定君**が、まだ勉强堂に居られ

四大取次店（二）



上東京堂と取締役支配人赤坂長助氏・下東海堂と社長河合晋氏

る時分で、當時勉強堂へは米國の同業から、大きい註文が月二三回飛込む頃とて、その經まつた大註文を貰つては發行所へ行つて、何とか彼とか甘い事を併べて、よく値切り倒したものであつた。今は知らないが、其頃は米國や布哇から盛んに大註文が來たものだ。當時私は此方面に力を注ぎ、註文の來る輸出先と云ふ輸出先は悉く取引したため、夫れが一つの勢力となり、そのお蔭で、名もなき小書肆誠文堂も一躍相當の看板に成たのである。

當時の輸出先は有樂町の**田中商會**、元數寄屋町の**よろづ商店**、京橋三十間堀の**白井笹市氏**、横濱の**岩上合名會社**であつたが、その後に神田に**小野五車堂**が出來て取引し、そこへ横濱の**勉强堂氏**や**第四有隣堂氏**からも亦、輸出註文が來るやうになつたのだから、當時は隨分愉快なものであつた。是等の七輸出業者は無論私如き小取次店へ註文全部は任せはしない。夫々發行所なり、特約店へ交渉したのであつたが、有難いことにはまだ穴を知らなかつたのである。夫れは見切りゾッキ品、或は擔保流れとか、又入銀で買込み過ぎ、所謂背負込んで居るのを値切り倒すとか、更に又「當初の商賣」の項で書いてある三省堂發行品の横濱からの逆仕入の如き、こんな風の事は誰れも知らなかつたのである。

四大取次店（一）

上圖北隆館と社長福田金次郎氏・下圖大東館

商賣には裏の裏があると云ふが、小川式商賣は裏の裏を行つたのであるから、今考へると感慨無量である。然し時には失敗もある。夫れは背負込みの入銀品を値切り倒せなかつたときや、ゾッキ品が二三日前まで有つたのが賣れて了つた時であつた。こんなときは平身低頭謝るより外なかつたが、私に聊か特色のあつたせいか、「困るなあ次の船に間に合ふやう探してくれ」と、たいして怒られなかつたものである。

此次の船では面白い話がある。當時の輸出註文は一種最低五冊、大抵十冊か廿冊で、大きいものは五十冊、百冊と云ふのであつた。之を發行所へ少し割引をして呉れと賴むのだが少しも負けて呉れない發行所があつた。そんなのは引合ぬから「では斷りませう」と馳引きしておき、註文者へは、只今品切れですから次船まで出來る見込と通じておくのが常套手段であつた。さうして後でまた、發行所へ行つてヂワ〳〵交渉するものだから、大抵は何程かしら負けて呉れたものであつた。今神田の某堂へはよく監獄から、囚人へ讀ませるための修養書が一種二百、三百といふ註文がちよい〳〵飛込むが、そこの社員某君は仲々の手腕家で、之れに似よつた手で、發行所を殺してその社のために、大に利益を擧げてゐるさうだ。之等が取次店のコッと言ふべきであらう。

此の輸出註文先は、當時の誠文堂にどれだけ威力を與へて呉れたか、全く感謝に堪えない。田中氏、白井氏、岩上氏は御無沙汰して久しく逢はないが、五車堂の**小野昇六氏**は今アメリカに在るが時々お賴りを載くし、昨年誠文堂から洋行に出した店員倉本君が、向ふで病氣入院した折など、大層お世話になつたものだ。よろづ商店は今日本橋で横濱商事株式會社として、望月氏が盛んに活躍して居れらる。又第四有隣堂**松信大助君**は、今有隣堂として發展に發展を重ね、大きくやつて居られるが、此松信君は七軒の輸出業のうち一番ガッチリして居て、註文は呉れたが、儲けさせて呉れなかつた人であつた。此人には私はいつもタヂ〳〵の態であつた。夫れに付けても思ひ出すのは同じ横濱である勉强堂の若大將**齋藤豊隆君**であつた。私と同年でよく氣が合つたので、親しく交際し精神的に引立てゝ呉れ實際よい人であつたが、廿九歳を一期として早逝されたのは、返すゞ〳〵も惜しい事であつた。

市内小賣店では、神田では勉强堂外三省堂、稻葉書店、東條書店、有斐閣の各店に御引

立を載いたが、取わけ有斐閣の**金子直治君**とは親しくなつて、毎日澤山の註文を載いたのは有難いことであつた。本郷では日本堂、有朋館、吉玉、森江、淺光、有終閣、本郷書院の各店で、何れも御贔屓を載いた。その内、本郷書院は、押川春浪氏の冒險小説を出版して居られたので、賣つたり、買つたりであつた。其頃の御主人は逝去されて了つたが、私の小僧時代から親しい方であつた。

外に日本橋、京橋、淺草、深川と毎日廻つて居つたが、何と云つても日本橋、京橋はよく賣れて、澤山の註文があつた。今川橋から新橋迄の間には舊主人の太洋堂、金櫻堂、青野文魁堂、中川文林堂、服部書店、春祥堂、新橋堂、木田金盛堂、新井、また人形町では至誠堂小賣部、榮松堂、武井信義堂、都屋の各小賣店諸氏が、元至誠堂の得意先であつた關係で、取わけ贔屓して呉れたのは難有かつた次第である。此うち思ひ出を書くとすれば春祥堂さんである。初代の店主故**近藤音次郎氏**は、小賣業界稀に見る温厚な人格者であつた。昔も今もよく賣れる店で、當時よく註文して呉れたものだが、此の春祥堂の番頭さんで手の不自由な峰さんといふ人と來たら、御主人には忠實であつたが、御主人の近藤氏に引較べ、我々へは理解がない位よく値切り倒したものだ。云はゞ仕入が上手いのであるが、兩天秤を掛け、元値に近いギリ〳〵までやられたものだ。亦信義堂**武井豐君**は恩人吉田氏と懇意な關係で、私が獨立後はよく面倒を見て呉れ、爾來親しく交際して居るが、此武井君には吉田氏にやつた養子龜吉君の事で媒人をやつて貰ひ、いろ〳〵御世話になつて居る。

地方同業を主として取引さるる卸專門の店では、林六合館、榊原文盛堂、淺見文林堂、松邑三松堂、杉本翰香堂、大坂屋號の各店などが獨立當初の御得意であつて、永年御引立を蒙つたものである。之等の地方仲間專門のところでは、毎日小僧、中僧君が朝大抵一定した頃、品集めに來て呉れたのであつたが、此中小僧さんの中にも惡童が居つた。ある時のこと、私の一軒先の某取次店に、何かの事で氣に喰はぬと云つて、此惡童達申合してその取次店へ仕入に行かぬこととした。夫れはよいとして、態と勢揃ひしてその店の前をワーッと鬨の聲を擧げて素通りなどしたことがあつた。

當時、私もまた少しばかり地方仲間の取次をやつた。横濱は前記の勉强堂、第四有隣堂

の外第一有隣堂、第三有隣堂、弘集堂、金養堂の六店、又二三年經た頃、上海の申江堂、旭川の大正堂、仁川岩松堂**新井武之介君**と靜岡の成功堂の四店、以上の各店には尠からず御引立を載いた事を記憶して居る。

かうして各位に多年御引立を載いて居つたのであつたが、昭和三年三月私の店に十年勤續した、誠光堂**堤健治君**が獨立開業するに及び慰勞金二千圓を添へ、四大取次店及大阪屋號の外の市内取引先は全部之を獨立した誠光堂支持のため三年間といふものは、堤君に一任したのである。云ふまでもなく、これは主人として當然の義務であり又後進奬勵の爲めでもある。誠光堂は、誠文堂と新光社の發行品を一手に販賣すると共に、他の發行所の取次品も自由に取扱つて、今日まで盛大に營業して來たので、取次仲買店として、今では押しも押されもしないのは、私の滿足する所である。

然し、誠光堂も今は基礎も固まり、獨立當初誠文堂出版物一手扱ひの特典は、次ぎに獨立する店員があつた場合を考慮して、滿三年間だけの約束であつたので、最近は新光社のみをこゝに任せ、誠文堂分は親友長井君の上田屋書店に任すことゝした。

之等の取次品の取引先の外、私が出版を始めてから御取引願つて居る先は、名古屋に星野、川瀬、小澤、三協書院の四店がある。星野書店**星野松次郎氏**には何呉れとなく親切な注意を載いた。遊んではいけない。贅澤をしてはいけないと戒められ、名古屋へ行くと、時分どきには、必ず御飯を饗應されたが、贅澤を戒められる位だから麥の御飯であつた。又折には「きしめん」で、それが又御自慢の一つであつた。さうして其都度將棋の御相手を仰付けられたのである。星野さんは將棋は慥か三段である。いつであつたか、星野さんに飛車を落して貰つてやつたとき、私しが飛車先の歩を突いて行き、星野さんの横つ歩を取つて、到々私が勝つた事があるが、横歩を取るのは定跡にない、無茶をしていけないと小言を云はれたことを記憶してゐる。矢釜しい方であつたが親しみのある人だ。久しく御目に掛らぬので、今之を執筆するに當り御逢ひしたい氣持がしきりに湧く。

川瀬書店の**阿部君**、**佐久間君**も創業以來親しく交際し、御引立を戴いてゐるが其賣捌に就いては常に積極的に御盡力を願つておる事を感謝する。百架堂**小澤吉三郎氏**にも之れまた創業以來御懇親を願ひ御引立を載いた。三協書院氏は大正十年四月、芳賀自習漢和辭典

發行以來の取引だが、此辭典を中部一手に任せ、毎年八千部づゝ御引受けを願つてゐる。此名古屋は昭和二年三月、百科全集のことで行つたのが最後で、創業以來四五十回は行つてゐるのであるが、曾て花街に足を入れたことは一遍もなかつた。夫れは星野氏の教訓を守つたこと勿論であるが、一つは汽車の時間の都合からでもあつた。到る所遊ばざるなき底の私としては、名古屋こそ正眞正銘の清遊の地である。

京都には東枝、博省堂、京都書籍、大盛社の四店がある何れも大に賣つて戴き感謝してゐるが、博省堂**伊藤清次郎君**とは個人的の交際があつた。夫れは氣が合つてよく飲んだからである。今は亡くなられたが東枝書店の**東枝吉太郎君**とも親交があつた、伊藤、東枝、小川と三人よい合棒で、御蔭で鴨川や祇園の情調を充分味はして貰つた事を感謝する。京都もたしか五年前、百科全集の要件で行つたのが最後であつたらう。花によし、月によし雪によしで、また同氣相求むる友人の多い點に於て大に思ひ出の多い所である。東枝君のあの徹底した遊び、伊藤君の面白い愉快な面影、今尙眼前に彷彿たるものがある。

大坂は寶文館、盛文館、福音社、登美屋、柳原、岡菊の六店であつて、何れも親密なる御取引を願ひ、賣捌に就て土地柄だけに並々ならぬ御盡力を載いて居るが、**岡菊書店氏**、**柳原書店氏**は最近の御取引で未だ深い御交際のないのを遺憾とする。また數年前まで私が創業以來の取引である金正堂があつたが、店主**梅林寛治君**は、私の親友の一人であつて、良く遊び良く働いたが、放漫な營業をつゞけた爲め、流石順調の店も遂に破綻を來し、廢業の止むなきに至つたことは遺憾に思ふ。氏は今誠文堂の幹部として營業部にあるが、大いに自重して再起されたいものである。盛文館故**岸本榮七氏**には創業以來御取引を願ひ、誠文堂發行品は大阪で一番澤山賣捌いて戴いたのである。今は獨立されたが、當時の支配人**清水權次郎君**にも御配慮を戴いたことを感謝する。

福音社**矢部外次郎氏**も、創業以來の御取引である。親切と堅實なる營業方針は常に私の敬服して居る所である。御子息**良策君**また同一方針に、加ふるに潑溂たる元氣は今後の發展期して待つべきである。

登美屋故**若松彦次郎君**は獨立の期が私と相前後しておつたので、當時は意氣投合してよく飲んだものである。然し私と違つて、堅實一點張りの人であつた。昭和三年八月早逝せら

れたのは残念である。爾來未亡人**きみゑ氏**は健氣にも夫君の跡を繼いで健闘せられ、誠實謹勉なる支配人**不退君**之を補佐し鞏固なる基礎を築きつゝあるは、只管敬服の外はない。

寶文館**柏佐一郎氏**とは數年前の金正堂の廢業に際し、その引繼からの關係であるが、さすがは關西の重鎮たる店だけあつてよく賣捌くのには驚く。殘念ながら私は未だ柏氏とは親しく面接の機を得ないが、梅林君を通じ、同君が並々ならぬ御世話になつたこと、其他業界あらゆる方面に重きをなす同氏に對し、私は常に私淑して居るのである、尙此機會に平素賣捌に御盡力を賜る同館の**野田改造君**に深く敬意を表しておく。

此大阪ぐらい私に取つて思ひ出の多い所はない。夫れは梅林君や若松君とよく遊んだと云ふばかりぢやない。茲には書けない、面白いこと嬉しいこと、珍談奇談がかず〳〵あるのであるが、他日に讓ることゝする。

神戸は川瀨日進堂、寶文館神戸支店の外、今は寶文館に屬したが、日光堂**橋本一男君**がある、橋本君は元至誠堂店員で私の後輩であるため、神戸に於て開業の際は積極的に應援してあげたのである。人一倍の奮闘努力家であるが、進む事をのみ知つて、退くことを知らないのは、氏のために常に遺憾に思ふ所である。

日進堂**川瀨光吉氏**も創業以來の古い御取引である、熱心で、堅實で、親切な方で、よく賣れるお店であつた。久しく御目に掛らないが、遙に氏の健康を祈つて止まない。

寶文館神戸支店氏は、本店と同樣、數年前よりの取引である。金正堂帳合として取引を願つて居たので、屢々伺つた事があるが、明るい立派なお店である。

廣島市に丸岡書店と積善館の二氏がある、此**丸岡才吉氏**は新進氣鋭、今廣島縣組合長をして居られ、逐年發展に發展を重ね、大に敬服して居つた人であつたが、彼の昭和五年の誠文堂十錢文庫は出版界を毒するもの、惹いては小賣業の經營を危うするものなりとして廣島縣では自らリーダーとなり、或ひは全國に檄を飛ばして、其不賣同盟を提唱したなどは、常に時代を見るの明ありと云はれた同氏の爲にも甚だ遺憾であつた。今や「トップ」「セルバン」「モダン日本」、などの五錢十錢十五錢雜誌も現れ、全國に十錢均一店が横溢してる位で、今日では、十錢の品を賣つてるたら店は潰れるなどといふ說は笑ひ話に等しいが、當時は眞劍であられたやうに思ふ。

積善館**岡原佐太郎氏**に未だ御目に掛らぬのは甚だ遺憾である、積善館先代故**花井卯助君**及び直接御取引は願はなかつたが、友田書店故**友田藤助君**と私の三人は親交が深かつたのである、そして兩氏とも酒豪であつたので、廣島や宮島に遊んだ當時を追憶し、今は亡き兩氏に深く哀悼の意を表する。

山口市に白銀日進堂がある。九州には久留米市の菊竹金文堂、佐賀市に大坪惇信堂がある。小倉に寶文館出張所、熊本に長崎支店があるが、何れも創業以來の取引で、常に誠實熱心であることは萬謝に値する。ことに菊竹金文堂は福岡支店の外門司金山堂、小倉金榮堂、佐世保金明堂、熊本金龍堂、鹿兒島金海堂、別府金泉堂等、の外九州各地に販賣店網を張り、更らに中國廣島にまで手を延ばしてゐる一大勢力であつて、東京四大取次と並び稱せられるお店であつて、私は常に其活潑なる商業政策に敬意を拂つて居る。

山口以西は地理的關係に依り、商用として行つたのは稀である。隨て山口、小倉、熊本は曾て一回も訪問せず**白銀市太郎氏**、**寶文館中尾氏**、**長崎茂平氏**等には未だ御面會の機を得ざる事を遺憾とする。

惇信堂**大坪萬六氏**は二回御訪問申した事がある、多年の御愛顧を謝すると共に將來一層の御引立を御願する。又前記金文堂の經營者**菊竹嘉市氏**及御子息**大造氏**には數回御面接の光榮を得てゐるが、流石業界の九州鎭臺であるとうなづかれる。

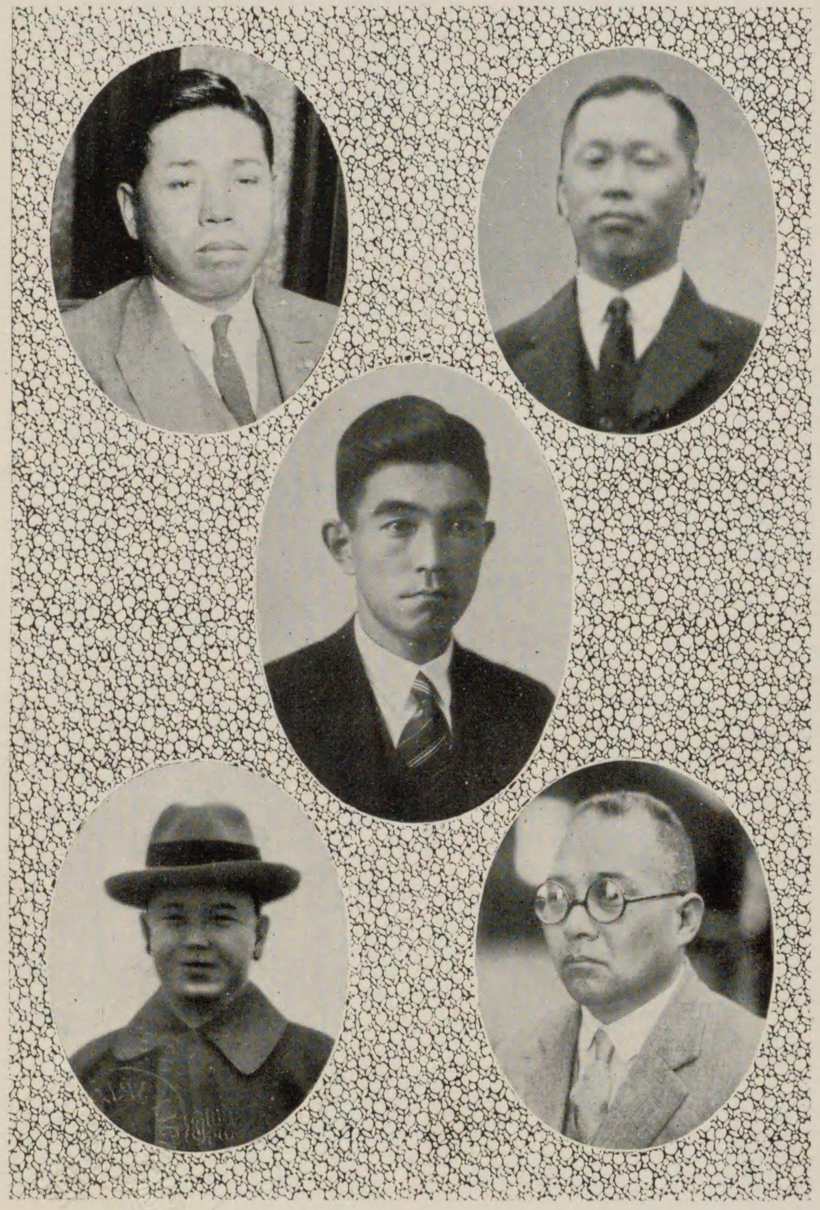
東京以東は、水戸市に川又書店、平野書店、橋本光文堂の三氏があり宇都宮市に內山集英堂氏、仙臺市に金港堂、英華堂の二氏弘前に今泉氏がある、北海道には札幌に富貴堂、維新堂の二氏、小樽に勉强堂氏、旭川に富貴堂支店がある。富貴堂**中村信以氏**に就て思ひ出を茲で記しておかう、時は大正十一年貳月自習漢和辭典が賣れて來た頃であつたらう、この辭典を註文により二千部送つたのであつたが、どうした譯か千八百何十部といふのが返品されて辛ひ目に逢つたことがある。然も船便で返されたので、海水をかぶつたものも澤山あり、本まで鹽ぱい目に逢つたのであつた。中部日本には甲府市の朗月堂、柳正堂の二氏がある、長野市に西澤書店、金華堂の二氏、新潟市に目黑支店氏、長岡市に覺張、目黑の二氏、高岡市の學海堂氏、金澤市の宇都宮氏等何れも創業、又は大正十年の芳賀自習漢和辭典發行以來の取引で、その販賣に就いては多大の御盡力を願つて居り、また永年のお取

引で、一回又は數回伺つて居る事として、當時の御主人方の笑顔が思ひ出されるのである。日頃載く取引上のお手紙にも、いつも讀みなれた筆蹟が感じられて、なつかしさ、有難さがしきりである。前記の各位は、いづれも私に對して特別の眷遇を賜はつて居る方々のみであるので、一度出かけて行つて、親しく日頃の御厚意を謝したいと思ひながらも、ついつい仕事に追はれて心ならずも御無沙汰申してゐるのは、申譯ない次第である。此機會に於て厚く御禮を述べ併せて陳謝する次第である。

前記仙臺金港堂社長**藤原佐吉氏**は私が至誠堂時代からの知人で、芳賀自習漢和辭典では、特別の御配慮を戴いたことを感謝する。又常務取締役**前田慶次君**は、大倉書店に勤務時代からの知人で、其後獨立して出版業星文館を開始せられて以來、一層の親交を重ぬるに至つたのであるか、氏の剛放活達な性格は、地方の一小賣業としては恐らく不滿を感ずるであらうけれど、冀くは現狀に甘じ金港堂のために努力せられんことを希望する。

尙西澤書店**西澤喜太郎氏**には彼の大誠堂事件の當時、特別なる御配慮を戴きしことは、私の終生忘るゝ能はざる所であることをこゝに附記して謝意を表する次第である。

仕入先の人々



上右川島洋紙店紙部員内山嘉六君・上左弘文堂通信社營業部長伊藤春水君・中共同印刷營業部長大橋松雄君・下右秀英舍幹部中田福造君・下左王子製紙販賣主任濱井憲一君

吾が仕入先

利は元にありで商人に取つて最も大切なものは仕入であらう。私の出版關係の仕入先は澤山ある。夫れがまた何れも云ひ合したかのやうに、親切に勉强して呉れて居るのはうれしい極みである。

私は自分の發行品を取扱つてゐる賣捌店が、若し「賣つてやるんだ有難く思へ」など云ふ言葉を口にしやうものなら「冗談云つては困る、賣れる本を出し、大いに宣傳すればこそお客が買ひに來るのだ」と茨城縣特有の惡い氣性を出したがる男だけ、此仕入先に對しては常に反省して、お互に商賣である、共存共榮だと思つて「買つてやるんだ」などゝの顏付をした事は曾て一度もない。亦無理に値切つたり、註文したものを小便したりするやうな不合理なこともしたことがない。其代り取引先に對しては不誠意な事でも若しあつたなら、直に取引を停止する。又係りのものを誘惑したり、怪しい素振りが私の目に映じたら

懲罰とか政策とかの意味で、期限付の取引停止をすることにして居る。

又取引の合理化を期するため、數年前から誠文堂、新光社は勿論、社員への中元歳暮の贈物を謝絶し、社員への饗應や袖の下も亦絶對に禁止してゐる。これは四年前から、其季節〳〵に取引先に對し、繰返へし通告して來たのだが、今尚少數ではあるが一、二中元歳暮を持つて來るボヤ〳〵したものが有ることは、遺憾に堪へぬ次第である。

かういふ譯で仕入先には、私は常に大に敬意を拂つて居るのである。故に謝恩と後日の記念の爲に現在の仕入取引先を左に列記し二、三の思ひ出を記すことゝしたのである。

一、廣告取扱先

博報堂、日本弘業通信社、日本電報通信社、正路喜社

一、用紙取引先

川島洋紙店、岡本洋紙店、博進社洋紙店、細谷和表紙店

一、印刷取引先

共同印刷株式會社、株式會社秀英舍、日清印刷株式會社、凸版印刷株式會社、第一印刷株式會社、美術印刷株式會社、川崎活版所、日本美術印刷株式會社、尚文堂印刷所、大熊整美堂、中村印刷所、今井印刷所、中外印刷株式會社、菊地三色版工場、太田印刷所、二喜堂印刷所、新倉東文堂、明治印刷株式會社、井口印刷合名會社

一、製本取引先

關山製本所、齊藤製本所、村田製本所、山縣製本印刷株式會社、新榮社、板倉製本所、本位田製本所、井上製本所、山田製本所、岡山製本所、佐久間製本所

一、製版、製函取引先

武田整版所、岡島金版店、山田木版店、關根金版店、寸正堂製函所、今關製版所、井澤製版所、川俣製圖店、森アトラス社

一、其他

渡部寫眞館、合同運送店、清水革店、小林革店　新聞聯合社（其他は略す）

以上は昭和七年四月五日現在である。順序は不同なれど、大體に於て取引金額を以て順

序としたが一、二、創業以來の古い關係に依つてゐるのもある。

此のうち全體を通じての取引支拂額は、何といつても博報堂内外通信社が最高である。ここ數年、この一軒のみにて一ヶ年の支拂額は實に參拾萬圓を下らないのだから、宣傳費の支出も容易なものでないことが分る。

博報堂のことは廣告政策の終りに記したので茲へは書かぬが、弘業通信社も殆んど創業以來と云つてよい位、古い取引で、部長**伊藤春水君**が取引以來、顏を出され今も昔と變らぬ親切さであることはうれしい。此伊藤君とは地方新聞の旅行へ、度々連れ立つて行き、隨分馬鹿をしたものだ。今は社長**與田富藏君**も折々は見えられ、益々親密の度を加へつゝある。

電報通信社は博報堂と取引後間もない取引で、弘業通信社より先であつた。有教社**宇野富夫君**の在社時代で當時**阿部富麿君**といつてハゲ頭の人が誠文堂の係りであつた。此阿部君は仲々面白い人で、おひる時分に來ると、よく御飯を出したものだ。酒客だから一本つけて上げると、必ず「嗚呼世の中は烏羽玉の」と薩摩琵琶櫻狩りの一曲を奏するのが常であつた。所が此阿部君の退社後電通とは取引中絶して居つたが、元博文館出版部長先輩

横田地巴君が入社するに及んで俄然復活し、此頃は毎月の支拂ひも相當額に達して居る。

正路喜社は政友會のパンフレット以來の取引で、毎月の取引額は大したものでないが、取引よりは、重役**黑崎雅雄君**との交際の方が主のやうな觀を呈して居る。

用紙は廣告に次ぐ支拂高である。川島洋紙店は創業以來の深い取引であるが、出版を始めた當時は、布目洋紙店の**大澤清助君**と竹尾洋紙店**竹尾藤之助君**も來てくれ、皆取引して居つた。此大澤君は落語家跳足といふ話上手の面白い人で、電通の阿部君と共に忘れ難い人である。川島の**内山嘉六君**は今どうして居らるるか、創業以來一昨年秋頃まで來られて居つたが、熱心に忠實に勉强して呉れた人であつた。新光社が私の店へ來るまでは、博進社、岡本商店に一指も染めさせないと云ふ位の奮闘振りで、誠文堂の發展を我がことのやうに喜んで呉れた。そんな事から誠文堂の花見や潮干狩には、斡旋もするが亦大いに飲みもした。一昨年の東京灣舟遊には醉つて海中へ墜落し、アワヤ何左衞門とか改名に及ばんとしたが危ふく助かつた。その時の云ひ草が面白い。「誠文堂の景氣のよいのが嬉しくて落らたんだ」と負け惜しみも强いが、交際が古いだけに我事のやうに喜んで呉れたことも眞

實であつた。一昨年秋頃、變な噂を聞いたので二三回忠告してやつたが、三十年も居た店も到頭止めたさうだ。惜しい事である。兎に角博報堂の島田君と共に仕入先で一番古い人だけに思ひ出も多くなつかしい人であつた。

博進社、及び岡本商店は共に創業四五年目頃からの取引である。然し、川島洋紙店の內山君が躍氣となつて勉强するので、當時は大した取引はしなかつたのである。株式會社新光社創立と共に二軒とも、舊新光社の引懸りで爾來親密な取引をするやうになり、そこへ又博進社は**大島久吉君**、岡本商店は**岸本淺次郎君**といふ、業界切つての豪のものが出入するやうになり、始めは川島と三軒、競爭の形であつたが、內山君のやめた後の川島洋紙店はどうもピンと來ない觀があり、新光社の昔の損害を誠文堂で……などゝ江戸の敵を長崎での筆法で大島、岸本の兩雄、ともすれば妥協の氣配が見え、此のところ誠文堂枕を高くして寢られなかつたものである。然し現在では杞憂に過ぎなかつたことがハツキリ分つて居るので大に安心してゐる。

此洋紙問屋を通じて每度御配慮を戴いて居る製紙會社諸君へ此機會に敬意を表することとしたい。富士製紙の**小松留吉氏**とは七八年前と記憶して居るが、矢の倉福井で御目に掛つたことがある。王子製紙の**濱井憲一君**とは數回御逢ひした。其席上いつも將棋をやつたのであるが仲々指せる人である。私は謙讓の美を發揮して何時も花を持たして居る、ト云ふと怒られるかも知れぬ。樺工中津工場長**瀨古太一郎氏**にも御逢ひした。親切で愉快な人である。加工製紙井口君のことは「新光社と私」の項にあるので玆では控へる。

印刷は每月用紙と大差ない支拂ひである。內取引額の大きいのは何といつても共同印刷である、古いのでは川崎印刷所と中村石版所である。**中村勝藏君**とは創業と共に取引して居る。處女出版「わがまゝ」の袋や箱張りは此中村君の處でやつて貰つた。自轉車で校正に行つたのであるが當時を追憶して感慨無量である。川崎印刷は創業二年位の時と記憶して居る。此の川崎印刷は今若主人**川崎佐一君**がやつて居られるが、亡くなられた先代**川崎佐吉君**は大刀山展最の角力好きで、愉快な面白い人であつた。共同印刷は震災前の大正十一年、當時の外交**石塚市郎君**が紹介もなく飛込んで來たのが始りで、夫れからの取引である。私にとつて共同印刷と取引したことは大變な幸福であつた。夫れは誠文堂のドル箱で

あつた「芳賀自習漢和辭典」と外五六の紙型及び組版進行中のもの二三が、あの震災に殘つたので、震災後の復興をどれだけ早めたか分らないからである。

爾來密接の取引を續けてるうち新光社問題となり、百科全集始め幾多の全集と諸雜誌を賴み、新光社は殆ど共同印刷一手に依賴してゐるが如き觀がある。幹部**大橋松雄君**、**山本定輔君**、**東興亮君**の諸氏とは何れも親交を重ね、常にその親切なる御取扱を喜んで居る。

秀英、日清、凸版、何れも震災後の取引である。秀英社幹部**中田福造君**とは古くより顏馴染であつたが、取引は遲かつたのである。氏の乘馬道樂は業界誰れ知らぬものなく、隨て技術も免許皆傳の定評がある。本書のアート刷口繪及挿繪は中田氏指導の下に入念に印刷せられたことを斷つておく。日清印刷は**平野喜代松君**が見え、凸版印刷は**小川三郎君**といつでも交渉するのである、何れも代表四大印刷所であり、負けず、劣らずに親切であつて勉强して呉れるのは至幸である。再びあつては堪らないが、震災があらうが、何處に爭議が起らうが、此四大印刷所があれば安心して居らるゝ事は有りがたい。

整美堂**大熊整君**は共同印刷の分身であつた精美堂在勤當時、誠文堂の得意係であつたのに始まり、氏が昭和二年九月獨立と共に今日に及んで居る。温厚誠實熱心なる商賣振りを見込み獨立に際して應分の援助を惜まなかつたが、氏の今日の發展は滿足に堪えぬ。理想社**田中末吉君**は本書別項震災記中にあるが、氏が當時盡されし萬分に酬ゆる謝恩とし、復興後何なりと希望を容れようと提案したところ、十二ポ活字五十萬本を買ふ資金を融通されたしとの事であつた。素より厚意的貸與であつたので返却も迫らざるに、毎月一定額を日を定めて返却せられし氏の眞面目さは私の敬服に堪えざる所である。中外印刷**渡邊一郎君**は二三回逢つたゞけで親密といふ間ではないが、今明治印刷を任せてある**服部源治君**を通じてよく知つて居る。眞面目で奮鬪家で先代を凌ぐといふ定評があるのは喜ばしき事である。切に健鬪を祈る。太田印刷所**太田米吉君**は新光社顧問辯護士**田代京平君**の紹介に依り昭和五年からの取引である。常に第一線に立ち得意先をよく廻る努力家で、豪氣活達愉快な人である。序に酒豪に近い點でも敬意を表して置きたい。

東文堂**新倉誠一君**は、私が明治印刷を引受けると同時に、取引をして居るのである。明治印刷は印刷專門で、階上の組版部は前專務**佐藤磨君**の個人經營であつた。夫れが前の明

治印刷をして經營不能に陷らしめた原因であるので、私が明治を引受くるに至り、佐藤君は退社して貰ひ、和田君と取引關係であつた新倉君に交渉し、組版を專門に、新倉君個人經營として、二階を家賃で借りて貰つたのである。經濟は別々だが、よく連絡が取れ、新倉君は明治の印刷を自分のもの〻如く、又私の方は二階の組版を自分のものとし、云はゞ夫婦の如き氣持で助け合つて居るから、どつちも成績を擧げて居る。

そんな關係から、本書の組版は、新倉君にやつて貰つたのであるが、いくら夫婦關係でも、此組版には新倉君も弱つたらしい。夫れは本屋の爺父である私も、本を書いたのは始めてであるから、當初の原稿と來たら、元々汚ない所へ、編輯の方で眞赤に直すし、組み上つてからまた組み直すし、校了になつてから、記憶が違つて居つたからの、これは書き方が突込み過ぎたから書き直したいの、かういふ面白いことを思ひ出したのと、急がせながら九校も十校も出して、やつと校了にしたのだから、全く申譯ない次第だが、新倉君もこんな先生に出會したのは始めてゞあらうが、私も始めの終りで、再び本など書くことはないから安心して貰ひたい。

製本所で古いのは關山製本所である。此**關山豐吉君**は大正五年からの取引である。その以前は蠟燭町の**成田製本所**であつた。この成田君は創業からの取引であつたが、廢業して機械及弟子一切を關山君に讓られたので、その關係で取引するやうになつたのである。成田君と前後して取引した製本所に**小野寺製本所**があつた。「心得おくべし」を殆んど一手に製本させて居つたのであつたが、賣れて居る眞最中に亡くなられた。成田君も小野寺君も眞面目な良い人であつたが不運な人である。

佐久間製本所**佐久間正松君**も古い方だ。大正九年頃の取引であらう。次いで齋藤製本所**齊藤半次郎君**である、たしか十一年三月からの取引と思ふ、川島洋紙店の內山君と友人であつた關係で、私とは取引を放れての交際が其前からあつたのである。尙此商戰三十年の製本も齋藤君と關山君と折半して、犧牲的に引受けられたのは感謝に堪へない。井上製本所**井上泰次君**は大正十二年と思ふ。震災で燒け出され兄の家に引越したのが緣で、その近所であつた關係で取引するやうになつたのである。山縣製本所**山縣純次君**は大正七年、**入船勝治氏**が電氣大辭書を發行し、その製本を私が引受けて、支拂つたのが取引の始めである

が、一時中絶して居つたのを、友人鹿島佐太郎君が入社したので復活し、爾來親密な取引を續けて居る。山縣君は業界稀に見る奮闘努力家であつたが、昭和四年二月に逝去されたのは惜しい事であつた。今、長男精一君が第一線に立つて活躍して居られる。板倉製本所板倉宏之助君、岡山製本所岡山保孝君の兩氏は新光社が株式會社となつたので、舊新光社の掛り合ひから取引することゝなつたのである。新榮社木下莊君は三越松宮三郎君の紹介、又村田文泉閣村田利吉氏は非凡閣加藤雄策君の紹介に依り、何れも二三年來の取引に過ぎないが工場設備の整頓せる點に於て、信頼するに足る製本所である。本位田製本所君は工學全集刊行會の前發行者の關係に依り、取引するに至れるも是又眞面目で勉強する。大成堂、山田晉七君は本書、「店員生活時代」の項にあるので茲では省略する事とする。

製函、製版に至つては寸正堂製函所住田捨吉君は、今は亡き先代からの取引で私の創業と同時であつた。この先代は實に温健でよい人であつた。令弟信太郎君及未亡人協力して、先代の遺志を繼ぎて奮闘せられ健實なる基礎を築きつゝあるは、故人も地下で定めし喜んで居らるゝ事であらう。今關寫眞製版所は誠文堂及新光社專屬であつて取引額も毎月相當額に達して居る。前經營者今關初君は是亦舊新光社の引懸りからの關係である。郷里に歸つて了つたが、昨年六月吉田達之君が後繼者となり誠實に努力せらるゝので安心して居る。本書の寫眞版は、此今關寫眞製版所で製版したものである。井澤寫眞製版所井澤善也君は未だ二三年の取引であるが、常に積極方針の下に努力せられ、仲々の勉強家である。渡部寫眞館渡邊民影君は可なりの古い取引先である。慥か商店界發行と共に取引を始め、以來誠文堂の店員同樣に働いて、十年一日の如く終始一貫眞面目なのはうれしい。

尙此等仕入先諸君が、今回の新築に際し、記念として日本エレベーター會社製エレベーター一基を祝つて下さつたことを特筆して深く感謝すると共に、將來一層の御聲援あらんことを希望し此項を終ることゝした。

親しき人々

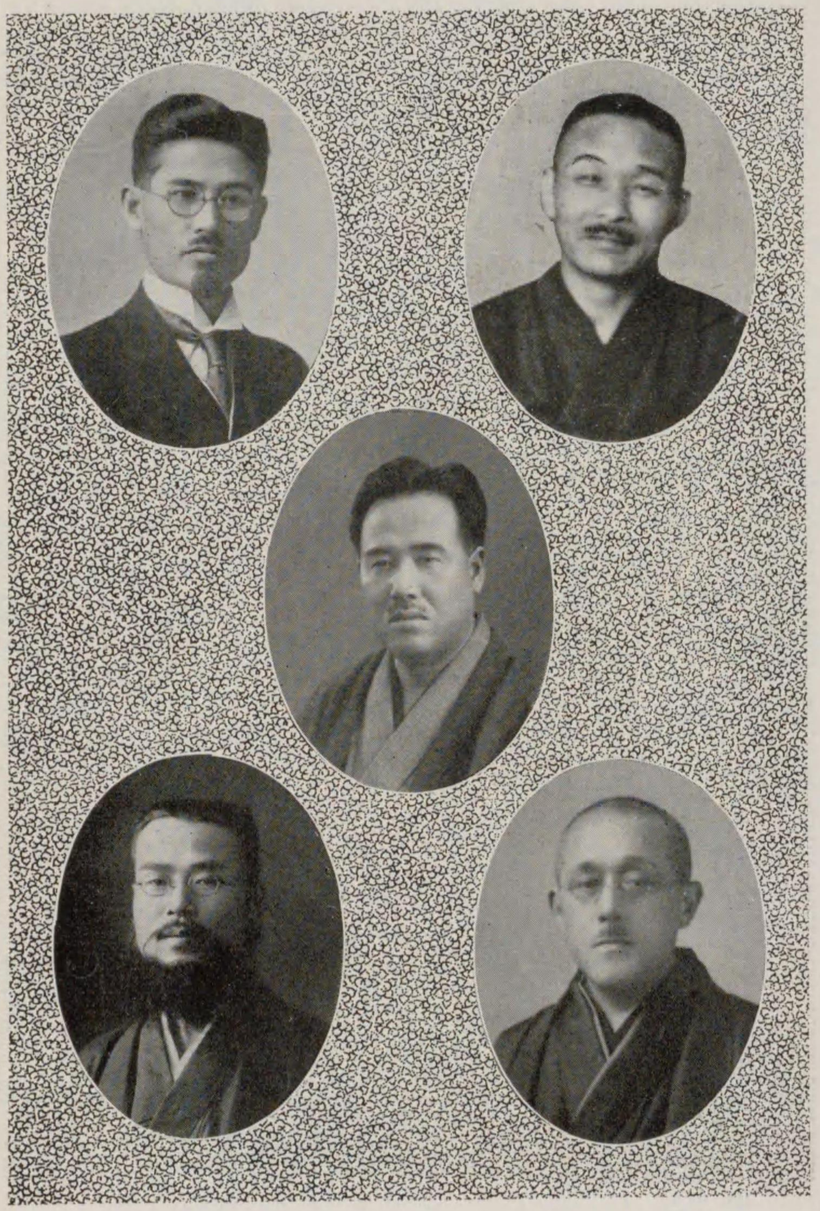
私の過去の内創業廿年を振返つて見ると、餘りにも問題が多かつたのを知る。そこへ又、茨城縣人特有の激しい氣性が手傳つて、作らんでもよい、敵を隨分作つたのである。然し、こちらからは決して裏切行爲や、陰險なことはしたことがない。何れも正々堂々とやり、一點そこに疚しい心がなかつたのと、萬一惡かつたと後で心付けば、男らしく謝罪するので、深い敵を作り、又生涯怨まれるやうな事は、絶對に無いと信じて居る。

唯かうした場合、此方では釋然として居ても、先樣がサラリとしない人のあることは遺憾である。然うした譯で、見えない敵、知らない敵があるかも知れぬが、之は仕方がない。又無理を聞かなかつたとて、例へば附合廣告をしないとか、義理で買はせやうとしたものを斷つたとか、頼まれた金を貸さなかつたとか、先樣の都合を計らぬために、「小川は生意氣だ」「怪しからん奴だ」と敵視されるのも、是亦仕方がないのである。

大每主催第五回北海道觀光團

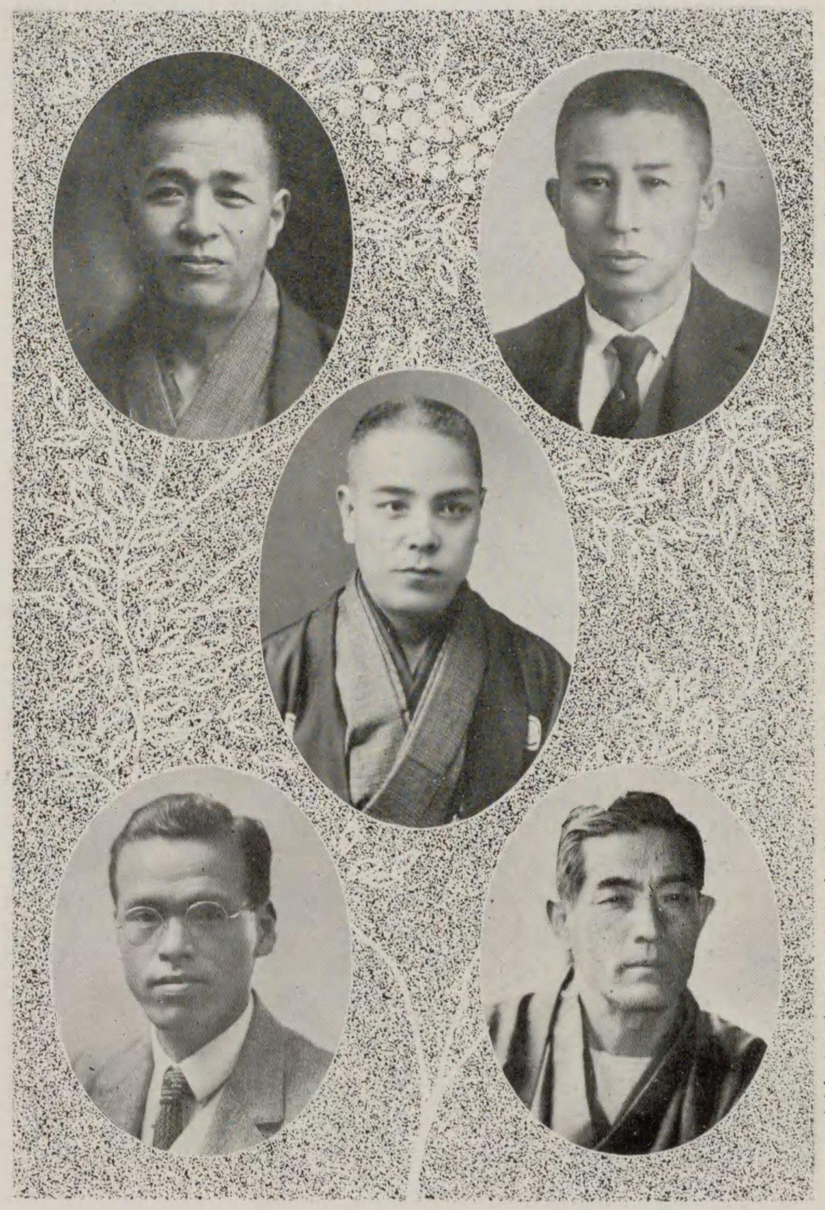
影撮念記園庭館平豐幌札於　日九月八年八正大〔會迎歡スムイタ海北〕

親しき人々と友だちの遊び



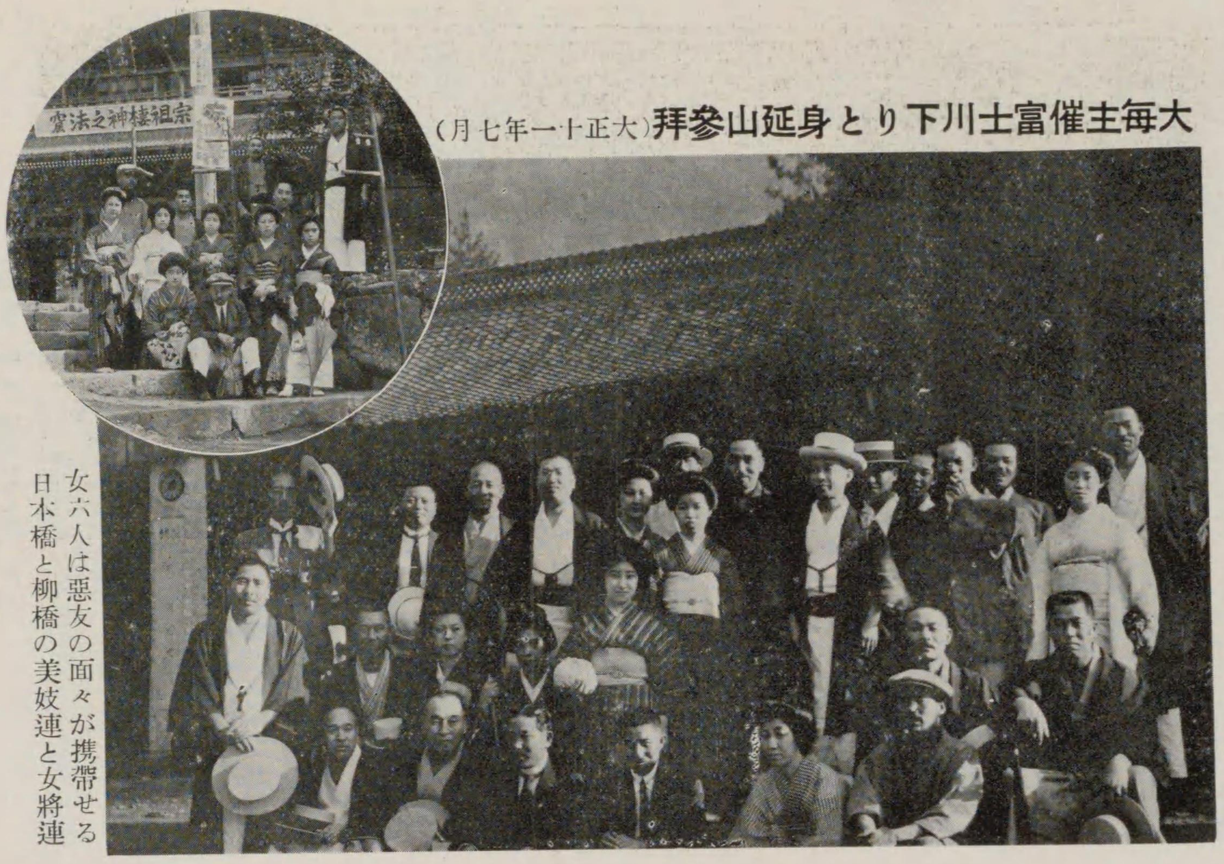
上圖右宮下軍平君、左宇野富夫君、中和田利彦君、下圖右今津隆治君、左藤田知治君

親しき人々と友だちの遊び



上圖右横田地巴君、左矢島一三君、中武井豐君、下圖右周防初次郎氏、左中川治三郎君

大毎主催富士川下りと身延山參拜（大正十一年七月）



女六人は惡友の面々が携帶せる日本橋と柳橋の美妓連と女將連

朝日新聞主催松島めぐり

大正十四年七月松島にて撮影

大阪朝日新聞主催甲子園野球見物

後列右五人目瀬木博信君、六人目大葉久吉氏御子息久治君、十二人目私の長男誠一郎（昭和六年四月寶塚にて撮影）

時事新報主催新潟旅行（大正十三年五月行形亭にて）

りくぜん陸北催主報新事時

影撮てに園公六兼澤金月八年十正大

時事新報主催知多半島めぐり

大正十五年五月

何れにしても、創業廿年の生活は、悪い性の發揮と、總てが勇敢であつただけ、大小幾多の敵を作つた事は否み難い所である、然しながらその半面にはまた、感心な男だ、愉快な男だ、と先輩友人が絶大なる支持をして呉れたことも事實である。今この卅年の謝恩史を書くにあたり、一層その感を深くするので、前項に載せなかつた親しき人々を記述し、思ひ出とすると共に謝恩の微意を表したいとおもふ。

先づ同業の先輩友人から記すことゝする。古い所から年代を追つて行くとすれば、文林堂、中川治三郎君と信義堂武井豐君である。何れも至誠堂時代からの關係であるが、得意先諸君の項に書いてあるので、詳細なることは控ゆるが、何れも商賣は熱心家で、飲めば又實に愉快な人々である。中川君の黒坊踊り、武井君の都々逸など實に業界の逸品である。

中興館矢島一三君は創業一年目からの交際である。當時矢島氏も創業早々であつたが、氏は其時分島田和三郎君と共同して幼年繪雜誌「新子供」を發行し毎月莫大の利益を擧げ、更にコナンドイルの探偵物「吳田博士」全六冊を出版して大いに當り、私もたし賣らせて貰つたのであつた。然うして處女出版の項に書いてある如く、米窪太刀雄氏の三種の著述を、

共同して出版するやうになつたのである。そんな關係で、緊張して居た其頃の私は、矢島氏の眞面目で努力家であるのに私淑して、毎日と云つてもよい位、聲咳に接して居つたのであつた。夫れが遊びに興味を持つやうになり、つい疎遠になつて了つたのは甚だ漸愧の至りである。然し此三種の共同出版は何れも儲かり、矢島氏は無論のこと當時の私は至極無事であつたから、牛屋へすら一回も行かないと云ふ眞面目さで、折半した利益は一錢も空費しなかつたのである。儲かれば遊ぶとか、又何かしら犧牲を拂はせられるものであるが、今にして思ふと、これは二十年を通じ最初の終りと云ふレコードであつた。

この矢島氏と前後して出來た親しき友は二松堂**宮下軍平君**、有教社**宇野富夫君**とである。宮下君は至誠堂時代からの知合ひ、宇野君は宇野君の出版物を私へ無條件で一手に托されたのが關係の始めてであるが、誠に書きにくい次第ながら、兩友とも實は善友でない方なのである。最もこれは自分勝手の言分で、先方でもさう思つて居られることであらう。始めの二三年は至極無難の交際であつたが、何かの機會で宮下君に誘惑せられ、私は先輩の命令唯々諾々と隨つた次第である。當時、和田、長井の兩雄未だ現れざりし頃とて（外で遊んで居たかどうかは分らぬが、表面へは現れなかつた）宮下君と私の遊蕩振りは斷然トップを切り凄じき勢であつた。其頃の宮下君は業界隨一の性力家であつて、商賣も亦大當りであつたので、震災まで前後八年と云ふものは徹底して遊んだのである。近隣の關係もあつたので「おい、良い加減に慾張れ、そろ〳〵出掛けよう」と毎晩必ず誘出しに來たものである。此宮下君とは幾多の快絶な珍談、奇談があるのであるが、茲では大正九年一月、書籍商組合評議員選擧改選に際し、五十人の評議員中先輩組長**大倉保五郎氏**副組長**林平次郎氏**を一、二番に戴き宮下君が三番、私が四番で此惡友轡を併べて當選した愉快と、又此時講談社**野間清治氏**も始めて評議員に推選せられ、日本橋「やまと」に於ける初の顏合せ會の其席上「野間さん御機嫌よろしう御座います、至誠堂に居りまして雄辯御創刊當時しばしば御目にかゝつた小川です」と御挨拶したところ「やあ菊さんでしたか」と、親しみある此出版界の巨人に接した感慨談を附記して、其他は控へることとしやう。

宇野君は私が誘惑したのであつた。遊ぶ先が宮下君により紹介された、仙月といふ家であつたので後には三人一緒になつて了つたのである。ところが此宇野君の遊びたるや、頗

る豪勢なものであつて、一夜に千金の花を手折るといふ、嘘のやうな事を實行した勇者であつたので、誘惑した私も責任上心配し始め、或日宮下君と相談して、宇野君を呼んで強意見をしたものであつたが、結果は頗る有効で、意見の効果があつたと喜んでゐたところ、豈計らんや遊び先の仙月と打合せて、我々を僞り、盛んに隱れ遊びをやつて居たなどの逸話がある。震災で燒けなかつたので、大正十四年頃まで續いて遊んでゐたが、信仰生活に入ると共にピタリと遊びを止められたのは敬服に堪へぬ。

此宇野君にも幾多の痛快事と滑稽があつた。私と二人で、何かを携帶して、盛んに旅行したものであるが、常陸大洗行きの途中、石岡驛の汽車中で秘密露現の出來ごとや、關西旅行のときの、朝顏もどき宇治の濡幕等ここには書けぬ數々がある。

宮下君と親しくして居た關係で忠誠堂高倉嘉夫君と知り、明文堂周防初次郎氏を知り又其他いろ〳〵な人を知つたのである。高倉君は品行方正、親切な誠によい人で、又酒豪でもあつた。始めは三人お互に飲める口なので、神田小川町の池國や今文あたりで、飲んだ程度で頗る無事なものであつたが、聖人高倉君も新聞社の旅行で落城したのが、抑の始まりで、爾來我々と行動を共にするに至つたのである。豪毅活達、愉快な人であつたが、今春逝去せられたのは惜しみても尙餘りあることである。

ところで宮下君の先輩、友人として紹介された人々は、遊ぶ方にかけては何れも豪のものばかりであつたが、吾が周防氏のみは、正眞正銘の石部金吉で、交友中でも珍らしき人格者であつた。私が周防氏を知つたのは宮下君の店へ行つた折屢々御目に掛つたのが緣で、又近所といふ關係でもあつたが、穩健で親切に後輩を指導せられ、誠に親しみを覺へる人だ。令息時男君、また嚴父そつくりの性格の持主であるのはうれしい。

此周防氏と好一對の人に北星堂中土義敬君がある。氏は元三省堂に在つて私の創業と相前後して獨立せられた眞面目な努力家である。氏の當時の出版物は私に賣らして呉れ、引續き親交を結んで居る。此周防氏、中土君と同一タイプの人に中文館中村時之助君がある。氏は名古屋星野書店に十數年勤續し、店主星野松次郎氏後援の下に獨立せられ、創業幾干もなくして、强固なる基礎を築かれたるは敬服に堪えない。國定教科書問題では三氏とも幹事として私を鞭韃せられた人々である。

更に又以上の三氏と兄たり難く弟たり難き、眞面目で堅實な人が養賢堂及川伍三治君である、氏は當初の商賣の項に書いてある通り、裳華房在勤當時からの仲よしであつた。氏の獨立は私より後るゝこと數年大正四年九月で、處女出版は碧瑠璃園の「赤垣源藏」であつた。私が一手に賣らせて貰つたのであるが、學術的出版物のみを發行して居つた裳華房出身として、また亦酒を飲まない氏として、此處女出版は誠に面白い對照であつた。

丁度大正五年の頃であつたらう。大阪毎日新聞が廣告吸收政策として條件つきで廣告主を招待する旅行會を始め、之が第一回が別府温泉行であつた。これは他社が嘗て試みない無類の名案であつたから、頗る好評を博し、高い廣告料になるなどゝは、神ならぬ身の知る由もなく、又變な御土產を貰つて歸るとも知らず、哀れや廣告主は只々恐悅して參加したので、新聞社としては非常な成功であつた。これが先例的模範となつて、大中小幾多の新聞、猫も杓子も眞似をし始め、前後約十年間廣告主の我々は、此新聞社の旅行攻めに逢つたのであつた。諸費用一切新聞社持ちで、云はゞ官費旅行と云ふのであつたが、然うは仲々問屋が卸さず、何れも多小の犧牲否、寧ろ多大の負擔を拂はざるを得なかつたものである。

立派な堅造君や、放蕩の方ではまだ小學生であつた人達も、この旅行に加つたが最後、忽ち中學或は一足飛びに高等學校に進級するといふこと程左樣に、遊蕩修業には誠に絕好の機會であつた。恐らく參加者悉く無傷の人はないと云つてよい位で、その點で偉大の成績を擧げたものである。ここでチョイと餘興に、珍談の一二を語らう。

いつの旅行であつたか、其當時歷史寫眞畫報を出して居て、後に府會議員となつた某氏が、二號携帶で一行に加はつたが、一行妬けること夥しく、寢に就くが否や、交替で翌朝まで其室を覗きに行き、樂しき旅行を妨げたので、大に怒られたことなぞは、惡茶目の方で、思へば罪なことであつた。

別府旅行の時、大毎の重本君が泥醉して深更に外から歸り、旅館龜の井の池へ、モオニング着用のまゝはまり込み、大勢でヤット救ひ上げたが、今度は浴室の女神拜見と出掛け仕切の硝子戸へ頭を突込んで、之を打破つた念入りな失策などは、振つて居る方だ。

新潟毎日の新潟行では、博報堂の島田君が全員參加の二次會で、秘密脫走を企て、先づ

靴を新聞紙に包んで庭先へ出して置き、便所へ行く振をして首尾よく、その待合を脱出し、俥に乘つたまでは上出來であつたが、肝心の宿屋の名前も分らず、歸らうにも今まで居た待合の名も所も分らないので、深夜新潟市中を彷徨すること三時間に及んだなどの珍談がある。

こんな珍談の種を蒔いて、歸京すると今度は、新聞社々員諸君を招じて慰勞の宴を張つたり、又其上に御叮嚀にも會遊會と稱し、讀んで字の如く、會て遊んだ卽ち旅行に參加した人々が集り、新聞社と廣告主が合同で思ひ出の會を開催するなど、景氣のよかつた故でもあつたが、思へば馬鹿〳〵しい事をしたものであつた。

此遊蕩修學旅行で親しくなつた面々は枚擧に遑ない程であるので、ここでは、この旅行と會遊會が動機で出來た八人會の人々と、異色ある人々のみを記すことゝした。

八人會とは此の遊蕩修學旅行及會遊會に於て共鳴せる人々の親睦會で、婦女界社都河龍氏、博文館横田地巴氏、巖松堂藤田知治氏、有斐閣故西田富衞氏、春陽堂和田利彦氏、忠誠堂高倉嘉夫氏、二松堂宮下軍平氏、不肖小川菊松といふメンバー、其道では何れも一騎當千の面々で、何れの會にもよく參加したものである。中には無藝人も一二ないでもなかつたが、長髯の藤田君が三國志の關羽とも云ふべき風貌に似合しからぬ美音で、常盤津よし、浪花節よし、小唄、歌澤、博多節と多岐に亙つて蘊蓄を披瀝するのには、いつもながら敬服した。

西田氏の斗酒尙辭せざる、然も熱燗に限る豪快な飲みつ振りや、念の入つた茶目つ振りとは旅行團長の貫錄充分であつた。いつぞや大阪毎日主催山陰旅行に際し、汽車中の出來ごと、敬文館故櫻村喜久太郎氏が、股を廣げて醉夢を貪り居るを見るや、マッチを取出して陰毛に火をつけたり、又時事新報主催北陸めぐりに際し、これも汽車中、高倉君の醉に乘じて痒い藥をつけて怒らしたり、高知得月樓の官民合同歡迎會の席上では、時の高知縣知事を捉らへて「おい一つ行かう」と盃を出したり、其の惡茶目は何時もハラ〳〵させるのであつた。

和田君の遊びは餘りにも業界で有名である。藤田君と共に美音の持主で又音曲百般に通曉して居られ、殊に東都流行の先驅を爲した安來節は氏の最も得意とするものであらう。

氏と私との遊蕩生活は十三年の長日月に亙り、その間八人會以外に、藤田君及成美堂の河出君の四人より成る十八日會あり、**長井庄一郎君**との三人會あり、私と二人のみの會は前後幾百を知らず、顧みて只驚嘆あるのみである。此人々の中で都河氏、横田地氏の兩氏は良友の方であつた。私の知つた範圍で此兩氏には曾て濁遊のなかつたことを特記して、此八人會銘々傳を終ることゝしよう。

工業書院**今津隆治氏**とは氏が如山堂と云つて盛に文學物を出して居た時分、卽ち私の至誠堂在店時代からの知人で、當時本石町二丁目角、上總屋呉服店前にあつた「おでんや」で屢々逢つたのが心易くなつた始りである。氏は生粹の江戸つ子で、歌俳諧、茶の湯生花歌舞音曲、折花攀柳何でも御座れの風流人である。

大正十二年六月土佐の高知へ旅行の時であつた。得月樓の庭が良いとか、座敷が氣に入つたとかで一行が歸京した後まで、今津氏と大に耽溺したことがあつた。末は美妓連から大阪まで連れて行つて頂戴といふことゝなり、ウムよしと計り大きく諾づき、引連れて來たまではいとも麗しき事であつたが、これが鳴戸海峽で、今津氏の携帶者が一晩ゲィ〳〵

吐き通したので、御客變じて臨時看護夫となると云ふ喜劇の一幕などあり、私は歸京して阿丸津病院入院の悲劇となつたなどのユーモアがある。此の今津氏とは面白い、滑稽なことが數々あつた、深川不動尊へ兩人で願掛けに行き、一週間後に變名で禁斷を破つたり、又私の震災の避難所であつた、丸の内憲兵隊うらの大銀杏の下で、震災翌年の九月一日の深夜、震災一週年思出會を開いて女連れであつた爲め、警官に誰何された珍談など、數限りなき思ひ出がある。尙最後に特筆しておきたいことは、同氏の頓才的文藝で、新聞社の旅行後の慰勞會には、毎回必ず旅行中の出來事を、滑稽味滿々たる美文に綴り、自らこれを義太夫に作曲して節面白く演ぜられたものである。隨つて、氏の義太夫は堂に入つたものであることは言ふだけ野暮であらう。

興文社專務**石川寅吉君**とは至誠堂時代からの友人である。大正八年六月頃の中國及九州新聞の合同主催の旅行で親交いよ〳〵深まり、又其時私が同伴した加藤美侖君を紹介したのが動機で、石川君は加藤君と提携したのである。石川君も加藤君が先生であつただけ、遊ぶ方も一時は仲々盛んであつたさうだ。

富山房阪本守正君、非凡閣加藤雄策君兩氏は、共に昭和二年八月大阪毎日新聞主催九州筑紫巡りの時に知つたのであるが、私は此旅行には長男、次男を同伴し眞面目な旅をしたのである。阪本君とはその時別府に於て、和田君と共に同君に招がれたのが交際の始めてであつた。私と和田君はその返禮を東京で爲し、爾來親しき間柄となつたのである。嚴父を援けて共に大富山房の經營に當り、近く建築も竣工の由、切に御健闘を祈る。加藤君とは此旅行より歸つて間もなく親交を結ぶに至つたのである。年少氣鋭、努力研究家であるのは頼もしい。此加藤君を知るに及んで大きい利益を得たことがある。氏の出版合理化は私より一日の長あり、氏に依つて百科全集の製本料引下げが實現し、又私は之を和田君に教へたのであるが、當時を追懐し茲に敬意を表することとした。

以上で旅行動機の關係は一段落として、是れより畏敬する人や取引關係の親しき人々に入ることゝしやう。

業界に於ける先輩、大倉保五郎氏、目黒甚七氏、上原才一郎氏の三氏は私の最も畏敬する人々である。大倉氏に宴席で御目に掛れば私は必ず盃を戴きに出るのである、氏は私の仕事について常に御注意下され、「加島さん（舊主のこと）を見てあげなさいよ」などゝ、慈父の如く訓戒して下さるのであつた。目黒氏は頭腦明晰の人で、常に正論を述ぶることゝ、私を理解して下さる點に於て尊敬と共に共鳴するものである、彼の大誠堂事件に際し株式募集に即刻快諾を賜りし御芳情は感謝に堪えぬ次第である。上原氏は圓滿なる人格者として親しみある點に於て、常に尊敬してゐる次第である。明治印刷問題にて御考慮を煩はせしことを感謝する。研究社小酒井五一郎氏、新潮社中根駒十郎氏は共に私の畏敬する人で、彼の國定教科書問題には大に共鳴せられ、絶大なる御支持を賜つたことを茲に厚く感謝する次第である。

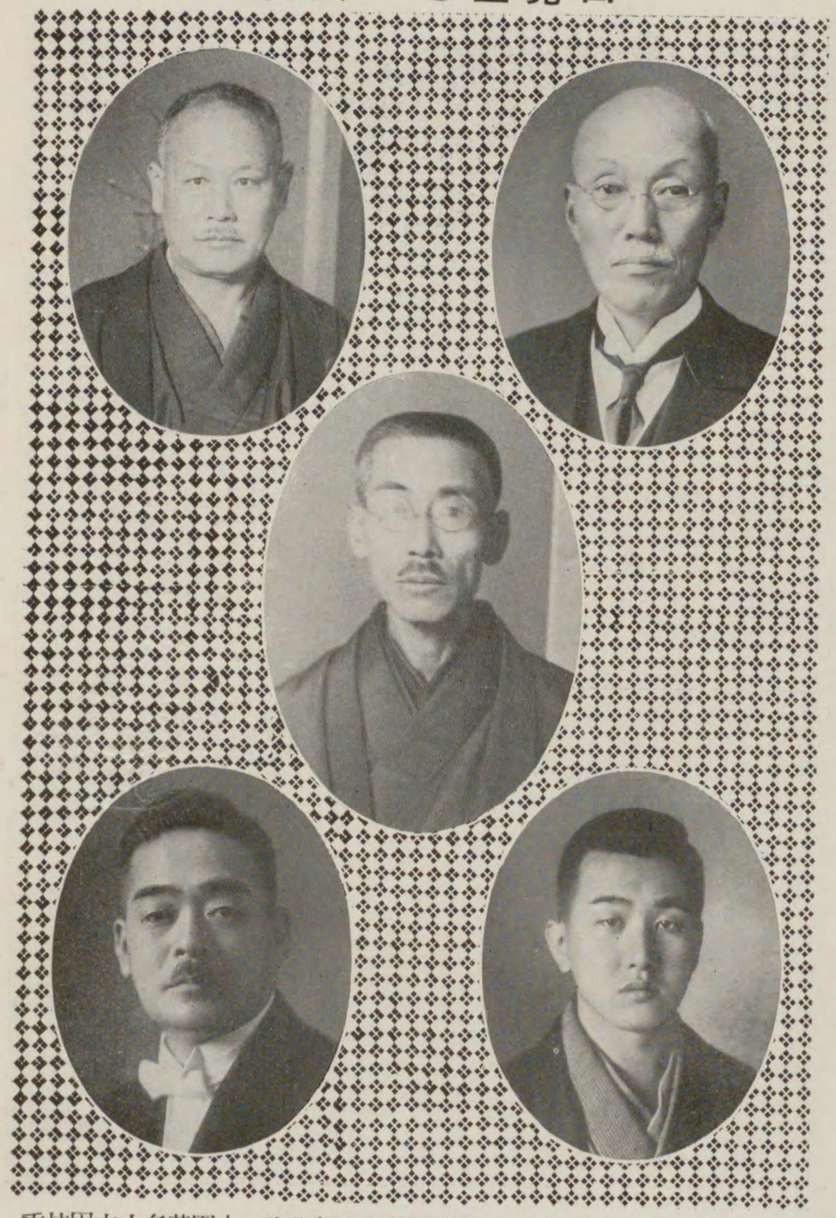
四大取次店東京堂大野孫平氏、赤阪長助氏、東海堂河合晋氏、國領友太郎氏、北隆館福田金次郎氏、福田良太郎氏、石塚隆美氏、大東館長井庄一郎氏、關田藤作氏の九氏には創業以來御世話になつて居る、親密にして理解ある取引、不肖亦大東館重役の末席を汚して居る關係で、こちらは親類のつもりで、いつも我儘を申上げて居るのは、誠に申譯ない次第である。此機會を以て深甚なる眷顧を感謝し、個人的に賜り居る交誼に對し厚く感謝す

る次第である。又河合氏には狩獵關係の御交誼を特記して敬意を表する。

此外同業で親しき人々に修文館鈴木種次郎氏、有精堂山崎清一君、文修堂岩田岩吉君、金星堂福岡益三君、大屋書房纈纈房太郎君等がある。何れも二次會へ誘つたり、誘はれたりする仲である。又東京書籍商組合書記長、文藝社主小林鶯里君とも親交がある。これは私が、組合問題をよく起すからと云ふ譯ではない、出版上の事で、古くから氏の意見を屢々叩いたものである。尙同業將棋天狗黨より成る時事新報主催の棋友會の人々、此頃生れた同業有志圍碁倶樂部の人々、圖書仲買の親睦機關たる益友會の人々、横田地巴君の斡旋に依る十七日會の人々は氏名を略して敬意を表しておくことゝする。

同業を離れた親しき人々は新聞廣告人である。是等新聞廣告人は、同業より寧ろ、酒席に於て、日々の取引に於て逢ふことが却て多いのである。隨て是等の親しき人々の美談、醜談、妙藝、珍藝、抱腹絶倒な數々の話柄を、澤山持合せて居るが、一々書いては、御迷惑の程も如何かと思ひ、茲では差控へて平素の御厚情に對し、深甚の謝意を表することゝし此項を終ることゝした。

四先生と一畏友

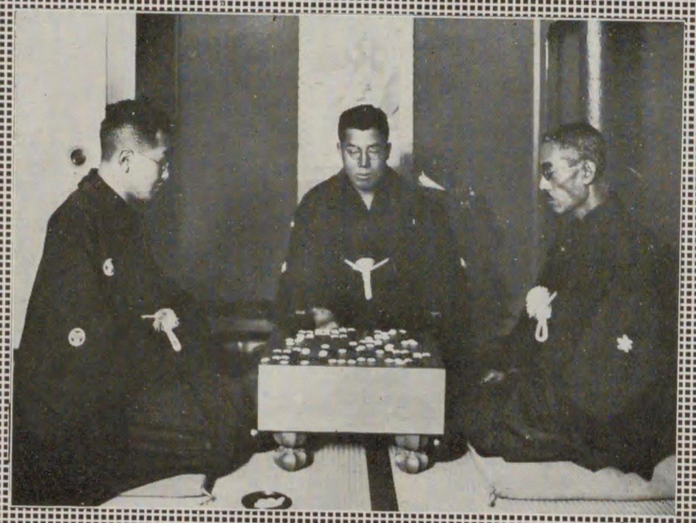


上右芳賀剛太郎先生・左將棋名人關根金次郎先生・中圍碁名人本因坊秀哉先生・下右八段木村義雄先生・左大阪三笠屋百貨店社長蜂谷經一君

局對と人名

生先郎次金根關人名棋將の會立は中・私の中局對棋將と生先坊因本人名碁圍

私と局對の段八村木と人名



君樹正桃胡は次君治修浦三端右・宴開の後局對るけ於に〔月仙〕圖下
私は端左・生先村木は左・生先根關は中・生先坊因本は右面正

臨遊島松と會大碁圍北東

上圖は河北新聞主催、本因坊先生、誠文堂後援の仙臺市青葉に於ける東北圍碁大會、高橋より二人目、北新聞社長一力次郎君、私、河北新聞の人は田中慶次君、三段初合君と對局の高橋三段の資格重有君、金港堂常務取締役前田慶次君

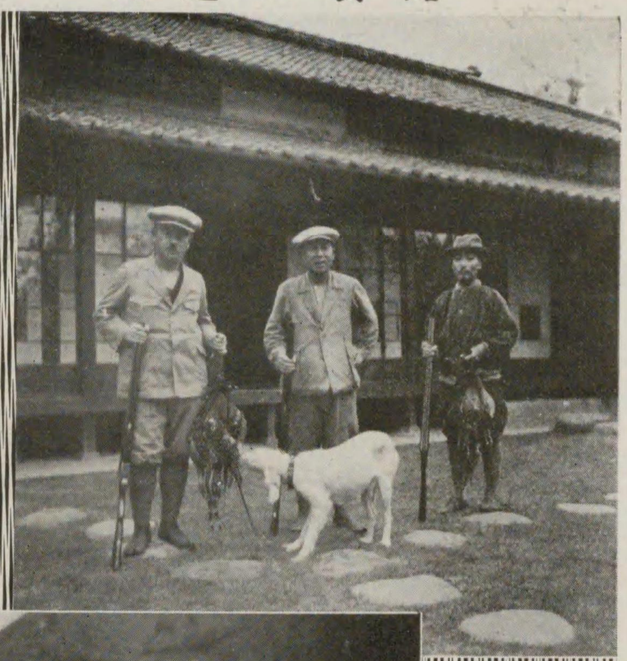
私・生先坊因本・段三橋高列前・長町町島松・君澤騰長局支京東北河・氏司宮大主ルテホ島松りよ右列後

米國職業野球團マネーヂヤーと私

上圖はマネーヂヤーハーンターと私・下圖は誠文堂野球チーム

後列右より藤瀬・山野邊・井村・中野・次男良雄　前列三男秀雄・口樋・長男誠一郎・吉川

此頃の道樂

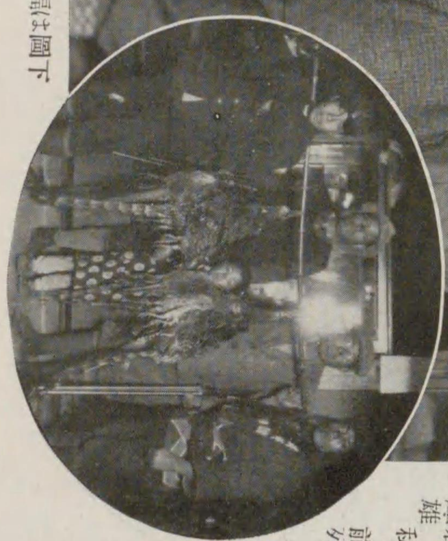


昭和六年十一月廿二日栃木縣野上山中にて狩獵後佐野町在富田の島田和三郎氏邸に引揚げ同庭園にて撮影、右より島田君、小川、仲摩君と私の愛犬メリー

昭和六年十一月福島縣勿來在、荷路夫山中にて狩獵中の私

獵大！獵大！

上圖は昭和六年十一月群馬縣神流山中にて狩獵の獲物を擔ぐ大熊博君、仲摩君、星野輝雄君、私、前列に獲物を擔ぐ右より横堂君、石井富好君、右は同君と凱旋、店員の獲物を擔ぐ



私と若賀芳と雄良男夫りよ、左で頭店君一武賀芳町來勿縣島福は圖下

雜誌の副業

新築の本館眞向ひにある誠文堂代理部

府下野方町沼袋驛前の「家禽と家畜」養兎場

經營餘談

商人は信用が第一であることは言を俟たない。此大切なる信用を忘れ、約束を平氣で破り、支拂ひを不精確にする人のあるのは、どうした譯であらう。誠文堂は創業以來、理由なく取引勘定の支拂を遲らした事は曾て一回もない。また約束した以上如何なる犧牲も、損失も、信用の重大を顧みて履行して來たのである。かの震災勘定の如きも取る方はとらずとも同年中に皆決濟した。

×

信を失ひ、友を失ふは、人の利用の程度を越したるが故の場合が多い。これは友の惡用を知り、善用を知らぬが爲とおもふ。自分が今日まで辿つて來た道を顧ると、白羊社、至誠堂、新光社、明治印刷、近代社、國定教科書事件、テキスト事件等、喜んで先輩や友人に利用されたものではあるが、何れも皆大小幾多の犧牲を拂ひ、その又先輩友人をこちら

も善用はしても決して惡用はしなかつた事に滿足する。以上の各種の事件につき問題が問題だけに敵も隨分出來たらうけれども、夫れは始めからあつた一つの爭ひの渦中に飛び込んだのであるから止むを得まい。私は鬪爭心に强い男で、競爭者があればあるほど勇躍する。それは自分の個性であつて、仕事をするのが面白いからである。

×

しかし、考へてみると、知らず識らずの中に、あれや、これやと仕事の種類も殖えて、誠文堂と新光社の事業だけでも、とうてい自分の力では監督しきれない位のところへ、明治印刷、代理部、養兎部その他何やかやと關係が多くなつてくるのは、煩に耐えない事である。一人一業主義といふ言葉を聞くが、自分の投資する會社の數の多いのは良いとしても、自から仕事を見るのは、一業だけに限る。その一業だけですら、部門が多くなり、仕事の量が殖えると、手が八本あつても足りるものでない。若い中は、誰にも負けない位よく働いたと信ずるが、その精力を以つてしても、今日の誠文堂と新光社の仕事を思ふがまに、隅から隅まで、見盡くすことは中々困難である。

×

世間では、使用人の多いのを自慢にする人があるが、愚かなことである。しかし、仕事は自分中心で、グンと能率を擧げるのが本當であるけれども、仕事の部門が殖えると、體が三つも四つも必要になる。そこで、勢ひ信頼の出來る店員を中心に、君はこれ、貴下はこれといふ風に、凡その責任を荷つてもらふより外はない。その又下に、五人、十人の人が働くことになつてゐる。見てゐるとヂレッタイことが多いし、毎月の經費を見ると、人件費のみでも馬鹿にならぬ。昔、自分一人で働いた頃の割合からすれば、頭數の割合には儲からず、冗費冗員が目に見えるのである。

×

今や、現在店員數は誠文堂新光社で總勢七十餘人、內通勤者五十人、之か收入に依り生活する家族は實に二百人に及ばう。また自分の關係事業の仕事に依り之によつて生活するもの數千人を下らないであらう。之を考へ、彼れを思はゞ自分の責任の大にして、益々重きを感ぜざるを得ない。

×

自分の店員に對する態度は、舊來の所謂温情主義に、近代企業觀念に基く、勞資融合主義とも申すべきものであつて、自分では寛嚴よろしきを得て居るつもりでゐる。しかし、昔風に、店員の待遇が、唯店主の胸の裡一つで良くも惡くも決まるやうなことでは、折角の温情も、店員の心には感じられないものなので、矢張り、店員に安心して働けるやう、又、將來に對する希望を持つことの出來るやう、誠文堂新光社では昭和二年十一月店則を制定して、各種の制度を樹て、店員の身分、階級を明かにし、更らに、昇給、賞與の度合ひをも明示し、利益分配の制度の實行を期したのであつた。

以來、店の組織は、本屋仲間としては、先づ出來てゐる方と思ふが、通勤の店員、ことに、編輯局の人々に出勤時間を嚴守させることなどには、隨分と人知れぬ苦勞をして來たものであつた。

×

店の組織を樹てたことにより、資產狀態や損益の勘定が明確に帳簿の上に出るやうになつたので、自分のやつて來た仕事がハツキリ判かるのだが、經費と稅金ばかりが嵩んで、帳面づらの利益は擧つても、現金で殘ると云ふやうなことは、割合に僅少なのに、いつもウンザリしてゐる次第である。

×

商賣繁昌は、格安の仕入と、經費の節約と、夫れから大量販賣とに基づくものであるが出版業の如きにあつては、仕入の巧拙が、利益を擧げるか否かの大勢を決する場合が多いので、どんなに忙しい時にあつても、始めての用紙、印刷、製本等の生產原價の決定だけは必ず自分でやることにしてゐる。

仕入係と雖も、誠文堂新光社にあつては、常に單なる進行係に過ぎず、決して、其店員の意志によつて註文決定は許されないことになつてゐる。利は元にありと云ふ通り、この爲には人一倍苦勞して來た。

×

油斷してならぬものは、獨り仕入關係のみではない。編輯方面に於いても、會計事務に

關しても、販賣關係にあつても、開業以來廿年の間には、多少は不正店員を出したこともある。これは店の制度に缺陷があつたからの事であつて、必ずしも惡いことをする若い者の罪ばかりとは申されない。かゝる際を與へた店主としての自分も亦責任の一端を負ふべきであると思ひ、事件がある度に、あゝでもない、こうでもないと、會計記帳係と現金出納とは別個にしてみたり、出庫入庫の傳票の取扱ひを嚴にしたり、或ひは雜誌原稿料の支拂については、調査諮問の方法を講じたり、日々の通信も勉めて目を通す等、何やかやと、不正防止といふ點だけでも絶へず、心を配つて居るのである。金儲けは仲々樂なものぢやない。

×

店員諸君には、心地惡いことであらうけれども、人數が多くなると、今も書いたやうに監督も充分出來ないので、一頃は店員中の一人二人に、所謂隱し目付といふやうなものを內命したことさへあつたが、その隱し目付役の男が、錄なことをしなかつたり、全くお笑ひ草にもならぬ話もあつた。しかし、今日では、夫々組織も出來、信賴出來る古參の店員、や、昔からの安心の出來る知人達が、店で働いてるやうになつたので、各部門の責任者を信じ、一切を其人達に委かせてゐる。が、全く自分が何も知らぬといふのでは困るので、各部門から各種の統計、各種の日報を提出させて、之によつて監督指揮を行ふことにしてゐる。

×

店內の合理化についで、取引先きにも、合理的なお取引きが願ひたいといふつもりで、數年前から、取引先から係員へ贈られる、盆暮の手當一切を廢められたいといふ通知を出してゐることは、別項「吾が仕入先」の項にも書いた通りだが、この、中元、歲暮廢止は誠文堂は一昨年から、新光社は昨年から、夫々著者及び雜誌執筆者に及び、一切、こちらからも、これを行はぬといふことにした。其代り、といふ譯ではないが、年末には、毎年多少の社會事業基金を寄附しつゝあるのである。

×

此の出版といふ商賣で、著者の關係ほど六ケ敷いものは無い。少し成績がよければ、兎角無理を云はれるし、前金で印稅その他を拂はぬのもいかぬし、拂ひすぎても工合が惡い。それが、仕事の進行の上に、直接間接關係があるのだから、その苦勞も並大抵でない。

×

金といへば、私ほど金を無駄に使つた男も業界では少いであらう。飲むで遊んだ其上に廣告には金を惜まず、湯水のやうに使ふので、何時も手許には現金は少い。これだけの仕事をして、これつきりにしかならないのかと思ふことが屢々である。しかし、是迄どんな大きな仕事をするにしても、自分の實力以上に銀行を利用したことは無い。「商店界」を讀むで見ると、失敗する商人の十中五六は資金の無理からだと書いてある。盛んな廣告をして、手取利益はほんの薄い商賣であるから、多くの金利を拂つたのでは、引き合ふ譯はないのである。

×

考へてみれば、私も隨分他人から持ち込まれた紙型を買つたものだ。創業當初、有樂社から「日本見物」「世界見物」「英文不如歸」「英文金色夜叉」の紙型を買つて儲けたので、其味が未だに忘れられずに居るせいだらう、今でも持ち込まれゝば色氣を出すが、百發百中とは參らない、紙型で儲かつた近頃の大物は、哲學講座に次で中山君が持込んだ日本文學大系、今津君の橋渡しである綜合工學全集と言ふ順序か。損したものは大森書房から買込んだ指將棋全集であつた。

×

中山泰昌君が、春秋社として出版してゐた**三浦修吾氏**著「クオレー愛の學校」(定價三圓)の版權を讓受けた時の話である。發行後十數年間も、賣つて〳〵賣り捲くつた其糟を、二千圓で買つたのであつた。相場としては五百圓以上のものでは絶體にない。二千圓とは賣る人も、買ふ人も偉いとは、當時之を聞いた人の噂であつた。しかし、實をいふと之には小川式の安全第一の方法があつた。それは發行毎に印税一割を拂ひ、其支拂金額が二千圓になつたら版權は完全に、小川のものになるといふのであつた。此所に商賣の妙味がある。

實は、近代社から買つて私が持つてゐた哲學講座を昨年、此の手で共立社**南條初五郎君**に讓らうといふ話が成立した。總額五千圓と云ふことであつたが、後で同氏が小便をしてしまつたため、止むなく自分の手で、その豫約募集をした處、成績頗る良好、これで數萬の利益を擧げたなぞは、甚だ皮肉である。

×

誠文堂新光社で出版したものは一千種を數ふるが、其内一萬部以上賣つたものが、約四百點あり、五萬部以上賣れたものが、約三十點といふ見當だ。其うち一番賣れたものは**芳賀剛太郎先生**の「芳賀自習漢和辭典」の約五十萬が筆頭で、加藤君の「心得おくべし」の初めの方數冊が各十萬以上、十萬そこ〳〵のものは「性典」、「將棋大觀」、「圍碁大觀」といふ順序である。

×

豫約發行で儲かつたものは、何と云つても「大日本百科全集」である。安心してゆつたり儲かつたものは、時事新報廣告部長**三浦修治君**の斡旋により生れた**本因坊秀哉先生**の「名人圍碁全集」であつた。流石は天下の名人秀哉先生多年の蘊蓄を傾けたゞけあつて、豫約出版に有り勝な解約などは殆どなかつた。儲けて吐き出した豫約出版は**櫻井忠溫先生**の「忠温全集」である。調子に乗つて締切つてから謝恩廣告をやつた前景氣はよかつたが、解約が案外に多かつたので、完了分賣をやつた處その賣上げは廣告料に足りなかつた

が、折角儲かるものを吐き出したのだから、之は私の近頃の失敗だ。

×

今日、十錢均一店が、日本到るところに出來て、大層繁昌してゐるやうであるが、十錢均一については、誠文堂の十錢文庫などの大宣傳が、其機運を作るに與つて力があつたこととおもふ。これは一氣に百點作つたが、發禁本が二冊、それが孰れも一般から懸賞で募集した原稿であつたのは、選者を惹きつけたものがエロ本であつたといふ事に落ちる。大いに賣り捲つたし、業界に多少の波瀾も起したが、販賣店と共に、發行所もあまり儲かる仕事ではなく、品痛みのストックが澤山出來た爲、之を特賣の景品に使つたり何かしたけれど、何としても處分しきれず、先づ儲からぬ口であつた。

×

私かに思ふ。斯ういふ仕事卽ち僅々十錢の本を大廣告して、賣り捌くといふやうな事は、少し口幅つたき言分ではあるが、全く誠文堂でなくては出來ない藝當であらうと信ずる。誠文堂が順調に棹させばこそ、まゝよ、損したつて高が知れてゐると、こんな大それた眞似

もしたのである。眞に、儲からぬ仕事と失敗の仕事とは順調の時に限つてあるものである。

×

順調の時には、兎角失敗が多いと共に、つまらぬ冗費も多いのであつた。出版界では恒例の誠文堂の花見、潮干狩の如きも、一日に數千圓の金を散じた馬鹿さわぎであつた。思へば愚にもつかぬ催であつたのが、今にして反省せられる。

×

斯くいふ誠文堂の**おやぢ**小川菊松も、他の出版社の社長さん並に扱はれて「先生」「先生」とやられて一端の學者扱ひをされて面喰つた事もチョイ〳〵あつたが、近頃は多少馴れて來た。始めの内は、誰のことやらその「先生」が判らず、大間誤つきに間誤ついたものだ。

×

間誤つきと云へば、出來もしない演說や講演を賴まれる事も、私に取つて全く間誤つきである。何時でもこれは斷るのが例だが、演說や講演がドン〳〵出來る位なら、今頃は遊んだ金で代議士になつてゐる。まあそれは冗談として、學問をしなかつたのは終生の恨事だ。今度の本を傳へ聞いた友人達が、出版紀念會をやるらしいが、演說をさせられるなら出席するのは考へものだ。全く演說といふやつは、私には大々的の苦手である。

×

「先生」になつたつもりで、今度、この本を書いてみたが、如何にも六ヶしい。約二ヶ月といふもの、好きな鐵砲打ちどころか店務も抛棄し、夜の目も眠らずに、徹宵、下手な文字を聯らねるのは仲々樂な仕事ではなかつた。それに出來た原稿を編輯の者に見て貰ふと、之が眞赤に訂正される。訂正した跡を見ると、文章といふものは、成程かういふ風にするものかといふことが判つて來て、一寸興味も出る。と共に、一ケ月前に自分で書いたものゝ缺點が目に立つて、心苦しくもなるのであつた。

これまで、著者や執筆者の原稿料を無鐵砲に値切り倒したが、どうも、こんなに骨の折れることだと知つたら、値切る筈ではなかつたと思ふほどである。

×

無鐵砲といへば、近頃の私の趣味道樂は、鐵砲である。鐵砲は酒や女などの道樂と違つ

て、健康上もよろしいし、世間態もよい。第一、一週に一回か二回にもせよ山野を渉り歩くので、浩然の氣を養ふによい。獲物を見つけて、ズドンとぶつ放つ豪快さ、狙ひ誤たずして、空飛ぶ奴がキリ〳〵舞ひして落ちる、犬が勢ひ込んで駈け付ける、うれしさうに、落ちた獲物を啣へてくる——全く、道樂としては申分ないものとおもつてゐる。たゞこの獵は季節以外には出來ないので困るが、洋行に出した店員が、ゴルフ道具を土産に持つて來てゐるので、獵季以外にはゴルフでもしやうとおもつてゐる。

×

ゴルフについては自分の店から「最新ゴルフ術」の出版もあるが、讀んでも見ぬので、何の知識もないが、これは一つ、大阪三笠屋百貨店の社長蜂谷經一君に手ほどきをして貰ふつもりでゐる。

蜂谷君とは玆四五年親交があつて、こちらが下阪すれば必ず寄り、氏が上京すればキツト訪ねてくれる間柄で、氏一流のお上品な遊びのお相手もするが、小川式の遊びに、氏にお相手願ふこともある。ゴルフが自慢で、商用にかこつけて、わざ〳〵交詢社あたりの連中と、ゴルフ仕合に上京される程だから相當な腕であらうと思ふ。

氏の長男の經夫君は例のチャツブリンへ陣羽織を持參して「可愛い子には旅をさせ」の單行本を誠文堂から出してゐる。

×

趣味と云へば圍碁と將棋も大好きだ。將棋は八段木村義雄先生直傳だが、評判ほどに强くはない。けれども初段の免狀を持つてゐる友達に、角を落して指せる處から見れば、差詰め三段の値打はある筈だが、木村先生は八級だと云ふ。して見ると友達の初段は皆怪しいもんだ。圍碁はてんで問題にならぬと遠慮してゐたが、日本橋「やまと」で宴會を待つ間を利用し、始めて業界でも一寸打てるといふ評判の巖松堂の藤田君と互先でやつたら、何のことはない勝つて終つた。最も本因坊秀哉先生直傳と嘘をついたので相手が固くなつたのかも知れぬ。

×

圍碁全集と將棋全集の發行で、斯界の兩名人には特別の御愛顧を戴いて居る。一期の思

ひ出に、兩名人に圍碁と將棋の眞劍勝負をやる氣になり、本因坊名人には圍碁ならぬ將棋の方で挑戰し、關根名人には圍碁で立ち向ふつもりで、先づ本因坊名人と將棋で鬪つた。この立會人は將棋の名人**關根金次郎先生**である。この時の決戰三時間、中盤まで天下の名人をキリ〳〵舞さしたが、惜しい所を逃がして了つて持將棋に終つた。嘘だと思つたらゲームの昭和六年一月號を見て載きたい。關根先生との碁の決戰は、そのときは時間の都合で止めにしたが、何れ機會があつたら晴れの勝負をしたいと思つて居る。

×

何やかと、こゝまで書いて來た時に、フト氣が付くと、雜誌の代理部の事に話は一行も觸れてゐない。代理部は雜誌の副業としか考へないので、兎角、虐待され勝ちであるが、仕事として、これほど、安全、有利、確實なものはあるまい。廣告は全部、雜誌の生產費中に含めてしまつても良いし、雜誌を信用してゐる讀者だけが見る廣告なのだから、觀面に効果が擧がる。現金で註文が來る、品は夫れから仕入れて、支拂は月末と云ふのだから、是れでは儲からざるを得ない。

×

とは云へ、私は出版屋であつて、一般の商賣には熱が無い。時折幹部店員から、儲かる仕事だからこの代理部を擴張しやうといふことを提案されるけれども、金儲けに汲々とせねばならない狀態でもないので、今のところ、小店員達に出來るだけの仕事として「子供の科學」「科學畫報」の代理部だけやつてゐる。いづれ他の雜誌の分もせねばなるまいが計劃だけあつて、仲々實現しないでゐる。

×

尙「商店界」代理部といふのがあるけれども、これは、私の實兄**小川萬太郎**が、個人で經營してゐるものであつて、誠文堂新光社とは別個のものである。此の兄には、右の代理部の外に商店界の廣告一切を取扱はしてゐる。商店界掲載の廣告に對して一種の權利を有たしてゐる譯である。

×

執筆以來、滿二ケ月、二月廿一日の日曜から筆を起して、今日は四月の二十一日である。

昨日、序文も書き了つたが、文章は下手でも、あれで、稿を改める事數回、詞藻に乏しき身の悲しさを嘆じつゝも、自分相當の苦心を盡したものである。同時に、先輩友人から贈られた寫眞の整理も終つたので、今や、六十日ぶりでホッとした所である。

×

明日から又、店で仕事に沒頭することが出來やう。

空鑛脈の一つ

一條仁氏

月刊家禽と家畜とアンゴラ兎、下圖は一條倉本兩君洋行當時の東京驛の受付け

月刊ゲームと本郷猛君

下圖左から二人目女と子供の中が本郷君

二つの空鑛脈

事業といふものは、恰も鑛脈を掘るやうなものではないかと考へる。少くとも私の過去を顧みるとそんな風に思へるのである。

今、誠文堂と姉妹關係にある新光社は、私と仲摩君との關係に始まるが、この仲摩君とは、私が至誠堂の店員の頃から知合のことであり、この仲摩君を通じて、苫米地君を知り苫米地君によつて「無線と實驗」が創刊され、又「是丈は心得置くべし」の加藤美侖君によつて原田三夫君を知り、これが「科學畫報」となり、「子供の科學」の發刊となり、更らに原田君を通じて石井勇義君と知合ひ、同君を主幹とする「實際園藝」を經營することになつたのであつた。其間、加藤美侖君と關係を有する一氏義良君などあり、この一氏君によつて、大震災當時の「大震大火の東京」が出、更らに新光社と關係することゝなり「世界地理風俗大系」「日本地理風俗大系」が生れたのであつた。此の外、至誠堂時代に北隆館の

幹部店員だつた岡崎廉三君を知つてゐた結果として、後日清水正巳君を知り「商店界」「廣告界」を發行することになつたのであつた。斯うしてみると、誠文堂の仕事といふものは一つの連鎖であつて、良い鑛脈は掘つても掘つても盡きるところが無いかの如き觀をさへ呈するのである。

然るに、一と度び、運の惡い鑛脈に手を出したら最後、どこまで行つても思ふやうな掘出しものに出會はすことがなく、徒らに巨額の費用が流出するのみに終ることが多いのである。

つらつら考へてみるに、事業の頭初に於いては、商賣の基礎がまだ確りしてゐない爲にうつかりした仕事は出來ないと、愼重な態度を執るところから、事業そのものに少しのムラがないが、相當基礎が出來ると「何ァに、これしきのことで、損をしたとて高は知れてゐる」とつい思ふものであるから、そこにムラが出來る。うまく行く行かぬは、やつて見た上だ、失敗したとて僅かなものだから、といふ氣持が、萬事を支配し、つい、浮か〳〵と、出もしない鑛脈を、モウ少し〳〵と掘つて行くやうになる。そして面目からも止められない事もあり、缺損も何とかして取返さうなどとあせるものである。これは事業家としての最も要心すべきことであらふけれども、外に儲かつてゐる仕事があるときこそ、此の油斷があるのである。

私にも、この空鑛脈を掘らされた經驗がある。勿論、この鑛脈の話を持ち込んで來る連中は、何れも如何にも本當らしく、儲かりもせぬものを儲かるかのやうに吹聽して來るのであるし、多くは、あまりに話がうますぎるやうに出來てゐるものである。そこで、多少は眉唾ものとは承知し乍ら、ヒョットして甘く行くかも知れぬと思ふ氣もあつて、話半分としてもこれだけは儲からふと云ふつもりで、では、やつて見やうといふことになるのである。が、實際は話は半分に聞いて居つたつもりが、始めから樣子が變であつたり、小當りに當つてみると、元の話がそも〳〵あやしげなものであつたりして、何となく心細いが、何しろ乘りかゝつてしまつた船であるところから、誠文堂の面目にかけて何とかならふといふので押し切つて行くことになる。

私が、かういふ話に乘つて、どこまで行つても缺損續きの仕事にブツかるやうになつた

ものが、此創業二十年間に大小澤山あつた。其うち最も新らしい最も大損害をした二つの空鑛脈の事を紹介しよう。夫れは**本郷猛雄君**と**一條仁君**とを知るやうになつてからのことである。この二人は世に謂ふ貧乏神を背負つて誠文堂へ轉がり込んで來たもの丶樣であるが、可哀さうなことには、本郷君の如きは死神まで背負つて來たかと見え、入店一年も經たぬうちに腸チブスで夭逝したのは氣の毒であつた。

本郷君といふのは、まだ二十五才の青年で、元、博文館の編輯部に居て「朝日」の仕事をしてゐたさうであるが、「朝日」を止めたか、止めさせられたかで、其後自分で「ゲーム」といふ安雜誌をやつてゐたのである。筆名を春台郎と云つて、文筆生活者の仲間には可愛がられてゐた、才氣喚發稀に見るところのガラス細工のやうな男であつた。この本郷君が私のところへやつて來て其の「ゲーム」の經營を引き受けてくれないかといふのである。これが昭和五年の五月のことで、當時誠文堂は「將棋大觀」や「圍碁大觀」で大いに當つてゐたし「名人圍碁全集」の豫約出版では豫定の二倍も成績は上つてゐたし、「將棋全集」の豫約計劃もあつたところなので、「ゲーム」は正に誠文堂向きのものと一途に乘氣になつて自分獨りの考へで、この雜誌をやつてみる積りになつて了つた者である。考へて見ると輕卒であつた。店の幹部に一應の相談をしてみれば良かつた者だが、先方からも「將棋全集」の提案があつたりして、若成績が惡かつたら「圍碁全集」と「將棋全集」の月報替りにしてもよいなどと誰にも謀らず、本郷君と其の仲間の**吉田正治君**に快諾してしまつた。其結果はどうであつたかといへば、七月から誠文堂の發行になつた「ゲーム」は損に損を重ねて、十月號に「オールスポーツ號」といふのを出して一回きり儲かつた丈けで、とうとう、翌年の三月で廢刊になつた。それまでに、當の本郷君は氣の毒にも、其翌年の春にポックリ死んでしまふ、本郷君と一緒に店へ來た三人ばかりの若い人達の中、廣告係の吉田君や、關係者であつた寫眞屋の**加藤重雄君**は變な事が出來たので、行衛を晦ますし、本郷君の提案で始めた「野球叢書」は執筆關係でゴテ〳〵したり、出版が延々になつた上、見込の半分强しか賣れずに、損失多大と來る、「將棋全集」は之に輪をかけた大缺損、更らに又、氏の紹介で文藝春秋社の**近藤經一氏**、**鈴木氏**、**亨氏**等を通じて持ち込まれた「櫻井忠溫全集」も始めよく末惡しの三世相と來て、明かに失敗であつた。これが因緣で**櫻井忠溫氏**

と知り、引き續いて氏の「ガスマスク」の單行本の出版をもやつたが、これ亦大失敗であつた。こんな風に、目から鼻へ拔けるやうな才人だつた故人には相濟まぬが、彼の脈は掘つても掘つても駄目だつたのも不思議といへば不思議であつた。

この本郷君と好一對の誠文堂にとつて貧乏神であつたものは、一條仁君であつた。この人は農學士、法學士といふ肩書きと、柔道初段、劍道三段の持主で、鷄や兎には充分自信のある話であつた。昭和五年の頃、夫れまで自分が經營して來た「家禽」と題する雜誌を持つてやつて來て、養鷄養兎などの雜誌を發行せぬかといふ交渉をするのであつた。農學士、法學士と肩書が二つならんでゐると、なんとなく賴もしさうであるし、口ぶりから察するに一角の斯道の大家である。誠文堂には「實際園藝」があるし、世間には「家禽タイムス」とか「鷄の研究」などといふのがあつて、相當良さそうに見えるしするので、やつても良いやうな氣がするのだつた。其後一條君が、アンゴラ兎の流行について大いに語り、カナダあたりで一羽十圓二十圓で買つて來ると、日本でそれが百圓にも二百圓にもなるといふ話をするし、農林省調査と云ふ出所の確かりしたものらしい數字を示したりするので、大分この仕事が有望に見えた。全國的に新聞廣告を注意してみると、成程、アンゴラ兎、レッキス兎といふ廣告が出てゐる。東京で早くもこれに手を出してゐるといふ者もある。知人を賴つて其樣子を聞くに、どうやら、往時のセキセイインコの流行のやうに盛んになるらしい。この分なら雜誌を出して兎熱を煽つたら一と仕事出來るかとも思ひ、遂ひに昭和五年十月から一條君を主幹として「家禽と家畜」といふ雜誌を出すことにしたのであつた。この時も、決定後であつたが、店の幹部連に話をしたら一人も贊成者が無かつたのを記憶してゐる。

かうして出來た雜誌は、一條君にはお氣の氣だが創刊早々成績が惡く、編輯も內容もいつも感心が出來なかつたが、一條君の云ふまゝに、世の中を注意して見ると、アンゴラ兎、レッキス兎などは百圓二百圓といふ高價で賣買されてゐるし、外國からも盛んに輸入されてゐる。雜誌の代理部のやうな形式で、外國から兎を輸入したら、ウンと儲かるとの提案もなるほどと思つたので、カナダの輸出商へ電報で問ひ合はせたり、兎の註文をしたりしたがどうも値段がまちゝであつたり、當にならぬこと夥しいものであつた。

其内全國養兎研究會といふものを作り、會員を募り、その會員の豫約註文を取つて、一條君がカナダへ兎の買ひ出しに行くといふ案まで出來た。この一條君の案は名案であつた。カナダ行きの旅費などは千五六百圓もあればよい、人一人つけてやつても三千圓だ。一萬圓の註文があれば、半分儲かつて五千圓、二千圓の宣傳費を使つても引き合ふし、自家用の兎も買つて來れば又儲けは大きいとも考へたので、乘りかゝつた船でもあるし、之を雜誌に發表し、流行地の新聞には廣告をやり、一條君に、**馬俊雄君**といふ技師と、店の倉本君を付き添はせて、名古屋、神戸などで大講演會を開かせたりし、兎を海外から買ふ同志を募つたところ、どうやら豫想通りには行かなかつたが、金額にして約八千圓分の豫約註文があつた。で、愈々出發といふ段になると、雜誌や印刷物に本場の歐洲で購入云々と書いてあるのを發見した。カナダは本場でない、廣告に本場と書いてあるから、フランスとイギリスで買つて來ないと嘘をついた事になると云ふので、發表印刷物の關係で、信用上カナダを止めて、此の一條君を遙々歐洲へ派遣することになつた。けれども、流石に、どうも心許ないので、商店界をやつてゐる前記**倉本長治君**をどうせ一度はアメリカへでも遊びに

やらねばならぬと思つてゐたところだつたので、之に付き添はせて、監督とし、とうとう昭和六年六月に此の二人を歐洲へ旅立たせたものであつた。

さうして、一條君は註文品と自家用とを取り交ぜ何百羽かの高級兎を持つて、イギリスから華々しく歸朝する、倉本君は更らにアメリカを廻つて歸へるといふ段取りになつたが一條君の說では航海中の船中が二ヶ月あるので、この船の中で兎に仔を產ませ、三百羽のものなら日本へ着くころは一千羽以上になつてゐる筈の兎は、途中で死んで數が却つて減つてゐる位なのも、今から思ふと滑稽だつたが、更らに、困つたことには、兎が日本へ着いた頃から次第に世間の樣子が變つて、先日まで一羽五十圓の百圓のといつたものが、一羽三十圓となり、二十圓と下り、はては生れたての仔兎など夜店で一羽二三圓で賣つてゐるといふ始末だつたから、これで損の無いワケはなく、市外野方町に造つた養兎場の管理費ばかりでも月々丸損、旅費その他數萬金の元を投じた此兎事業は、全く失敗に終り、のみならず雜誌の方も毎月出るべきものが、遲れたり出なかつたりで、この一條仁君では僅か一年有半の間に私も徹底的に損をした。

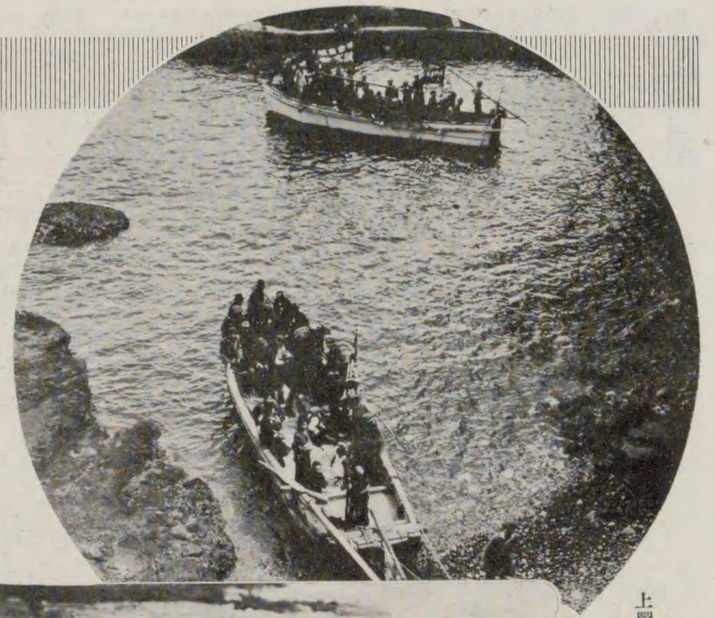
思へば、私の不明もあるが、一條君の見込み違ひと本場歐洲云々の誤植が主なる原因なのであるから、全く事業は愼重にせねばならぬものである。

大正十四年四月荒川觀櫻會

上圖は兩國河岸出發の剃那・中右は江北園で繩飛び左は日本橋美妓連・下圖は船中の來賓

店員慰勞會

昭和二年四月熱海に於いて擧行

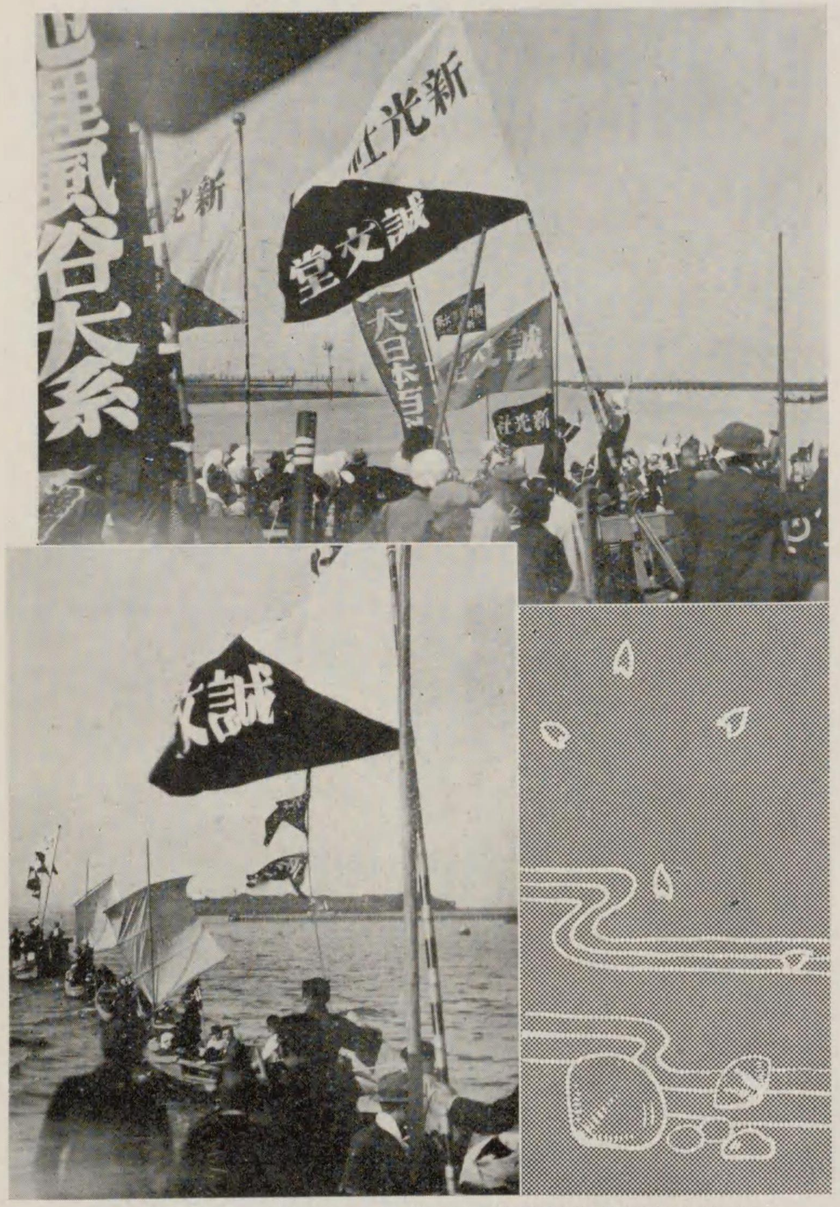


上圖は赤根公園附近の舟遊・下圖は赤根公園釣堀に於ける私と家族（洋服の少年は店員倉木君の長男）

大正十五年四月の飛鳥山觀櫻會

上下兩圖は來賓と日本橋美妓連・中は美妓連の假裝とその演藝

東京灣舟遊



昭和五年四月擧行店員及び仕入先の慰勞の爲の汐干狩り

り掘芋とり狩茸・會安慰員店

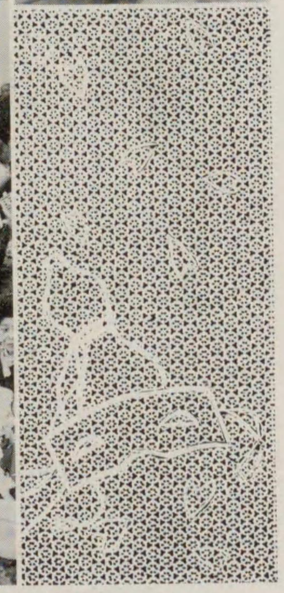
せ加參 。り掘芋賞懸走競は圖下くぷ一づ先てつ終をり狩茸は圖上
（てに石初總下月十年二和昭）孃諸の月仙と連君紅橋本日は人婦る

摘草と運動會

店員及其家族を中心とし仕入關係先招待の慰安會
（昭和四年四月下旬赤羽在浮間が原にて）

櫻川に於ける觀櫻會と霞ケ浦舟遊

船中の婦人は日本橋と土浦小林家の紅君連
〔昭和六年四月茨城縣土浦にて擧行〕



面場の道街崎山目段五藏臣忠るせ裝假の員店は圖下

脱線又脱線

上圖「仙月」に於けるる假面會右より宇野君・私・中山君・今津君・原田君
下圖は武州川越にて松川二郎氏撮影せるもの他は說明遠慮

道樂哲學

誰れやらが云つたが、出版業者に道樂者が多い。けれどもこれは決して獨り出版屋ばかりの話ではあるまいと思ふ。政黨屋然り、會社銀行屋然り、吳服洋品屋然り、賣藥化粧品屋然り、食料雜貨屋然り、何れも皆然り〳〵であるのである。眞面目な道學者だつて亦然りなのである。此れは男子の全野を通じて持つ通有性であらう。若し此の道に入つて尙遊び得ないものは、遊びの魅力をまだ知らないのか、知つても親しめないのか、又は力がないのか、さもなくば片輪の類であらう。事業と遊びとは常に併行するものであるとは、つい近頃までの私の誤つた信條であつた。

私をして所謂本屋の道樂者の代表的人物と謂ひ、何が凄いのか、よく小川は凄いといふ言葉を耳にする。私は此機會を利用して赤裸々に多年の馬鹿さ加減を告白し、過去を淸算して自から其蒙を啓きたいと思ふ。

私の遊び始まりは、主人の代理として宴會に行つたのが始めてであつた。前にも記した如く十七八才の半獨立商賣の自由な時代に覺えた酒と唄と、店員時代に奥さんが公認して下さつた酒とが祟り、又自惚れではないが、之でも若い時には眉目秀麗の美少年の部類の方であつたので、ドッチかと云へば持てる方の部類であつたのが惡かつた。かういふ下地があつた所へ、商賣は當る、金は儲かる、又出版業と云ふものが、新聞屋と云つては差障があるやうな氣がするから、此所では新聞社と云ひ、廣告取次店と云ふ、が新聞社が廣告吸收政策上、旅行に招待するとか、福引會とか、何週年記念だとか、廣告部長の送迎會だとか、小煩さい程の宴會をする。ソコへ亦廣告取次店が、やれ何だの彼だのと盛んに、油をかけては誘惑する。夫れが何れも、一流どころの美妓を侍らすのだから、これでは勢ひ、昨日の石部金吉も　今日は亦海鼠にならざるを得ないのである。大事な悴などはうつかり新聞社の會へは出せるものでない。ソコへ又紙屋とか、印刷屋とか、いろ〳〵の商賣關係が、御高説を拜聽――、と來るのだから、遊びの機會は益々繁くなり、下地は好きなり、御意はよしで、段々と遊びに興味を持つやうになつて了つたのである。此興味を持つ

たら最後、會計は何れ御一緒にと、料理屋及待合と信用取引が出來る、上手でもない唄をヨウ〳〵とか、良いお喉ですとか褒められるし、あの妓が岡惚れしてますよなんて御上手を言はれるし、一つには又虚榮も充分手傳つて、自ら求めて機會を作り、いらざる事にお客を招待するのであつた。

お客を招待することは、何れは多分に商賣が含まれてゐるが、効果的のもあれば、また効果的でないお客もある、偶には喜ばない、否此道に親しめないお客もあつた。効果的で、然も氣が合つて面白いお客は、よく引張り出したものだが、結果から見て、採算的には引合はぬが、夫れは善友の部に屬する方なのである。此遊びの口實になるやうな善友が品切れになると、同氣相求むる所謂惡友を誘ひ出したり、出されたりするのであつて、この所謂惡友なるものは、互に惡友を認識して居る輩だから、商賣に託つけられぬ、自分に都合の惡いときは、「ドウも小川も困つた奴だ」なぞと、お互に嘘八百を並べて、妻君を胡魔かし合つたものである。

かうした事が度重ると、末は惡事露現と云ふことになり、互に家庭が氣不味くなる。或

時など、惡友等相集まり、畢生の智惠を絞つて、妻君慰安會、否御機嫌コントロール會などを起したものだ。卽ち幹事は毎月一回持廻りとして妻君同伴夕食會をやる、まあ懺悔のやうな、申譯のやうな頗る妙なものであつたが、目的はお互に、惡友の妻君に安心させるためであつて、吾々達の遊びは絕體的心配がないなどと、釋明し合つた事などもあつた。

借金しながら遊ぶ人もある。あつちの料理屋、こつちの待合と、勘定も拂はず、不義理をしながら遊ぶ人もある位に、一度此花街の趣味を覺えたら、仲々足が拔けないものである。惡い手遊び八八なども多くは此時代に覺えて終ふのである。商賣の當初は金尾文淵堂の會で折々招待された位で、金尾の寺本君、東京堂の山添君、北隆館の岡崎君、目黑分店の戸田君などがいつも一緒であつて、其頃は頗る無事なものであつた。

私が無茶に遊び出したのは、忘れもしない大正五年の一月二十五日に腸チブスを病ひ、入院した以後の事であつた。當時店員は五六人も居たが、小店員ばかりで、賴るに足る者とては一人もなく、入院中はスツカリ世を儚んで、枕許に親戚緣者を招いで、一家の處置を宜しく賴んだりした位であるから、此の時スツカリ世の中を見る眼が狂つたのであらふ、それまで意志薄固、業務勉勵の男だつた私が、其時から盛んに遊び始め出したのである。

今から思ふと實に此の事こそ、私の一生を瑕物にした、生れて以來の最惡の時であつた。卽ち店員生活中は、努力精勵主義で、眞面目過ぎる君子人加島氏の薫陶を受け、更らに又獨立後は背水の陣を敷いて奮鬪し、堅固な精神に加ふるに、吉田、濱井、矢島氏等の如き、出版界では代表的堅實家と目さるゝ、先輩の指導を受けて來たので、是等の人々に影響せらるゝ所、大なるものがあつたにも拘らず、死線を彷徨した後の心の轉換は、遂に私を茶屋酒に親しましめ、一角の道樂者にして了つたのである。

遊びの內容を詳記することは、女房にも申譯ないし、子供の爲にもならぬし、第一親の脛を嚙ぢりながら遊ばれては大變。又一人前になつたとしても、儲ける道を知らずして遣はれては叶わぬから、是だけは此所に書かぬことゝした。が、兎に角、儲けた金を散じるのだから、誰れに遠慮がゐる筈もなし、酒が小川か、小川が酒が、廿年近く呑み續け、馬鹿の有りつたけ、面白いと云ふ面白いこと、到らざるなきまで、やつたことは事實で、夫れがもう嫌になつたのである。其現れが此頃の獵道樂となり、ゴルフもやろうと道具も買

込んだ譯である。

然らば遊びはスッカリ止めたかと云ふと、遺憾乍らまだ止まない。否止めないのである。恐らくそれは時が解決して呉れることであらふ。即ち年の加減といふものと、生命とである。如何に儲けた金とは云へ、廿年近くも遊び續けては、大抵倦怠を覺へるものだ、花街の裏面も分つて來れば嫌になる、遣つた金も生やさしい額ではない、醒めかゝつた今日此頃、死兒の歳を算へるが如く、聊か愚痴らしくも聞えるけれど、若し遊ばなかつたら、今度のやうな建築が四ツ、五ツは、今までに出來上つて居つたろうと、獨り苦笑を禁ぜざるほど、我身の馬鹿さ加減に呆れて居るのである。今若し、未だに私の遊びがありとすれば、夫れは惰勢なのである。遊びたいために、お客を招ばうなどとは思はない。下手な唄も唱いたくない、エロもグロも厭きた。おだてられても嬉しくない。モテる事も煩さくなつた。通人ぶつても見度くない。といふ風で、今は絶體に効果的を主眼とし、なるべく合理的な藝者拔きの料亭を撰んで、お客を招待する事として居る。

交際上の、やれ、誰れを招待するのと、以前のやうに一々申譯けの必要ない程、女房は

安心してゐる。お客になるのは、呼ぶから行くので、强てお客になりたくはない。それによつて取引を左右するほどの一年生ではない。小川は飲んでも金儲けを忘れない、などと惡口も出るが、私のやうな男でも、飲んで德したことはない。況や百害あつて、二十と利益を見出し得ない酒である。止められるなら止めて見たいが、之ばつかりは止みさうもない、何れは生命が欲しくなるであろう、其時こそは自然に止むものと思つてゐる。

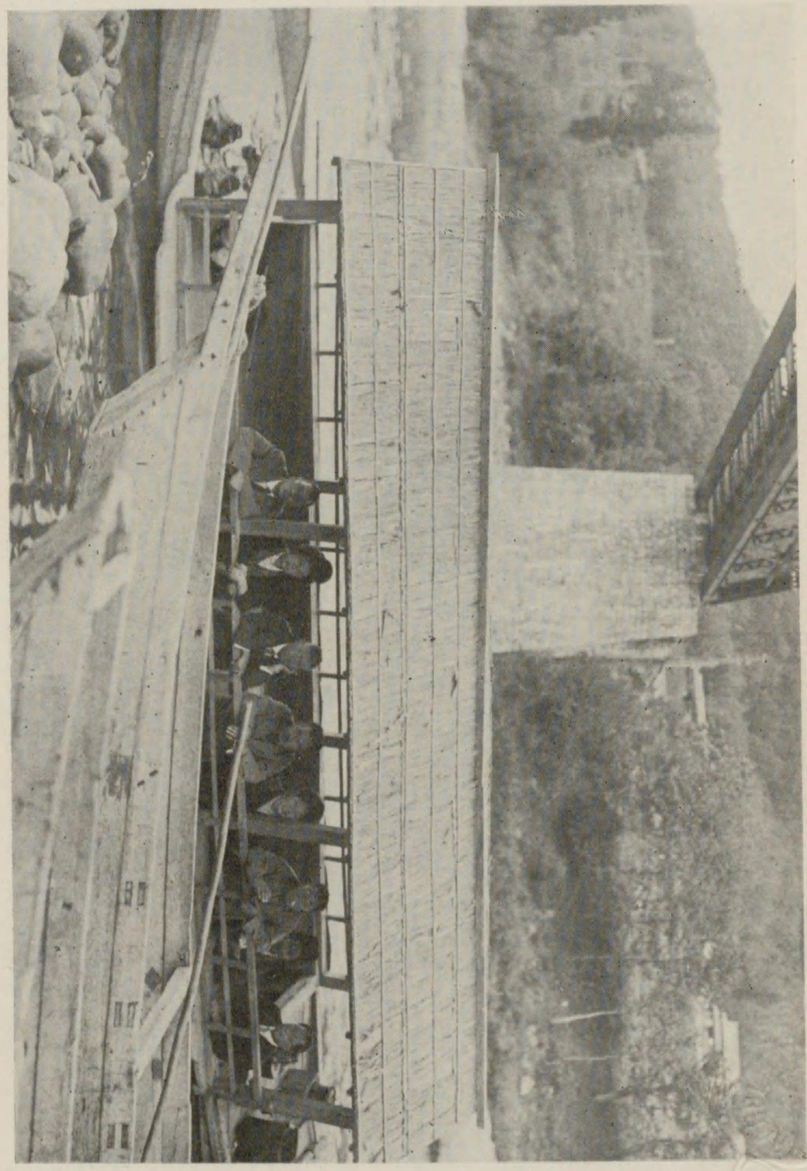
私の遊蕩二十年の生活には數多くの友人があつた。何れも、一藝一能、何等かの特色ある持主であつたゞけ、その遊びたるや慥かに面白く、又何かしら得る所も尠くなかつた。が、遊び仲間は所謂遊び仲間に過ぎぬから、心して遊ぶべきである。撰ぶべきである。夫れはイザといふとき割合に頼みにならぬものだからである。

單に親しみを作り、後日の思ひ出を作らんとするが如きは無用であり愚である。殊に酒に呑まれる人は注意すべきである。今、私は二十年の遊蕩生活を顧みて、多大の時間と金錢の浪費とは、徒らに家庭の平和を亂し、愛兒の幸福を犧牲にし、自己の完成を歪めたに、過ぎぬ事を悟りつゝあるのである。

思へば三日坊主で終たつが、去る大正八年と九年、二回に亘つて、友人知己に送つた**酒の挨拶**や、藝者と國交斷絶を試みんとしてやり得なかつたことや、遊び仕舞ひとしての**お客の引祝ひ**も、自然に解決の日がやがては來るのであらう。本項を終るに當つて當年の遊び友達諸君に對し、深甚の御厚意を謝すると共に、忌憚なき言辭を弄したことを陳謝する。

木曾路の旅 (1)

右より樺太工業會社中津川工場長古瀨一郎・同元高日出治・同加工部專務井口誠一君
私と君久照摩仲の裝束〔影撮日二月一十年六和昭てに裏所電發ムダ井大峽那惠〕



遊舟狭那惠

人間界のタンク小川君

仲摩照久

○

私は小川君とは小川君の至誠堂時代からの知り合ひであるばかりでなく、株式會社新光社創立以來、この新光社の關係で切つても切れぬ間柄となり、毎日同じ軒の下で事務を取つてゐるので、小川君に就ては比較的多く知つてゐる一人であると信ずる。

人間には多くの天分に惠まれたことが原因で成功した人と、之といふ天分の持ち合せはないが、努力一つで成功の月桂冠を得た人との二通りの型があるやうである。至誠堂の一店員から裸一貫で獨力奮闘今日の誠文堂を築き上げた小川君が勿論努力の人であることはいふまでもないが、夫れと同時に小川君は一面に於て非常に惠まれた多くの天分の持主

である。恐らく今日の出版人中小川君程傑出した様々の特長を有する人はあるまい。

此惠まれた特長があればこそ、不景氣風が如何に吹きすさんでも、小川君の仕事のみは何時も華々しく、何時も元氣其物である事が出來るのである。否仕事振りが華々しく、元氣其物であるのみでなく、同樣の華々しさ、同樣の旺盛さは、持つて生れた小川君の道樂癖に於ても同樣であるのである。同業出版界に於ても、小川君程好く遊び好く飲む人は多くはあるまい。近頃は少し趣味が代つて來たやうではあるが、持つて生れた持病はさう俄かに治らうとは思はれない。昔から道樂と商買とは兩立せないものと相場が極まつてゐて紀文大盡と唄はれた豪の者でさへ、遂には凋落の日はあつたのだ。處が如何に飲んでも、如何に遊んでも商買を忘れないのが小川君である。グテン〳〵に醉拂らつてゐても、扨て一旦夫れが商賣の話となると、ピンとして醉はない昔に歸り、算盤などの確かなことは驚く計りである。豐かに惠まれた天分がなければこんな藝當が出來る筈はない。小川君の遊びも可成り長いものだが、如何に遊んでも紀文大盡の徹を踏むことなく、否小川君の遊びと正比例して小川君の仕事の、グン〳〵伸びて行くのは、小川君に此惠まれた天分があるがためではあるまいか。

○

滿洲事變や上海事變の活動寫眞を見た人は、戰線を馳驅する怪物タンクを見られたことと思ふ。敵の機關銃の猛射を物ともせず、野を越え谷を渡り我物顏にのた打ち廻る樣は唯々壯觀といふの外はない。小川君といふ一個の存在を見る時、私には何うしても人間界に於ける此タンクのやうな氣がしてならない。何んな敵が出て來ても、何んな迫害があつても、何んな誘惑があつても、一流の快腕で之を征服し、自己の意中のものたらしめずに置かないのが小川君である。從つて小川君の向ふ處敵なく、なさんとしてなし得ざる事なしといふ氣がする。

之れは小川君が力の人であり、腕の人であるからだ。而して此力と腕とは例の小川君一流の押しと鬪爭性で、いやが上にも凄味を帶びて來る事さへもある。勿論小川君と雖、元來が商人であることは心得てゐるのであるから、何時でも腕節計りで行くのではない。妥協する必要のある場合には、寧ろ豹變に近いと思はれる位に其鬪爭性を裏切つて妥協する

のであるが、一度夫れは怪しからんとなると、例の一流の闘争性は、あらゆる障害を突破して最後の勝利を得るまで押し進まねば止まないのである。小川君は好く、俺には和戰兩用の準備があるといふ事をいふが、之れが小川君の本音で、味方としては極めて頼もしい味方であるが、敵として小川君程手剛い敵はあるまい。私が小川君を人間界のタンクといふのは此處だ。

怪物タンクがタンクたる所以は、其特種構造に基くのだ。小川君が人間界のタンクたる所以も小川君獨自の特種構造に原因するのである。夫れ丈けに小川君のやり方は、天眞爛漫で陰性な處は更にない。思うた事はボン〳〵いふし、開け放しの點に於ても小川君程開け放しの人は恐らくあるまい。

小川君を良く知らぬ人は、其一面丈けを見て小川君は策士だ。老獪だと思うてゐる人もあるやうであるが、所謂世の策士のやうに策を弄するのではない。敵彈雨中の中を怪物タンクが荒れ廻るやうに、總てを白日の下に露出して、臨機應變敵來らば之を斬り、妨ぐるものあらば之をなぎ倒し、思ひの儘に猪突猛進して行くのである。其處に被害者が出來ても

所謂世の策士のやうに陰險に計畫的にやるのではない。其處が小川君の小川君たる特色のある處で、中途如何なる敵が現はれても、持前の腕と力で臨機應變之を壓倒し得る丈けの自信があるからである。

○

小川君は運の好い男だ。何をやつても當るといふ話は好く人から聞く言葉である。私も嘗つてはさう思うたこともあるが、之は小川君の一面を見て一面を見ない人の言に過ぎない。勿論多少の例外はあるが、小川君の仕事は大體に於て總てが當つてゐる。運が好いと思はるゝのも當然であるか、之れは運が好いのでも何でもない。小川君が商機を見るに敏なからだ。

凡そ如何なる商買でも商機を見るの明がなかつたなら成功する氣遣はないが、小川君は此點に於て實に惠まれた傑出せる天分を持つてゐる。寧ろ天才的といふ言葉を用ゐた方が適當かも知れない。時勢に應じ情況に從ひ、次から次に賣れさうな本の種を嗅ぎ出して來ることは、到底他の企及を許さないものがある。

これは一例だが、彼の關東大震災直後に出した「大震大火の東京」である。大震災に會うたのが九月一日で、此出版の原稿製作にかゝつたのが九月の五日だつたといふ事である。大部分の人々は如何にして復興しようかと思案最中に、商機を見るに敏なる小川君は、一流の烱眼で、もう一當て當てようとかゝつたのである。印刷所も紙屋も何處に何うなつてゐるか分からぬ最中に、兎に角西に飛び東に走つて、晝夜兼行で纒め上げ、九月の二十一日には愈々花々しく賣り出したのである。勿論此際物が大當りに當つたことはいふまでもない。

小川君の商機を見るに敏なのは、此一事でも分るが、これは至誠堂時代以來本を賣るといふ事に、實際上の經驗と知識を有してゐることも原因であるかも知れないが、矢張り惠まれた天分が然からしめるのだ。震災後の自動車熱の黃金時代には、自動車の書を出し、ラヂオが盛んになるとラヂオ書に全力を傾注し、何れも破天荒の大當りで、今日の誠文堂發展の基礎を築いた等の如きは、單なる丁稚上りの連中の到底企及することの出來ない藝當であることはいふまでもない。

賣れさうな原稿を嗅ぎ出すことが上手であるばかりでなく、小川君は人のやつて何うにもかうにもしやうのない殘本とか紙型とかを甘く賣り拔くことに又頗る妙を得てゐる。小川君といふ伯樂に會へば死馬も亦息を吹き返すのである。近代社の「哲學講座」の如きは其適例で、或人の如きは夫れを引纒いでやるべく勸められたのであるか、氣が進まぬといふので、結局小川君が引受けてやつたのであるが、之又馬鹿當りでとう〳〵死馬の息を吹き返させたのである。其他之に類する例は擧げ來れば枚擧に遑がない。單に運が好い計りでは出來ない藝當ではあるまいか。

○

商機を見る事に敏なる計りが小川君ではない。愈々之といふ商機を見定めて、之を勇敢に大膽に實行するのが小川君である。圓本時代には新聞紙上の大宣傳は可成り流行したが之れは所謂一時の流行で、其前と其後を問はず、終始一貫新聞紙上の廣告を賑はしてゐるのは誠文堂の廣告である。好く廣告するが、あれで引き合ふだらうかとは、好く聞かれる話だが、算盤に達者の小川君が、さう辻褄の合はぬ事をやる筈はない。其處には小川君獨

特の算盤があつて、人から見れば寧ろ冒險的だと思はれるまでに、大膽に勇敢に猛進し行くのである。

小川式算盤の持ち合せは、私には不幸にしてないが、大膽に勇敢にやる事には私も敢へて人後に落ちないと自信はしてゐたが、小川君の大膽さには到底及ばない。それは全く冒險だと私にさへ思はるゝことまで、小川君は一流の算盤で平然として押し進むのだ。「日本地理風俗大系」で改造社と競爭となつた時の如きは、小川君の持つて生れた太つ腹を最も遺憾なく發揮した時で、向ふ見ずの本尊といはれてゐた私が、最後には寧ろ小川君に引ずられ膀ちとなり、四萬圓の豫算でやつた宣傳費をとう〳〵八萬圓も使つてしまつた。

「日本地理風俗大系」は一つは競爭意識に捕はれた關係もあるので、結局八萬圓餘の大穴を明けてしまつたが、之れは例外で如何に勇敢に花々しくやつても結局算盤の桁を外さぬのが小川式である。他所目には危い橋を渡つてゐるやうに見えても、其所には小川式算盤があつて、小川君の言葉を借りていへば、宣傳費さへ拂へれば、後は「殘本儲け」「紙型儲け」となつて、結局相當の利益計算が見らるゝのである。此處が小川君が驅け出しの出版屋と異なる處で、小川君の手にかゝれば普通の人では何とも仕樣のない「殘本」や「紙型」が何時しか金に代つて、思はぬ儲けをしてゐるのである。「大日本百科全集」の如きは其適例で、最初の豫約では寧ろ成功とはいはれないやうだつたが、小川君獨特の特賣の方法で結局多大な利益を上げてゐることは人の知る通りで、「性典」一冊でも恐らく二三萬圓は儲かつたらしい。

○

商機を見るに敏で、之を行ふに大膽で勇敢である小川君は、又一面に於て非常に用意周到な人である。或場合には寧ろ細心過ぎるとさへ思はるゝことがある。小川君今日の成功は此三大特質の融合一致せる結果であることはいふまでもない。

試みに小川君に或る仕事を持ち込んだとする。商機を見るに敏なる小川君の事であるから、やるかやらぬか即答が出來ぬ筈はない。處が多くの場合中々即答せない。何れ好く考へた上でといふのが極り文句である。而して自分のみで確信のつき兼ねる問題は、二人三人と人の意見を聞くのである。さうして多くの人の意見を參酌して、初めて最後の決心を

極めるのである。先づ今日の小川君位の地位になると、大概の人は面目上からでも即答したがるものである。處が小川君には夫れが殆んどない。此位の事が即答出來ぬかと思はることまで考慮の餘裕を殘して置くのである。

尤も猿も木から落ちることがある譯で、小川君と雖此持ち前の用意周到さを忘れることがないでもない。雜誌「ゲーム」の創刊や、アンゴラ兎は其適例で、何れも小川君に似合はぬ赤字を出してゐるのであるが、之れは最近餘りに順調に行き過ぎて調子に乘つた結果であらう。尠なからぬおきゆうをすえられた今日では、賢明な小川君が再び此轍を踏む筈はない。兎に角、時に脫線はあつても細心で用意周到なことは、小川君の性格を通して最も著しい特長である。

世の中に所謂石橋を叩いて渡る式の人は尠なくないが、餘りに用意周到過ぎると、其仕事に生氣がなくなり、大きな仕事は出來なくなる。處が小川君は細心で用意周到な上に、一度決すれば之を行ふに大膽過ぎる程大膽である。而かも商機を見るに敏なのであるから小川君の仕事が、隆々として今日の盛況を見るに至つたのも當然といはねばならぬ。

○

今一つ小川君の特長として數へねばならぬ事は、其精力の絕倫な事である。之は身體が非常に健康なためかも知れないが、兎に角驚くべき精力の持主である。一日三時間寢れば充分だと小川君はいうてゐる。多少の掛け値はあるか知らないが、實際四五時間寢れば仕事をするには差支ないらしい。尤も如何に醉拂つてゐても算盤を取ればピンとして來る小川君であるから一晩二晩は別に寢ぬでも仕事には差支ないかも知れない。

私の知る限りの小川君は　毎晩宴會とか相談會とか、單なる酒飲み會とかあつて、夜家に歸つて寢るのは十二時前後より早い事はあるまい。夫れにも拘はらず起床は六時前後だと聞いてゐる。而かもそれが一日二日でなく、一年三百六十五日を通じてゞある。其間に二日醉で頭が重いとか、疲れて今日は仕事が厭だといふことを聞いたことがない。

中でも最近私の舌を卷いたのは昨秋加工製紙の井口專務の招待で岐阜縣中津川の樺太工業會社の工場見學に行つた時である。私も下手な鐵砲を初めた計りの際で、木曾路に來たを幸ひ翌朝五時の出發で、中津川の町から二里計りの山中に雉撃ちに行く事となり、其晩

は樺太工業會社主催の宴會に行つたのであるが、木曾節の名所丈けに、いや早や飛んだ亂痴氣騒ぎとなり、藝者もはしやげば主客共に又はしやぐといふ譯で、十二時を廻つたが宴は中々果てさうもない。酒を飲まない上に無藝の私では、幾等お附合ひでもさう〳〵辛棒し切れなくなつて、こつそり拔け出して寢てしまつたが、時々眼を醒して時計を見ると三時近く針は廻つてゐるが、宴會場の大鼓の音は未だ止まない。好くも飲めるものだと感心しつゝ、此分では朝の五時出發の雉撃ちの約束はお流れだと、獨り極めに極めて明朝は一つ朝寢をしてやらうと、愈々落ち附いて寢込んでしまつた。

すると暫らくたつと枕許に來て起す者があるではないか、ハッと眼を醒して見ると夫れは小川君だ。モウ約束の五時だよ。早く起きないかともう獵仕度をしてゐるのである。それから私も飛び起きて大急ぎで仕度して玄關へ下りると、ソコに小川君は未だ呑み足らぬと見え、熱燗をコップで二杯も引掛けて居た。夫れから二人で自動車を飛して、目的の山に出掛けたのであるが、昨晩三時過ぎまで飲んで騒いでゐた人とは何うしても見えない。寧ろ私よりも數倍の元氣で、大きな山を三つ計り驅けずり廻り、前日來の約束であつた小鳥狩の中食會場へ正午に歸り、午後は船で惠那峽下り、夜分はまた宴會と、正午から打續けて呑んで居つたが、其時計りは小川君の精力の絶倫とその呑み振りにつく〴〵驚いてしまつた。

○

兎に角人間界のタンクである小川君は、普通の人間に見ることの出來ない樣々な傑出した特長の持主である。之を證明する材料は、書けば未だ外に澤山あるが、餘り長くなるから此邊で御免を蒙ることゝするが、小川君の事業も今が最も油の載つた最中である。之をして有終の美をなさしむるのは、一つにかゝつて今後の努力にあることはいふまでもない。小川君には一面に於て非難も相當にある。又敵も尠なくないやうだ。けれど之は小川君が餘りにも腕の人であり、切れ過ぎるからで、文字通り怪物タンクの威力を發揮し過ぎた結果である。今後の小川君の進路には最早怪物タンクの威力を借らねばならぬやうなそんな頑强な敵軍は澤山はあるまい。商賣は繁昌して新築は出來た。折角自重あらん事を望む次第である。

「商戰三十年」人名索引

ア之部

天野　四郎……一六〇
安藤　亮……二二四
安藤　修治……二二四
有賀　彰司……九
東　興亮……二〇六
新井武之介……一九〇
赤石　喜平……一六六
赤阪　長助……九〇・二二五
赤津　誠內……一五五
阿　部（川瀨書店）……一九一
阿部　富鷹……二〇二
青木　孝……二二五
麻生　久……二二六

イ之部

一氏　義良……六三・八四・一四九
一條　仁……二二二・二四八・二五〇
井上　末吉……一九・九五・一一一
井上　泰次……二〇九
井口　誠一……一三六
井澤　善也……二一一
今井　扶……一四二
今津　隆治……二二二
今關　初……二一一
伊藤　貫一……八・一〇・一二・二四・一〇六・一一一
伊藤　賢治……二一〇
伊藤清次郎……一九二
伊藤　春水……一六七・二〇二
伊藤　秀吉……一八
伊　藤　某（博文堂）……一八
入船　勝治……二〇九
岩田　岩吉……二二六
岩上合名會社……一八五
板倉宏之助……二一〇
池田　定……一八四
池松　常雄……一五九
石塚　隆美……一四四・二二五
石塚　市郎……二〇五

石井　重美……一二六
石井　勇義……一二一・一四九
石山喜三郎……一三七
石川　寅吉……六四・二二三
石川　武美……一七
磯部辰次郎……一四〇
犬養　毅……一六八
猪木　卓二……一三六

ウ之部

上原才一郎……一四〇・二二四
内山　嘉六……二〇三
宇野　富夫……二九・八二・一三九・二〇二・二一四
梅林　寛治……八六・一二九・一九三
鵜沼　直……一五一
馬　俊雄……二五二

オ之部

及川伍三治……二三・二一八
大熊　整……二〇六
大島　政治……二九
大島　久吉……一二六・二〇四
大葉　久吉……九三・一四三
大野　孫平……八九・九八・二二五
大塚　周吉……二・九四・一〇〇
大坪　萬六……一九七
大泉　黒石……二二五
大澤　清助……二〇三
大倉保五郎……二一五・二二四
大橋　松雄……二〇六
太田　米吉……二〇七
奥野他見男……六八
小倉彌太郎……一六〇
小野寺製本所……二〇九
小野五車堂……一八五
小野　昇六……一八七
小澤吉三郎……一九一
小澤　寛……一一一
小川萬太郎……八二・二四三
小川　三郎……二〇六
小川　寛……三九・四三
岡崎　廉三……二五・三九・六七
岡山　保孝……二一〇
岡菊　書店……一九三

岡原佐太郎……一九六

カ之部

加島　虎吉……二三・一〇〇
加島　謙次……九・一二二
加藤　雄策……二一〇・二二四
加藤　重雄……二四九
加藤　美命……五八・六三・七〇・一一五・一四九
加瀬文治郎……一六
加瀬　直司……三
勝田重太朗……一六八
川上　元司……四〇
川崎　佐吉……二〇五
川崎　佐一……二〇五
川瀬　光吉……一九五
柏　佐一郎……一九四
樫村喜久太郎……二二一
河合　晋……二二五
神代　種亮……六三
金子　直治……一八八
金尾種次郎……二五
雁金　準一……一五六
鹿島佐太郎……二一〇

キ之部

岸本淺次郎……一三六・二〇四
岸本　榮七……一九三
岸野　英一……一八四
北村榮二郎……一六〇
木村　義雄……一五五・二四一
木村　興作……一四二
木下　莊……二一〇
清澤　巖……一六〇
菊竹　嘉市……一九七
菊竹　大造……一九七

ク之部

倉本　長治……七一・二五二

コ之部

兒島　保……一九・八九・九五
古賀　文雄……一六〇
國領友太郎……九八・二二五
小林　鶯里……二二六
小早川彦一……一六〇
小酒井五一郎……二二・二二五